

## アカデミックハザード 加治の物語 連載 1

### 大学院進学

加治雅人は、東都大学量子環境情報学科の四年生になって悩んでいた。大学院進学を考えているが、どこの研究室に進むかで迷っているのである。

この時期、学生は就職と進学を選択することになる。東都大学では、学生の半数が大学院志望である。

大学院に進学する学生にとって、配属先の研究室選択は、その後の人生に大きな影響を与える。あまり知られていないが、同じ学科であっても、先生によって研究テーマはまったく異なるからだ。さらに、将来、研究者になりたいと考えている加治にとっては、どの先生に師事するかということも重要となってくる。

この学科で加治が尊敬するのは、助教授の板倉である。しかし、学科のボスの白井教授の意向で、板倉は、なぜか大学院生を指導できないことになっていた。学生にとっては大いに不満であるが、白井は、現工学部長で、学長の東郷とも懇意にしている。その意向には、誰も逆らえないのである。

加治は白井研究室にだけは行きたくないと考えていた。講義がつまらないうえに、学生の目からみても、あまり魅力のある研究をしているようにみえないからだ。なぜか、世間の評価は高いようだが、白井をそばで見ている学生の評判は決してよくなかった。

これに対し、板倉の講義は、いつも示唆に富むものであった。知的欲求を大いに満たしてくれるうえ、研究への情熱を喚起してくれる。板倉の講義と比較すると、他の教授連中の講義は、評価するに値しない。何とか山根教授と湯川教授のふたりが合格点すれすれであろうか。

加治は、ふたりの研究室の研究テーマを見てみた。

山根教授は量子工学と呼ばれる分野を研究している。最近では量子コンピュータの開発に取り組んでいるという。なにやら難しそうなテーマだ。加治は、量子力学の講義で苦労したことを思い出した。シュレディンガー方程式を解くこと自体は問題がないが、なぜ電子の運動が、あのような微分方程式で記述されるかが分からない。

板倉に、それとなく相談したら

「量子力学を創った人間たちえでさえ、よく理解していないのだから、学生がそこまで理解する必要はない」

と言われた。しかし、そんなことで、本当に量子力学の応用が可能なのだろうか。加治は疑問に感じていた。

湯川教授は、結晶工学と呼ばれる分野を研究している。いろいろな物質の結晶をつくって評価するという研究のようだ。学生実験で、融けた酸化物をゆっくり冷やして結晶をつくる実験をしたことがある。やけに時間がかかったが、できた結晶をみて感激した。まるで、自分の芸術作品のようである。加治は、小さい頃から手先が器用だったので、手を動かす作業が大好きだった。悩んだすえ、加治は湯川教授の研究室を志望することにした。

大学院志望届けを出すとすぐに、白井から呼び出しがかかった。加治ははじめて、白井教授室を訪れた。ドアを開けると、秘書の控え室がある。柳井さんという少し年配の女性で、二十年以上も白井教授の秘書を勤めているということであった。

「おはようございます」

と加治が声をかけると、柳井さんは

「白井先生が中でお待ちです。どうぞお入り下さい」

と案内してくれた。

重厚な扉を開けて、中に入るとそこは別世界であった。大きなマホガニー製の机と、立派な応接セットが並んでいる。壁には、本物かどうかは分からないが、有名な洋画が飾られている。

加治は、部屋に入るなり嫌なにおいを感じた。タバコのにおいである。どうやら白井は愛煙家らしい。空気清浄機が置いているが、タバコのにおいは消えないものである。

加治が入ると、白井は電話中であった。受話器を持ちながら応接椅子にすわるように指示された。

白井は受話器に向かって

「局長、そこはよろしく申し上げます。はい、こちらも、それなりの覚悟はありますから」

と大きな声でしゃべっている。しばらく電話で話してから、ようやく応接セットの椅子に腰掛けた。

加治は、白井の太り方は尋常ではないなとあらためて思った。ベルトでは、

腹回りが足りずに、サスペンダーを使っている。日本人にはめずらしい太り方だ。そういえば、板倉が「デブガエル」と呼んでいるのを聞いたことがある。確かに、いい表現だ。

白井は、加治を見て、にこっと笑った。

「いや申し訳ない。文化省の局長から、今度、国を挙げて取り組む予定の国家プロジェクトのリーダーになってくれと頼まれていたんだ。多忙だからと断ろうとしたんだが、総額十億円のプロジェクトでは、そう簡単にことわれない。それに、どうしてもお願いしますと再三言われてね。本当に困ってしまうよ」

困ってしまうといいながら、さりげなく、文化省や局長、そして依頼ということ話すのは、自分がいかに重要人物かをひけらかしているようにも感じる。それにしても、十億円のプロジェクトとは話が大きい。一万円でも大金に思える加治には想像もつかない世界である。

加治は、そんな大物教授が、なぜ自分を呼び出したのか不思議に思った。

「白井先生、いったい私に何の用でしょうか？」

すると、白井はおもむろにこう切り出した。

「今度、君は大学院に進学するらしいね」

「はい、そうです」

「どうして、湯川研を志望したのかね」

加治は驚いた。自分の志望先を白井はすでに知っているようだ。そして、返答にこまった。まさか、山根と湯川以外は選択枝からはずれていたなどとは答えられない。

少し考えてから、加治はこう説明した。

「私は結晶づくりが、とても気に入っています。自分の芸術作品をつくるような気がするからです。それで、結晶成長の得意な湯川先生のところで修行してみたいと思ったのです」

白井は

「君ほどの成績なら、うちの研究室を志望しても、まず間違いなく合格すると思うよ」

と言ってきた。

加治は、学科で一番の成績である。量子環境情報学科では、成績上位者は白井研に進むと言う不文律がある。白井の誘いを断ると、あとでしっぺ返し

がくるという話を聞いたこともある。他の教授もおそれて、白井が目をつけた学生には、必ず白井研に進むようにと指導した。

しかし、白井研の評判はあまりよくない。修士課程に進んだ学生で、白井研の博士課程に進みたいというものは皆無であった。いま、白井研には、博士の学生が六名ほどいるが、なぜか、みな他大学出身者である。

修士の二年間で、みな嫌気がさすからだと言われている。

「それに、湯川先生は、そろそろ定年が近い。予算もあまり持っていないようだし、そんな研究室に入っても苦勞するだけだと思うよ」

と言った。湯川は白井の先輩にあたるが、白井は完全に湯川のことを見下していた。

「もし結晶づくりをしたいのなら、うちの研究室にも立派な装置はある。それを使ったらどうだ」

とも言った。白井は、いまからでも遅くないから、志望の研究室を変更するようにしつこく勧めた。加治は、よく考えてみますと言って部屋を出た。

結局、加治は白井の誘いを断って、湯川研究室に志望を出した。せっかく、誘ってくれた白井には申し訳ないと思ったが、いろいろなひとの意見を聞くと、本当に結晶づくりがしたいのなら、湯川研に行くべきだという助言が多かったからである。

加治の尊敬する板倉は

「白井のところだけはやめた方がいい」

と断言している。

加治は、大学院の試験も一番で合格した。そして、湯川研に正式に進むことになった。

東都大学では、大学院進学予定の研究室で卒業研究をすることになっている。湯川研究室の学生数は、大学院生もすべて入れて、わずかに四人であった。加治は、その方がよいと思った。家族的な雰囲気があり、先輩の後輩に対する面倒見もいいからだ。何よりも、湯川教授の指導をたっぷり受けることができる。

湯川教授は、結晶づくりの専門家である。新しい半導体などの結晶づくりに成功していて、世界的にも有名であった。海外の研究機関からも「ユカワの結晶」が欲しいと依頼されることも多いようだ。

それなのに、湯川研究室が恵まれないのは、白井のいじめにあっているか

らである。誰かが湯川の研究室に進学を希望すると、白井はいつも、そのじやまをしようとした。

白井は

「若いころ、湯川に散々いじめられた」

と根に持っているのである。湯川に言わせれば、手先の不器用な白井を徹底的に指導してやったということになるのだが、白井は、しごかれたとしか思っていない。

最近では、国の学術研究補助金も、白井が審査委員を務めているので、湯川の申請は内容も吟味せずに却下するよう仕組まれていた。

それでも、湯川の結晶づくりは学内の研究者から高く評価されていたので、結晶用の原料などは、他の研究室からただで分けてもらうことができた。そのかわり、できた結晶を渡すのである。このような共同研究というかたちをとって、なんとか予算を確保しているのである。

あとは、学術研究補助金でも、いちばん額の少ない一 万円以下ものには、何度かあたったことがある。白井も、その程度の額までは、口出ししないということなのだろう。

研究者にとって、質のよい結晶は宝物である。新物質が見つかった時には、その特性を正しく評価するには、良質な結晶が必要となる。質のわるい結晶では、不純物や欠陥の影響で、苦労して物性を評価しても、どれが本当の性質かが分からなくなってしまうからだ。

加治は、湯川の指導で、結晶づくりのノウハウを吸収していった。結晶づくりには、独特の勘も重要であるが、学問的なバックグラウンドもかなり必要である。結晶成長の素過程の理解や、結晶構造の理解など、マスターすべき学問領域は広い。

湯川は、すぐに加治の才能を見抜いた。手先が器用なだけでなく、学者としても優れている。湯川は、加治を自分の後継者にぜひ育てたいと思うようになっていった。

次第に加治と湯川は、二人三脚で結晶づくりを始めるようになった。それまで、湯川ひとりで結晶成長を行っていた時には、経験則に基づくノウハウ的な要素が強かったが、加治が加わったことで、より学問的な要素が加味されるようになった。特に熱力学を基礎とするコンピュータシミュレーションと、反応速度論、および熱伝導論を組み合わせた解析により、湯川のノウハ

ウの学問的な裏づけが得られるようになっていった。

加治は、湯川の勧めで博士課程に進学することになった。この時、湯川の教授としての任期が、残り三年しかないということで白井からクレームがついた。しかし、優秀な加治ならば三年で博士論文を仕上げられるであろうということで、学科主任の山根教授がとりなしてくれたのである。

## 白井研

加治と同期で、大学院の修士課程に進んだ大学院生はふたりとも、企業へ就職した。そのふたりはにがにがしように

「こんな処にいても、将来はない」

とはき捨てた。

白井研究室の博士課程に在籍している人間は、すべて他大学の出身者である。なぜか、三流私立大学の出身者で占められている。いまは、ポスドクの種田が一応、研究室の面倒を見てはいるが、まったく指導者としての体をなしていない。装置を使えば、すぐに壊してしまうし、研究のことを相談しても、まともな助言は得られない。

白井研の大学院生は、どうしてあんな人間に研究室の運営を任せているのかと不満であったが、当の白井は、研究室のことなど、あまり気にかけていない様子である。

しかも、白井は、せっかく高価な装置を購入しても、なかなか学生に使用許可を出してくれないのだという。あれでは、宝の持ち腐れと学生は不満をもらしている。もちろん、ポスドクの種田では、高価な装置をすぐに壊してしまうから、使用を制限するというのは、分からないでもないが、梱包をろくに解かない装置さえある。実は、白井には、装置を中古市場に横流ししているのではないかという噂が流れていた。

さらに、大学院生に対する白井の指導不足も不興を買う原因となっていた。東都大学では、修士課程在学中に学会発表を二回するのがノルマとなっている。大学院生は、学会発表用のテーマでさえ自分達で探さなければならない。

白井は、大学の要職についているため、多忙という理由で、めったに指導に来ない。さすがに、学会発表前には一応、発表内容を見てくれるが、そのコメントのレベルの低さに院生はみな驚いた。

「これが、東都大学教授の助言であろうか」

大学を出たばかりの彼らでさえ、あきれるのであるから、白井のレベルがどの程度か分かるであろう。

ディスカッションの時の白井の口癖は  
「君の研究のコンセプトはなんですか」  
と

「君の研究のポリシーはなんですか」  
のふたつである。

まず、横文字の具体的意味がよく分からない。それに、研究指針や基本方針を聞いているのであれば、むしろ、それを示すのが指導教授の役目ではないのか。大学院生が不満に思うのも当然である。

しかも、学生がうまく答えられないと、白井は  
「それだから、君はだめなんだ」  
と叱責する。

学内政治にばかり傾注しているので、研究がおろそかになっているという指摘もあるが、板倉に言わせると、最初からバカだったと辛らつである。

加治は同期のふたりの大学院生の話を聞くにつれ、白井研究室に進まずに本当に良かったとつくづく思った。

## 初恋

加治が博士課程に進学した年に、学科事務室に新しい事務員が赴任してきた。佐々木恭子さんである。都内にある短大の英文科を卒業して、すぐに東都大学への就職が決まっらしい。それまで勤めていた老齢の女性事務員が定年退職で辞めた後釜である。

東都大学の量子環境情報学科には、女子学生がほとんどいない。そのため、加治たち学生が女性と接する機会はほとんどない。年若い女性が身近に来たということだけで、学生はざわついた。しかも、佐々木さんは楚々とした美人である。そのうえ、つんと澄ましたところがなく、誰にでもやさしく接してくれる。

実は、東都大学では、若い独身女性が事務室に長く勤めていることはほとんどない。働いて数年もしないうちに学生と結婚してしまうからだ。就職が

決まった学生がプロポーズするのである。学生のあいだでは、誰が佐々木さんを射止めるかがちょっとした話題となっていた。

事務には長谷川恵理さんという派遣の女子事務員もいる。スタイルは抜群にいいとの評判だが、いかんせん身なりを気にしない。黒く太いフレームのメガネをかけているうえに、頭も漫画のサザエさんのようにちりちりパーマにしている。経理担当であるから、学生との接触はあまりないので、加治もあまり話をしたことがない。

長谷川さんがメガネを外した顔を偶然みたことのある学生は  
「ものすごい美人だった」

と言っているが、真偽のほどは定かではない。

その点、佐々木さんは学生窓口の担当であるから、多くの学生と毎日のように接している。加治も、佐々木さんと会うのを楽しみにしていた。

ただし、加治のように博士課程に進む学生には、女性との交際はほとんど縁がなかった。なにしろ、博士論文を完成させるのに多くの時間をさかれるうえに、将来が保障されていないからだ。

同じ大学院でも、修士を終えて就職する学生には、民間企業からの引き手数多であるが、博士課程を修了した学生が就職できるのは、大学か公立の研究機関に限られる。民間企業の研究所に就職する手もあるが、それは非常に狭き門である。

文化省の統計によると、博士課程を修了した学生が定職につけるのは、わずか一五%程度に過ぎない。日本の将来が暗いのは、本来は、博士課程に進んで、日本の科学技術の未来を担ってほしい人材が、この苦境のために、進学をあきらめるケースが圧倒的に多いという現実である。しかも、多額の税金をかけて育てあげた博士が力を発揮する場所がないのである。

佐々木さんが学科事務室に来てくれたおかげで、加治の大学院生活は明るくなった。たとえ、片思いであったとしても、思いを寄せる人がいるということは、人生に潤いを与えるものである。

「佐々木さん、今度、学会に発表するので、申請書類を出したいのですが、いただけますか」

「加治さんは、学会で発表するのですか。すごいですね」

佐々木さんは、単純に感心してくれる。

そう言われると、加治はうれしくなる。そして、つぎも頑張ろうという気

がわいてくる。男は単純というが、思いを寄せるひとがいるということだけで幸せなのである。

しかし、加治は自分から決してその思いを打ち明ける気はなかった。遠くから佐々木さんを見ているだけで十分である。そして、心で密かに思った。もし、将来、自分が研究者としてひとり立ちできるようになったら、そして、その時、佐々木さんがまだ独身だったならば、自分の思いをぶつけてみよう。

### 成果の搾取

博士課程に進んで、加治は、湯川教授と一緒に、ある種のセラミックスの結晶づくりに挑戦していた。作り方は、ごく一般的なもので、溶けた原料に種結晶をつけてゆっくりと引き上げていく手法である。原料が固まる段階で、種結晶と同じ方位のものが成長していくので、方位のそろった結晶をつくることができる。

しかし、このセラミックスには反応性の高いバリウムという元素が入っている。このバリウムが、どうしても、融液を入れたルツボ材料と反応してしまうのである。その結果、ルツボから汚れが結晶に入り込んでしまう。加治と湯川は、いろいろな材料のルツボを試してみたが、この汚れをとることはできなかった。

あきらめかけた時、加治にひとつのアイデアが浮かんだ。汚れた結晶の中に、この汚染物質を主成分とする化合物が見つかったのだ。この化合物は、バリウムとジルコニウムからできた酸化物であった。

加治は湯川に自分のアイデアをぶつけてみた。

「先生、この化合物が結晶と共存できるということは、この化合物をつくるジルコニウム酸化物を融液の中にあらかじめ入れておけば、バリウムは、化合物に吸い寄せられるのではないのでしょうか」

すると湯川は

「それは面白いアイデアだ。さっそく実験してみよう」

と言ってくれた。

加治は、この化合物を融液に浸して、目的の化合物の結晶成長を試みた。そして、見事に良質な結晶の作製に成功したのである。加治と湯川は大喜びした。この成功は世界的にも大きな話題になるはずであった。

湯川は、同僚にこの成功をこっそり打ち明けた。すると、つぎの日に白井から呼び出しがかかった。

白井は

「湯川先生、おめでとうございます。大変な成果を出されたらしいですね。私も同じ学科の一員として喜んでおります」

白井は、湯川たちの仕事をひとしきり誉めた後、結晶を自分にもぜひ見せて欲しいと懇願した。湯川は、あまり、乗り気がしなかったが、白井の要求があまりにもしつこいので結晶を見せた。

すると、白井は、しばらく結晶をあずからせて欲しいと言ってきた。湯川は、大いに悩んだが、大学で権力を欲しいままにしている白井に下手に逆らうと、どんな仕返しをされるか分からない。湯川は、加治の将来のことを考えていた。湯川は、加治を自分の後継者として、ぜひ東都大学に残したい。しかし、自分の任期はもうすぐ終わってしまう。その後は、白井に託すしかない。しづしづながら、湯川は白井に結晶を渡した。

ところが、白井は預かった結晶をなかなか返してくれない。その後、何度か結晶を返して欲しいと懇願したが

「また作れば良いじゃないですか」

という生返事で、結局、結晶は帰ってこなかった。

それから、数ヶ月して、加治は驚くべき記事を目にする。東都大学の白井グループが合成に成功した結晶で、海外の大学や研究機関が画期的な成果を得たという発表が新聞に報じられたのである。

加治が、湯川に、この話をすると、湯川は愕然とした。おそらく白井は、湯川からだまし取った結晶を、勝手に海外の研究機関に横流ししていたのだ。

湯川は、白井のところに抗議しにいった。

「おい白井君、これはいったいどういうことなんだ」

新聞記事を見せながら、湯川は白井に詰め寄った。

「ここに出ている結晶とは、僕がこの前、君に渡したものではないのかね」

すると白井は

「ああ、この結晶ですか。これは、うちの研究室にいるポスドクの種田がつくったものです」

としらをきった。

湯川は、ポスドクの種田のことを思い浮かべた。あのやる気のまるでない

男か。あんな不器用なやつに結晶成長などできるわけがない。白井は何を言い出すのだろう。

湯川は

「あの結晶ではないと言い張るなら、すぐに返してもらおう」

と迫った。すると驚いたことに、白井は

「あの結晶とは、いったいどの結晶の話でしょうか」

ととぼけるではないか。

「この前、どうしても君が欲しいというから渡したものだよ。忘れたとは言わせんぞ」

「私に記憶はありませんが、いつの話でしょうか」

湯川は切れた。白井は知らぬ存ぜぬを通すつもりらしい。

「お前が、そのつもりなら、こちらにも考えがある。大学に訴えてやる」

湯川は、白井の部屋を出ると、すぐに大学の本部棟に行き、事務方に直談判した。

担当者は湯川の剣幕に戸惑った様子で

「わたしでは判断しかねますので、事務局長に相談してみます」

そう言うと、部屋を出ていった。ところが、一時間しても帰ってこない。

湯川が、いったい何をしているんだといらいらしていると、そこへ事務局長の赤西があらわれた。事務部門のトップである。

「湯川先生、大変失礼いたしました。担当者の話がピンと来なかったものですから、てまどってしまいました。もし、先生のいわれていることが事実としたら、大変由々しき事態です。大学としても看過するわけにはまいりません」

そう言うと、赤西は湯川を応接室にまねき、じっくりと話を聞いてくれた。そして、こう言った。

「先生の話はよくわかりました。それが本当だとすると大学としても、それなりの対応をしなければなりません。なにしろ、白井先生は工学部長という要職につかれています。この件は、わたくしの方でじっくり調査いたしますので、しばらく、内密にしておいていただけないでしょうか」

湯川に異存はなかった。自分に非はない。きちんと調べれば、白井の行った破廉恥行為は白日のもとにさらされるであろう。もともと、白井のまわりでは黒い噂が絶えない。これを機会に旧悪も暴露されるかもしれない。そう

湯川は期待した。

しかし、それから一週間たっても、事務からは回答がなかった。

「いくら慎重を期すとはいっても、対応が遅すぎる。事務はなにをしているんだ」

湯川はしびれを切らしていた。

ところが、それからしばらくして、あろうことか、白井ではなく、湯川の研究室に大学の調査が入った。湯川の補助金不正使用疑惑が持ち上がったのである。

湯川が、研究補助金を本来使ってはいけないものに流用していたというのだ。湯川が、新しい実験機器を買う予定の金で、すでに購入済みの装置の部品を交換したというものであった。これは、どこの研究室でもやっていることである。それに、研究に必要なものを買ったのであるから、研究費の不正使用ではない。

「これの、どこが不正なんだ」

湯川は抗議した。

しかし、厳密には費目間の流用規定に反するものであったため、湯川は文化省と大学から嚴重注意処分となった。

この一件は、なぜかイニシャルではあったものの新聞にも載った。

「東都大学は、同工学部のY教授が文化省の学術研究補助金を流用したと報告した。なお、大学は文化省に教授が流用した二〇万円を返還すると表明している」

驚いたことに、この問題は、テレビのニュースでも流された。

この結果、湯川の訴えは誰からも信用されなくなったのである。かくして、結晶横取り疑惑もうやむやにされてしまった。

加治は驚いた。これは白井が裏で糸を引いたに違いない。悪いのは白井であって、湯川ではない。そう思った加治は、湯川にかわって訴えを起こそうと決意した。

「こんな暴挙を許してはいけない」

事情を説明すれば、みんなきっと加治のことを分かってくれるはずだ。加治は、そう信じていた。

ところが、大学の事務に相談しにいくと、とんでもないと一蹴されてしまった。事務員は、学生の言うことなどはなから信じられるかという態度であ

る。しかも、驚いたことに、相談をうけた事務員が白井にこっそり告げ口をしたのである。

それからというもの、加治に対する白井の執拗ないじめが始まった。まず、加治が精神的に異常を来し、他人の成果を自分のものと言いふらす虚言癖があるという噂を流した。

そして、子飼いの部下を使って、加治の実験を妨害するようにしたのである。実験のできない加治は、結局、論文が書けなくなってしまった。

さらに、加治が博士課程で三年を過ごした直後、頼りの湯川教授は失意のまま大学をやめてしまった。湯川は、白井に汚名を着せられたまま、さびしい退官を余儀なくされた。

通常、退官する教授には、記念講演会という花道が用意されるのであるが、湯川の場合には、不正を働いたということで、そのような会はもたれなかった。

「おれに逆らったら、湯川のようなめにあうんだぞ」

とまるで、まわりを威嚇するような白井の仕打ちであった。

博士課程に進学した学生は、三年で論文をまとめるのが通例である。加治の場合も、それに値する十分な研究成果が出ているのであるが、論文をまとめる段階で、実験がまったくできない状態になってしまった。

さらに、自分の成果を学会誌に投稿したくても、すでに白井たちに成果を横取りされて、先に発表されてしまっている。いまさら、論文を発表したところで、二番煎じと言われるのが落ちである。

悶々と日々を過ごしている加治のもとに白井から呼び出しがかかった。加治は、白井の部屋で、白井をにらみつけるようにした。人の成果を盗むとは、研究者の風上にも置けない。

すると、白井は愛想笑いを浮かべながら、こう言った。

「きみも、湯川のようなレベルの低い教授のもとに行くから、今度のような目に会うんだ。博士課程の四年生になるのに、指導教官も決まっていなそうだな。これでは将来は暗いぞ」

加治はなにをいうかというように白井を見て、こう言った。

「そう仕向けたのは先生ではないですか」

「君は、まだ若いから、世の中のことが分かっていない。いいか、まわりのひとたちと協調するというのも研究者にとっては大事なことなんだ。いま

までのことを反省するなら、僕がとりなしてもいい。希望の就職先も世話しよう」

「先生は、何を言いたんですか」

加治は、白井の甘言になにか裏があると感じとった。

「あの結晶をもう一度つくってみないか」

白井は懇願するように加治に言った。

「それは、どういうことでしょうか」

「私が少し、誤解していたようだ。あの結晶は種田がつくったものとばかり思っていたが、実は、加治君がつくったものだそうじゃないか」

種田とは、白井が指導しているポスドクである。

「そんなことは、最初から分かっていたのではないですか」

「ばかを言いなさい。私は、ひとの結晶を盗むような非常識な人間ではないよ。単なる誤解だ」

加治は少し悩んだが、白井の申し出を断ることにした。

「それはできません」

白井は、最初は、一生懸命、加治をなだめすかそうとしたが、加治の決意が固いことを知って、最後には切れた。

「いいか、これからのお前の人生はないと思え。なんと失礼な奴なんだ」

実は、加治と湯川から騙し取った結晶が海外で評判になり、ぜひ自分たちにも、あの結晶を分けて欲しいと、いろいろなところからリクエストが白井のもとに届いていたのだ。

白井はすぐに真似できると踏んでいた。出入りの業者を脅して、加治が、どのような原料とルツボを使っていたかを聞き出したが、結晶づくりは、そんなに甘いものではない。しかも、白井の指導しているポスドクの種田は不器用であるうえ、あまりやる気がない。当然、加治の結晶などつくれるはずもないのである。

## アカデミックハザード 加治の物語 連載 2

相談

大学のボスの白井ににらまれたのでは、自分の将来はない。博士号をとることもままならないだろう。加治は、悩んでいた。いままで、両親は加治のことを経済的にも精神的にも支えてくれていた。

加治の実家は、都内で小さな文房具屋をいとなんでいる。父は、若いころ、大学進学を望んでいたが、家業をつぐのに学問はいらないと祖父に言われ、泣く泣く高校を卒業してすぐに、家の文房具屋を手伝うようになった。その後、見合いで母と結婚した。母は都内の文房具関係の卸問屋に生まれ、親どうしの縁で父と見合い結婚をしたのだ。

父は、くやしい思いをただけに、自分の子供には教育を受けさせ、希望する道に進ませたいと思っていたようだ。加治には姉がひとりいるが、都内の有名私立大学を出て、いまはイギリスの大学院で考古学を研究している。これも、子供の夢をかなえてやりたいという父の支持があってこそできたことである。

ただし、母は、姉には嫁入り修行をさせて、はやく孫の顔を見せて欲しいと思っているようだ。

姉が古文書にとりくんでいるのをみて  
「そんなわけの分からない本ばかり読んでいると、あなたが干からびてしま  
うわ」

と文句を言っているのを加治はよく耳にした。

姉がイギリスへ渡ったのは、母の小言から逃れるためではないかと加治は内心思っていた。

加治は小さい頃から、教育の大切さを父から教わった。母は、どちらかというと、あまり教育には熱心ではなかった。長男の加治には、暗に文房具屋をついで欲しいという希望を持っていたようだ。

ただし、教育熱心ではあったが、高い金を出してまで、進学専門の私立の小学校や中学校に加治を進ませようという気は父にはないようだった。家計が苦しいということもあったのかもしれない。

実は、父の代になって、大手の文房具通販業者が現れ、店の売り上げをい

つきに奪って行ってしまったのである。父は、昔からのお得意との付き合いで何とか糊塗をしのいでいるが、大手の進出はこれからも脅威となるであろう。それだけに、父は、老舗ではあるものの、文房具屋は自分の代かぎりと考えているようだ。そこが母と違うところである。

しかし、いまのままでは加治の立場は宙ぶらりんである。博士号もとれないのでは、博士課程に進んだ意味がない。

もちろん、博士号をとったからといって、すぐに就職先が見つかるわけではないが、博士の称号がないのでは、話にならないのである。

加治は、板倉のもとに相談に行った。板倉は、加治の話聞いて、とても憤慨した。

「また、白井はそんなひどいことをしたのか」

加治は、板倉が「また」というのを聞いて思った。白井は、似たようなことを過去にもしているのだろうか。

「しかし、大学の事務に話をもっていっても、やつらは白井の子分のようなものだから、どうしようもない」

そして、さらにこう加えた。

「湯川さんは正直すぎたんだな。事務は自分の味方をしてくれると思ったんだろうが、大学はそんな甘いところじゃない。定年まぎわの老教授と、天下の工学部長を天秤にかけたら、大学がどちらをとるかは明々白々だ。それに、いまの事務局長の赤西は学長の東郷と、白井とは一連托生。文化省から下りてくる金をせっせと自分たちの懐にくすねている張本人だ」

加治は、板倉の話がにわかには信じられなかった。大学の執行部がそんなことをするだろうか。特に、学長は選挙で選ばれた立派なひとである。しかし、選挙で選ばれた工学部長の白井が自分と指導教授の湯川に対して行った非道を思い、ひとは地位で判断してはいけないと自分に言い聞かせた。

「文化省に相談するという手もあるが、役人は面倒をいやがるから、これもどうしようもないだろう。それに、文化省自体がくさっている。この件も、簡単にもみ消されるのが落ちだ。それどころか、変な訴えを起こしたと非難され、加治君の将来があやうくなる可能性もある」

「それでは、泣き寝入りしろということなのでしょうが」

「そうは言っていないが、なかなか難しい話だな」

板倉は、真剣に考えているようだった。

「山根に頼んで、とりあえず、あいつの研究室に置いてもらうしかないだろう。白井にはにらまれるが、山根ならば、何とかこらえてくれるだろう」  
なぜか、白井の差し金で板倉に大学院生の指導は許されていない。

「加治君が、もし、そうしたいというなら、俺が指導してもいいんだけど、どうだろう。所属は山根のところで、実質的に俺が面倒をみるという手もある。実験から理論に鞍替えするというのは楽ではないかもしれないが、博士号をとるには、それもひとつの手だ。おそらく、これからも白井の妨害は続くだろうからな」

加治は、少し考えてから、こう言った。

「それは、ありがたい話ですが、せっかく結晶づくりの研究を進めてきました。愛着もあります。何とか、いまの内容で博士論文をまとめたいと思います」

もちろん、白井の妨害があるいま、それは簡単なことではない。しかし、加治は、せっかく自分がここまで積み上げてきたものをかたちにしたい。そんな希望があった。

板倉は

「加治君の考えは、分かった。少し、俺にも考えさせてくれ」と言ってくれた。

吉野助教授

加治は、学科主任の山根教授が仮の指導教授ということで、とりあえず博士四年に進学した。正式な指導教員は、いずれ決まるということであった。白井は、加治を自分の研究室に引き入れたいようだが、加治は、それだけは嫌だと断った。

この年、学科に新任の吉野聡助教授が赴任してきた。アメリカのオーランド大学で学位をとった新進気鋭の学者ということである。吉野は、加治からみても颯爽としていて格好よく見えた。背も高く、とてもあまいマスクをしている。

加治が心配だったのは、吉野が佐々木さんに見せる態度であった。好意をよせているのがみえみえである。さらに、加治が気になるのは、佐々木さんの吉野に対する対応ぶりである。はたからみても、とても親切なのだ。

加治は、吉野を見て、とても自分はかなわないと思った。何しろ、向こうは大学の助教授である。将来が保障されている。加治は、吉野先生こそ佐々木さんにお似合いのひとだと自分に言い聞かせた。

「これで、良かったのかもしれない」

五月になって、加治は板倉に呼ばれた。

「山根にかけあって、加治君の博士の担当教員を吉野先生にお願いすることにしたが、どうだろうか」

加治は驚いた。吉野は新任である。

しかし、板倉は

「吉野先生は、本当にいい先生だ。研究者としても、しっかりしている。きっと、加治のことを考えてくれる」

信頼する板倉の言葉である。加治は、吉野に自分からぶつかってみることにした。

吉野は、とても気さくな先生であった。加治があいさつに行くと、気軽に部屋に招き入れてくれた。加治は、白井の豪華な部屋と比べて、吉野の部屋があまりにもみすばらしいのに驚いていたが、自分の部屋が持てるだけで幸せなのかもしれない。

「君が加治君か。新任の吉野です。よろしくお願いします」

吉野は、加治に握手を求めてきた。

「ちょっと、若造で頼りなく思うかもしれないけれど、自分のお兄さんぐらいに思って、気軽に何でも相談して欲しい」

と言ってくれた。一応、吉野が指導教員になることを打診されてはいるが、正式に決まったわけではない。吉野としても、正式決定の前に、加治と面談したかったに違いない。

「実は、今日来てもらったのは、加治君がいままでどういう研究をしていたかを聞いたかったからなんだ。それによって、今後の進路を一緒に考えようじゃないか」

加治は、吉野にどんな話をしたらよいか、迷った。本当のことを話すならば、自分と白井の関係まで言及する必要がある。そこまで、話してもよいものだろうか。しかし、そこまで説明しなければ分かってもらえないだろう。

加治は

「板倉先生が推薦するくらいのひとであれば、きっと自分の苦境を分かってくれる」

そう自身に言い聞かせ、腹をくくった。そして、自分と湯川の研究成果を工学部長の白井に横取りされたいきさつをすべて話した。

吉野は、いたく憤慨した様子で、こう言った。

「それが本当だとしたらひどい話だね。それで、加治君はどうしたんだい？」

「はい、わたしが教授にかわって訴えを起こそうとしたんです。ところが、大学の事務相談にいくと、とんでもないと一蹴されました。学生の言うことなど、最初から信じてもらえないんです」

「それは、ひどいね。日本では、アカデミックハラスメントに対する認識があまいのかな」

「しかも、相談を受けた事務員が白井にこっそり告げ口したんです」

「何だって。それこそ、やってはいけない行為だろう」

それから加治に対する執拗な白井のいじめが始まったことも話した。加治が精神的に異常を来し、他人の成果を自分のものと言いふらす虚言癖があるという噂を白井が流していること、そして、子飼いのポスドクの種田を使って、加治の実験を妨害するようにしたこと。このため、実験ができなくなった加治が、結局、博士論文を完成できずに、四年目に突入したという話もした。

「それから、あることをすれば白井は私を許してくれると言いました」

加治は、吉野にすべてを打ち明けることにした。

「あの結晶をもう一度つくれというんです。実は、白井の指導しているポスドクの種田には僕の結晶は作れなかったんです。白井はすぐに真似できると踏んでいたようです。出入りの業者を脅して、僕が、どのような原料とルツボを使っていたかを聞き出したようですが、結晶づくりは、そんなに甘いものではありません。それに今回は、さらに一工夫加えていましたから、なおさらです」

「なんだ、それが本当なら、自分が犯人と白状しているようなものではないか」

「ええ。背に腹は変えられないということでしょう。実は、あの結晶が評判になって、他の研究機関からもぜひ分けて欲しいという依頼が白井のところまで殺到したようなのです。ところが、自分のところではつくれない。だから、

なんとか私につくらせたかったのです」

「それで加治君はどうしたんだい」

「誰が、あんなやつに結晶をつくってやるもんですか。最後に、白井はアメも用意していました。自分の研究室の助手にしてやってもいいと言ったのです。でも、きっぱり断りました」

「そうか、それは賢明な判断だね」

もし、加治が結晶を渡せば、白井はそれを利用するだけで加治を切り捨てるであろう。しかし、吉野は、加治がよく初対面の人間に対して、こんな大事な話をするものだと思議に思っている様子だ。吉野が、もし白井のスパイだったら、加治はただではすまない。

「でも、加治君。こんな大事な話をよく僕にしてくれたね。もし僕が白井先生の意をうけていたら大変なめにあったよ」

すると加治から意外な話が出た。

「実は、この学科で唯一信頼できるのが板倉先生なんです。その板倉先生が、吉野先生は信頼できるから思いっきりぶつかってみると助言してくれたんです。そうでなければ、こんな話はできません」

「えっ、板倉先生がそんなことを言っていたの」

吉野には意外であった。板倉が吉野に対する態度から、どちらかというと、あまり好意的ではないと感じていたからだ。

板倉が大学の重鎮である白井を批判する言動や、学科主任の山根に対して、堂々と意見をいうことから、吉野は、板倉という人間は、かなり野卑だと思い込んでいたからかもしれない。

「はい、それに山根先生にかけあって、吉野先生をぼくの指導教員に据えてくれるようお願いしてくれたのも板倉先生なんです」

吉野は、ますます驚いた。板倉が、山根に依頼をした？  
実は、吉野は、山根と板倉が言い争っている場面に偶然出くわしたことがある。

「ふたりは仲が悪いのかな」

と、漠然と思っていたのだ。

吉野は悩んだ。

「加治の立場は考えれば考えるほど難しい」

おそらく、他の大学に移ったとしても白井の魔の手は及ぶであろう。この話

が本当ならば、白井にとっては表沙汰にはしたくない話である。加治の行き先に先手を打つのは必至だ。

天下の東都大学の工学部長から、じきじきに、「今度そちらにお世話になる加治は虚言癖があるので気をつけてください」などと言われたら、加治の言うことを信じるものなどいないであろう。その前に、そんな人間の受け入れ自体を断るに違いない。

吉野はだまりこんだ。何かいい手はないだろうかと思案している様子だ。しかし、加治には絶望という言葉しか思い浮かばない。

ところが、吉野はあることを思いついたように、こう言った。「加治君。事情はよく分かった。わたしにひとつ考えがあるので、少し時間をくれないか？」

加治はこたえた。「どうせ、大学に来て実験ができないので、家でぶらぶらしているだけです。板倉先生は、実験ができなければ理論があるから、俺の弟子になれと言ってくれたのですが。なかなかその気になれなくて」吉野は、無償に腹がたってきた。こんな前途有望な若者を踏みにじるとは、いったいこの大学はどうなっているのか。板倉が白井を批判するのを聞いて、不愉快に思ったこともあるが、加治の話を知ると、明らかに白井に非がある。板倉は、それと闘ってきたのだ。しかし、白井は大学の執行部の一員である。学長の東郷とも懇意にしている。そんな人間と真正面からやりあうのは、かなりの精神力と覚悟が必要であろう。吉野の中で、板倉に対する評価が大きく変わった。

しかし、白井とこのまま対決しても、しらを切られればそれまでだ。

「よし、あさって、また、僕の研究室に来てくれるかい」

## 吉野の作戦

加治との面接が終わってから、しばらくして吉野はアメリカ時代の恩師であるオーランド大学のデイビット・コーンウェル教授に電話をかけた。時差の関係があるので夜中になったが、デイビッドとは一時間ほど話をした。電子メールでは、とても細かいところまで伝えられる話ではない。驚いたことにデイビッドは白井の結晶のことを知っていた。さらに、大学の研究所に、

同じような結晶成長装置があることも教えてくれた。

次の日、デイビッドから電話があった。朗報であった。

加治が再び吉野の研究室を訪れた時には、さらに憔悴した様子だった。両親から学問はあきらめて家業を継げと説得されたいらしい。日本の大学では、博士課程の学生は、すべて自分で生活費を捻出しなければならない。アメリカなら、給料が支払われるが、日本では、親に頼るか自分でバイトして、賄うしかないのである。大学にも行かずに、ぶらぶらしている息子をみて、両親も業を煮やしたのであろう。

吉野の話聞いて加治は驚いた様子であった。デイビッドが、研究所にかけあって加治を臨時の研究補助員として受け入れてくれるというのだ。実は、米国の博士課程に編入するには、英語の資格試験をパスしなければならない。それに、必修の講義もたくさんあるので、加治には負担が大きい。そこで、デイビッドが、大学にかけあって研究補助員というかたちで雇ってくれることになったのだ。

加治はしばらく時間が欲しいと言った。両親に相談するようだ。

そして、次の日に

「ぜひ行かせて下さい」

と言ってきた。両親には、あと二年だけ待って欲しいと頼んだらしい。

吉野は、山根には

「加治君が大学をやめたいと申し出ましたので、退学を認めていただけないでしょうか」

とだけ伝えた。山根は、この話を聞いて、少し残念そうな顔をした。

「分かりました。工学部長の許可が必要ですので、いまから白井先生に連絡してみます」

白井が工学部長室でタバコをすっていると電話がなった。

「おお、山根君か。どうした」

「先ほど、吉野先生から連絡がありまして、加治君が正式に退学を申し出たそうです」

白井は思わずほくそえんだ。思ったより時間はかかったが、ようやく加治が決心したようだ。

「加治君が退学！それは、残念だが、本人の意思なのかね」

「そのようです」

「それならば仕方がないな。もう少しがんばれば博士号をとれるかと期待していたが、本人の希望ではしょうがない。それに、もともと彼は研究者には向いていないよ」

すると山根は

「白井先生は、本当に加治君は研究者に向いていないとお考えですか？」と疑問をはさんだ。いつもイエスマンの山根にしては珍しい。

白井は、少しむっとしたが

「実力は抜きにして、彼は性格が悪すぎる。あれじゃ、まわりと協調できないよ。研究者として生きていくためには、仲間とうまくやっていくというのも重要な資質だからね」

山根はそれには、なにも応えず

「分かりました。先生の了解も得られましたので、これから正式な手続きに入ります」

とだけ言った。

「ああ、そうしてくれ」

白井は、ほっとしていた。これで、ひとり厄介者を始末することができた。残るは、板倉と吉野のふたりである。

## 渡米

加治は渡米の準備を始めた。パスポートも取得した。ただし、ビザは申請しなかった。加治は博士号を持っていない。いくら、大学の研究補助員になると分かっているても、就労ビザの取得は難しいと吉野は助言した。それよりもビザ免除制度で向こうにいて、研究を始めたらどうかとってくれた。アメリカは、おおらかな国で、加治の仕事が認められれば、そのまま研究を続けることも可能だという。

加治は覚悟していた。自分の研究者としての将来はほぼ閉ざされている。権力者の白井に楯をついたのだ。日本では、もう可能性がない。

これが最後のチャンスである。とは言っても、自分は本当にアメリカでやっていけるのだろうか。しかし、せっかく、吉野がその機会を与えてくれたのだ。一生懸命がんばってみよう。それでだめならば、すぐに帰国する。

加治には、もうひとつ気になることがあった。佐々木さんのことだ。自分は、彼女に自分の思いを告げていない。

実は、助教授の板倉から

「加治君は、佐々木さんが好きだろう」

といわれてドキッとしたことがある。

いい機会と思って、将来のことも含めて相談したが、板倉から

「佐々木さんだけはやめておけ」

と言われた。いくら理由を聞いても

「そのうち分かる」

としか言わない。あれは、いったいなんだったのだろうか。

板倉から忠告されるまでもなく、いまの自分には、佐々木さんを好きになる資格はない。博士号もとれないルンペンだ。それに、佐々木さんは、明らかに吉野先生に好意を持っている。彼女にとっては、吉野先生と一緒にするのが幸せだろう。そう自身に言い聞かせた。

加治の渡米を許してくれた両親であったが、いざ息子がアメリカにわたるとなると、不安があるようだった。よく分からないが、大学から両親に対してある忠告をする電話があったようだ。両親は、その電話の内容を、かなり深刻に受けとめているようである。加治は、誰からの電話かと問い詰めたが、両親は、最後まで名前を明かさなかった。

「このまま日本にとどまって、文房具屋を継いだらどうだ」

両親は、そう言った。

「父さん、二年だけ待ってくれるかな。それで、見込みがなければ、帰ってくる」

加治は、そう約束した。そして、アメリカに飛び立った。成田には、吉野と板倉が見送りに来てくれた。

## アカデミックハザード 加治の物語 連載 3

### 白井の電話

加治が博士課程の三年になった時、白井は、何とか加治を自分の研究室に引き込んで、あの結晶づくりをさせようと画策していた。ワールドサイエンス誌に共著で論文が掲載され、白井のグループが結晶をつくったと世界中に知れわたると、いろいろなところから共同研究の申し込みが舞い込んだ。

白井は、予想以上の反響に驚いていた。電子メールで海外から、結晶をほしいという申し出がひっきりなしに届く。白井は、あまり英語が得意ではなかったので、秘書の柳井さんに和訳をまかせていたが、返事は保留にしていた。

ポスドクの種田に、何とか加治の実験を再現するように命じていたのだが、一年たっても結果は出ていない。不器用な種田に加治と同じレベルを期待するのは無理であるが、すでに白井は、この実験に三〇〇〇万円以上つぎこんでいる。

さらにまずい事態になりつつあった。どうも、白井が結晶を出ししづるの

「本当にお前があのか結晶をつくったのか」

という露骨な非難メールも届いているようなのだ。

仕方なく、白井は加治を籠絡しようと餌を用意して説得を試みた。しかし、加治は頑として言うことを聞かない。

あるうことか、加治は一介の学生の分際で、大学の事務で白井のことを糾弾する訴えを起こそうとした。事務の機転で、なんとか事を収めたが、このままでは、足をすくわれかねない。この大学には、自分の失脚を狙っている人間も少なくない。学長の東郷と二人三脚で、学内の権力固めをしてきたが、何が起こるか分かったものではない。一寸先は闇。権力の世界とはそういうものである。

結局、加治を説得できそうもないと悟った白井は、何とか加治を大学から追い出せないか算段した。白井は、加治の実家が、文房具屋を営んでいることを知っていた。幸いなことに東都大学にも文房具を納入しているようだ。白井は、事務を動かして、まず、大量の発注を加治の実家に行った。宅配型

業者の登場で、老舗の文房具屋が苦戦していることを白井は知っていた。案の上、加治の両親は感謝してきた。

しばらくして、白井は加治の父に電話を入れた。

加治の両親は白井に大学が自分の店に文房具を発注してくれたことを感謝した。

白井は

「ものによっては、安く大量でいいということもありますが、中には、専門家の目で鑑定していただいた良品を納入いただくことも大事と考えております。たまたま、いい文房具店がないか探しておりましたら、なんと加治君のお父様が老舗の店を営んでいると偶然知りまして、今回発注させたいだけでした」

「そうでしたか。本当に気を使っていただきありがとうございます」

加治の父は心底から白井に感謝した。しかも、白井は定期的に文房具を発注してくれるという。こんな立派な先生が息子の先生でいてくれて助かった。

しばらく世間話をしてから、白井は、おもむろに、つぎのような話を切りだした。

「実は、加治君のことでお父様に聞いていただきたいことがあります。失礼とは思いますが、ひとこと忠告させてください」

加治の父はなんだろうとかしこまった。

「ひとには、向き不向きというものがあります。加治君は、よく頑張っているとは思いますが、研究者には向いていません。実は、研究者になるためには、勉強ができるだけではだめなのです。一種の勘といいますが、センスが求められるのです。これは、天賦の才でして、努力して得られるというものではありません」

ここで白井は一呼吸おいた。そして

「残念ながら、いくら努力しても、加治君には、将来、研究者としての道は開けないでしょう。私としても、こんなことを言うのは、つらいのですが、彼には、博士号取得を断念してもらった方がよいと思っています」

加治の父は驚いた。偉い先生から自分の息子はものにならないと言われていたのだ。しかし、そのとおりかもしれない。最近の息子は元気がなかった。博士研究でスランプに陥っていたのかもしれない。

さらに、白井は続けた。

「ただし、この話は加治君には内緒にしておいて下さい。彼を、あまり傷つけたくないのです」

加治の両親は、東都大学の先生が加治のことを思って、このような忠告をしてくれているものと信じた。そして、加治に大学を辞めて、家をつぐよう再三再四迫った。

しかし、加治はそれでもなかなか大学を辞めようとはしなかった。白井は、少しあせった。両親を説得すれば、加治はすぐにも大学をやめると思ったからだ。

そして、ある日、加治は博士課程の四年に進学してしまった。白井は、無理やり自分が指導教官になろうと画策した。自分の研究室に入れば、なんとかなる。そう思ったからだ。ところが、山根という者が、勝手に仮の指導教官を申し出た。板倉が動いたということも聞いている。残念ながら、加治も納得しているというのだから、どうしようもない。

少々あせりだしたときに、白井のもとに朗報が届いた。博士課程の四年に進学してまもなく、加治が退学届けを出してくれたのである。アメリカからやってきた吉野という助教授のもとに配属が決まったとたんのできごとであった。一応、山根が仮の指導教員となっていたが、吉野の正式な赴任とともに、加治を吉野に預けることにしたのだ。

白井は胸をなでおろした。そして、こう思った。あの吉野という助教授は、アメリカ式のやり方を加治に無理矢理押し付けたのかもしれない。

アメリカで育った吉野は、例の合理主義に凝り固まっている。もともと日本のやり方になじむわけがないのだ。加治も、それで嫌気がさしたのだろう。ここで、白井はいいことを思いついた。これは、吉野を追い出すいい口実になるかもしれない。

吉野は、いずれクビにする積もりでいるが、あの板倉とつるんで、自分を追い落とそうと陰で動いている。早めに動く必要がある。加治と吉野を同時に葬る。一石二鳥とは、このことか。白井は思わずほくそえんだ。

佐々木祥子

白井が時計をみると、まだ五時四五分だ。待ち合わせ時間までには、十五分ほどある。今日は、久々に娘とのデートである。

「はやく娘の祥子にあいたい」

そう心の中で言って、白井は

「いかん。この事は秘密にしておくようにと、かたく約束させられていたんだ」

と思い出した。いつかは、祥子に、自分が父親だと名乗りたいが、それを言ってしまうと、祥子が生まれた経緯も説明しなければならない。それだけは、口を裂けても言えなかった。

白井は、東郷の姪と結婚した。完全な閨閥結婚であるが、白井は、それで満足であった。家庭の団欒など自分に必要はない。妻との間には二男を設けた。ふたりとも、すでに成人している。

小さい頃は、ふたりを可愛いと思うこともあったが、いつしか自分にはなつかないふたりを、うとましく思うようになった。いまでは、自分の子供という感慨も湧かない。

白井は、最近になって、ふたりの子供が自分になつかなかった理由が妻にあることが分かった。自分のことを完全に馬鹿にしていたのだ。世間では、東都大学の偉い先生で通っているが、妻から言わせれば、能力のないでくのぼうでしかない。ろくな研究もせず、権力抗争に明け暮れていたのだが、仕方がないが、そう仕向けたのは学長の東郷である。

妻は、子供の前で、あなたがたの父親はどうしようもない人間だといつも言っていたようだ。子供が父親をばかにするのも当たり前である。

妻との関係が冷え切っていた頃、大学の事務室に佐々木頼子という女性が入ってきた。白井の妻は、男のような性格で、顔もいかついが、頼子は、とても可憐で、しかもやさしかった。いつも明るい笑顔をふりまいて、まわりをなごませていた。

白井はすぐに気にいったが、妻帯者の自分には何もできない。自分もこんな女性と結婚したら、違う人生があったかもしれない。そんな白井の気持ちをよそに、頼子は、屈託のない笑顔を白井にみせた。そのひとなつっこい態度から、白井は、もしかしたら自分に気があるのではないかと思うこともあったが、それは、誤解だったようだ。頼子は誰にでも、わけへだてなく明るく接する。

白井は、当時、文化省から出向していた赤西という大学本部の事務員と、よく飲みに出かけていた。その赤西から、驚くことを聞いた。なんと、赤西

が頼子に結婚を申し込んだというのである。

白井が安心したことに、赤西はみごとにふられたようだ。

赤西はノンキャリアではあったが、上昇志向が強く、東都大学の幹部との親交を重ねていた。当時まだ、助教授であった東郷や白井ともつるんで、よく飲みにてかけた。三人とも権力志向のかたまりで、妙に気があったのである。

赤西の口癖は

「東郷先生や白井先生の引きで、自分は東都大学の事務局長になる。そして、ふたりのためにつくす」

であった。白井は、このせりふを聞くと、「ふたりのためにつくす」は、「ふたりを利用する」であろうと、心の中で思っていたが、それはおくびにも出さなかった。

赤西は酒が入ると饒舌になり

「先生方、将来は、この大学を自分たちで自由に動かせるようにしましょう」  
そうっては、将来の夢を語っていた。

その晩、赤西は、ひどく酔っ払って

「あの女を、なんとかこらしめてやりたい」

と怒りくるった。赤西が悪酔いしたことに、白井は顔をしかめた。ふられたことで、頭に血が上ったようだ。

最初のうちは、白井は赤西をなぐさめていたが、つい酔った勢いで

「実は、俺も佐々木頼子のことが好きだ」

と白状した。すると、赤西はへびのように濁った目で白井を見た。

そして

「本当ですか」

と聞いてきた。

赤西のプロポーズを断るとき、頼子には、すでに心に誓ったひとがいると言ったという。それを聞いて、白井もショックを受けた。いったい誰が、その幸運な男なんだ。

「末永とかいう野郎ですよ」

「えっ！末永君」

白井は驚いた。末永も文化省から東都大学に出向している事務員である。ふたりがつきあっているとは、まったく気づかなかった。

赤西が面白くないのは、自分が大卒で中級職試験で文化省に入省した准キャリア組であるの対し、末永は初級職で入った高卒の下っ端という点である。役人の世界では、雲上人と奴隷のような違いである。そんな地位の低い奴に、佐々木頼子をとられるのだ。白井も急に腹が立ってきた。

すると、赤西がとんでもない話をもちかけた。頼子をものにしようという計画である。助教授の白井がやれば、問題にならないというのだ。

当時は、大学教員には絶対権力があつた。教授が女子学生や事務員をレイプしてもおとがめなしという事件がやまのようにある。大学教員が不祥事を起こせば大学の責任になる。このため、大学は教員たちが犯した犯罪のもしも消しに奔走する。それに、事務員ならば、いくらでも変わりはあるが、先生はこの人でなければつとまらないというような幻想もあって、必要以上に教員を重く見る傾向があつた。

いまでは、ほとんどなくなったが、かつては、学科の事務員と教員が懇親の意味をこめて、よく懇親旅行に出かけていた。赤西は、その機会を利用しようと白井をけしかけた。

白井は、かなり迷ったが、自分の欲望には勝てなかった。あんな身分の低い末永などに最愛の頼子を奪われるならば、自分が無理にでもその貞操を奪ってやりたい。そんな欲望が頭をもたげたのである。

計画はすんなり進んだ。その旅行に同行した赤西がすべてを手配してくれた。懇親会の席で、頼子に睡眠薬入りの酒をのませ、白井は自分の思いを吐いた。

白井と赤西の誤算は、頼子が妊娠してしまったことである。レイプぐらいでは何ともないが、子供ができたとあつては話は別である。

さらに、このレイプ事件をさかいに、あれだけ明るかった頼子が、ひとが変わったように鬱状態となってしまった。まわりの誰もが何かあつたと思つたはずだ。なかには、白井と赤西の悪行に気づいたものもあつたようだが、助教授の白井を糾弾するものはいなかつた。

白井の誤算は、頼子が子供を生んでしまったことである。当然、墮胎するものと思つていた。白井は大いにあわてた。頼子をなんとか自分のものにしたいという欲望はあつたが、子供は別である。

そして、頼子は、出産すると、予後の体調を崩して、亡くなってしまった。子供だけが残されたのである。これには、さすがの白井もあわてた。まさか、

ここまで頼子が憔悴するとは思っていなかったからだ。赤西は喜んでいるようだが、白井は当事者であるだけに、複雑な気持ちであった。

そこに、大胆にもその白井を脅迫してきた人間がいた。頼子と同期の柳井である。柳井は、別の学科の事務員として働いており、頼子とは仲が良かった。頼子は、柳井だけにはすべてを告白していたのである。

柳井は、白井に対して、生まれてきた子の養育費を払うようにせまった。最初は、とぼけようとした白井であるが、柳井の強硬な態度に、しぶしぶ従わざるをえなかった。

さらに、柳井は、生まれた子供に対して、白井が父親であるということを決して明かさないと約束させた。

生まれた子は、女の子で、祥子と名づけられた。柳井が母親がわりをつとめることになった。

はじめは、祥子のことを、やっかいもののように思っていた白井であるが、祥子が成長するにしたがって、しだいに可愛がるようになっていった。上の子供である男ふたりは、父親を完全にばかにしており、まったくつかない。それに比べて、娘の祥子は、白井をしたってくれた。可能ならば、全財産を祥子に譲りたい。白井はそう思っていた。

「おじさん、おまたせしました」

突然、声をかけられて、白井はびっくりした。みると、時計は六時を指している。

「やあ、祥子ちゃんか。よく来てくれたね」

白井は、学校では誰にも見せたことのない笑顔で祥子を迎えた。本当に祥子は、可愛くてきれいだ。

祥子は、だんだん母親に面影が似てきている。白井は、それに対し、すこし後ろめたい気持ちはあったが、そのつぐないは、祥子に対してすればよいと思っていた。

「でも、おじさんではなくて、白井先生と呼ばなければいけないんですよ」と祥子は言った。

祥子は、白井の世話で、東都大学に就職した。いまでも柳井と一緒に暮らしている。そして、あろうことか、柳井は、工学部長秘書をつとめているのだ。白井としては、自分の過去の秘密を知っている人間がそばにいるというのは、

あまり心地のよいことではないが、いまのところ、柳井は白井を普通に秘書の仕事をこなしている。それに、こうやって月に一回、祥子と外で食事をすることも許してくれているのだ。

白井はおこったように

「何を言っている。祥子ちゃんは、いつでもおじさんと呼んでくれていいんだよ」

と言った。心の中では、いつかは「おじさん」が「おとうさん」に変わって欲しいと願っている。

白井は、ヘビースモーカーであるが、祥子と食事するときには絶対にタバコをすわない。

しばらく、フレンチコースの絶品料理を堪能してから、白井は気にしていることを聞いてみた。

「祥子ちゃんは、吉野のことが気に入っていると聞いたけど、本当のことなのかい」

「やだ、おじさん。いきなり。素敵な方とは思うけど、一度もつきあったことがないもの。気に入るかどうかなんてわからないわ」

祥子ははずかしそうに言った。

この時、白井は吉野に対して、猛烈な嫉妬を感じた。そして、思った。祥子が好きになる前に、吉野を大学から放逐しなければならない。

## 日本学会賞

白井のもとに、待ちに待った知らせが届いた。日本学会賞の受賞が決まったのだ。この賞は、日本国内の数ある賞の中でも、もっとも栄誉とされている。芸術、文学、スポーツ、医学、理工学の五部門からなり、それぞれの分野で一名だけが選ばれる。中でも、理工学分野の競争は激しい。何しろ、対象となる学問分野がやまのようにある。白井も、今回ばかりは自信がなかった。

その年一回の受賞式には皇族が列席し、しかも受賞者には生涯年金までつくのである。テレビなどのマスコミでは大々的に取り上げられる。

その栄えある受賞が決まったのである。

「大金を使ったかいがあった」

と白井はほくそえんだ。

白井は、総合科学者会議のメンバーではあるが、日本学会賞の理工学部門の審査委員にはなっていない。その審査員には、かつて、この賞を受賞した錚々たる面々が顔をそろえている。平均年齢は八 歳を優に超えているだろう。

白井など、まだまだペーパーに過ぎない。白井は審査委員長の大京大学名誉教授の橋本に、一 万円ほど渡していた。最初は五〇〇万円ほどであったが、橋本はその後何かと要求してきた。

「現役の東都大学教授ならば、少々の金は融通がきくでしょう」

橋本は悪びれたところがない。六五歳で苦勞を共にした妻と離婚し、二〇も年下の女性と結婚しただけのことはある。

白井は、橋本の指示で、他の委員にも平均三 万円ほどを渡していた。そのための酒席を用意し、帰りぎわに、おみやげの袋と一緒に、現金の入った包みをしのびこませた。

驚いたことに、誰からも礼の言葉はなかった。もちろん、返金しようなどという人間もいない。審査員になったら金をもらうのは当たり前と思っているのかもしれない。

それにもかかわらず、白井は、橋本から

「この程度の現ナマでは、賞は確約できないよ」

と言われていた。

とんでもない話である。いくら白井でも、これだけの大金を裏金として準備するのは大変である。業者からのリベートや、補助金の付け替えなど、ここ二年ほどはかなり苦勞した。

白井は気が気ではなかった。今年を受賞を逸すると、自分の分野に順番がまわってくるのは五年後である。いままで使った金もすべて無駄になる。まさか、受賞を逸したから金を返せとは言えない。

そして、今日、その苦勞がようやく報われたのだ。橋本の話では、加治のつくった結晶の論文がワールドサイエンス誌に掲載されたことが決め手となったようだ。

橋本は

「いくら金を積んでも、業績がない人間に賞をやることはできんからな」

とうそぶいた。

白井は内心毒づいた。

「なにが業績だ。お前には自慢できる成果などないだろう」

橋本が現役だったころ、何の業績もないのに、いろいろな賞を金で買ったことは研究者仲間では有名な話である。

「まさに鉄面皮とは橋本のことである」

白井は自分のことは棚に上げて、橋本を心の中で非難した。

白井は、受賞の知らせをさっそく、東郷に報告した。

すると、東郷は

「それはめでたい。ぜひ大学としてお祝いをしよう」

と言ってくれた。

祥子に、こっそりこの話をすると

「おじさまは、ほんとに立派な研究者なのね。おめでとうございます」

と自分のことのように喜んでくれた。やはり祥子は可愛い。最高の娘だ。

妻にも話したが

「どうせ金で買ったものでしょう」

という顔で、おめでとうの一言もない。夫の榮譽には関心がないようだ。本当に、にくたらしい。祥子とはえらい違いだ。

東都大学は、白井の受賞を盛大に祝ってくれるようだ。

ここで白井はふと思った。

「東郷は本心ではどう思っているのだろうか」

日本学会賞受賞は、学者にとっては、大きな名誉であり、箔もつく。しかし、東郷は、この賞をもらっていない。いくら金で買ったものとはいえ、東郷が面白くないはずはない。学者の世界の嫉妬はすさまじい。

それに、この賞のおかげで、白井は、将来の学長レースを有利に進められるであろう。次期学長選には東郷が続けて出馬するといっているが、白井に勝ち目がないわけではない。白井は、そろそろ東郷と距離を置く時期かもしれないと思った。

## アカデミックハザード 加治の物語 連載 4

オーランド大学

加治は、ロスで国内便に乗り換えて、オーランドの町に向かった。オーランドは、大学街で人口は二万人ほどである。空港は町外れにあるが、大学からは、車で二〇分ほどだという。

空港には、韓国人研究者のキムが出迎えにきてくれた。初めて会うので、キムはボール紙にドクター・カジと英語で書いた札を胸に掲げていた。それを見た加治は、いよいよ自分の新しい人生がはじまると実感した。キムは、笑顔で加治を迎えてくれた。

「ヘロー、ドクターカジ。ウェルカム・ツウ・オーランド」

加治は日本式のおじぎをした。なかなか英語が出てこない。

「サンキュー」

それが、ようやく口をついて出た言葉だった。そして、加治は、少し気後れした。キムは加治のことをドクターと呼んでいる。しかし、自分は、博士号を持っていない。ドクターと呼ばれる資格はないのだ。

キムは、加治の大きなスーツケースを奪うと、慣れた手つきで転がしながら加治を駐車場まで案内してくれた。キムの車は、中古のホンダだった。キムが

「これは、ホンダ。アメリカで一番人気がある」

そう言って、ガッツポーズを見せた。アメリカでは、ホンダ車が人気で、しかも中古の小型車は割安なので、大学でも人気が高いという。

大学にはあっという間に着いた。そこは、学生用の寮だった。

「ドクター・カジは運がいい。僕が、来たときは、ドーミトリーが空いていなかったの、最初の一週間はゲストハウスに泊まるはめになった」

と言った。ゲストハウスは、一泊二〇〇〇円度もするとキムは言った。ドーミトリーの部屋は、一月で、たった五〇〇〇円なそうさ。

「今日は、長旅で疲れていると思うので、ゆっくりドーミトリーで休んでください。明日の朝、僕が迎えに来ます。それから、研究所の方に案内します」とキムは言ってくれた。驚いたことに、ドーミトリー内は、食事もドリンクもすべて唯だという。加治は、キムに「ていねいにお礼を言った。と言っても、

口をついて出たのは

「サンキューベリーマッチ」

という簡単なフレーズだったが、加治が本当に感謝しているという気持ちはキムに通じたようだ。

キムはとても、爽やかな好青年だ。キムとは良い友達になれるかもしれない。加治は、キムとの出会いを感謝していた。

加治は、シャワーを浴びると家に電話した。ドームトリーでは、部屋は個室であったが、トイレとシャワーは、共通である。加治は、無事到着したことを両親に電話で知らせた。母は心配なのか、その声は、半分泣き声に聞こえた。

その日は、時差の関係で、朝の二時半に目がさめてしまった。ベッドの上で、ごろごろしながら、これからの生活のことを思った。周りは真っ暗である。物音ひとつ聞こえない。加治は不安になった。本当に自分は、このアメリカの地でやっていけるのだろうか。

しかし、吉野や板倉のおかげでチャンスを与えられた。何とか、期待に応えるように頑張ってみよう。そう心に誓った。そして、佐々木さんのことを思った。今頃、彼女はどのようにしているのだろうか。

朝の八時半にキムが迎えにきた。一応、加治は、スーツにネクタイを締めて待っていたが、キムはTシャツにジーンズというラフな格好であった。研究所は、ドームトリーから歩いて五分ぐらいのところにあった。アメリカの大学の構内はとても広い。バスツアーが組まれるくらいである。研究所までの道のりを加治は楽しんだ。キャンパス内は、公園のようにきれいだった。瀟洒な建物が多い。東都大学とは別世界だ。

キムは、最初に、吉野の指導教授であったデイビッド・コーンウェル教授のもとへ加治を案内した。デイビッドは、吉野が言ったとおり、とても気さくな紳士であった。ところどころ聞き取れない箇所もあったが、加治はなんとか挨拶をこなした。しかし、キムとデイビッドの会話には、全くついていけない。加治は、英語をがんばってマスターしなければならないところに誓った。

加治が驚いたのは、デイビッドが加治の研究の内容をよく知っていたことである。吉野から聞いていたとはいえ、よく勉強している。しかし、話が専門的な細部に及ぶと、加治はデイビッドの言っていることを聞き取れなかつ

た。加治が申し訳なさそうにしていると、デイビッドはにこっと笑って「ドンマインド、スーン、ユウウィルビオーライ」と言ってくれた。

「キムもアメリカに来たばかりのころは加治と同じだった」と笑っている。

すると、キムは、

「自分は最初から完璧だった」

と抗議した。もちろん、顔は笑っている。冗談なのだ。加治も、いつの日か、キムのように英語で冗談が言えるようになるのだろうか。

つぎにキムは、長井がお世話になるナンシー・クック準教授のもとに連れて行った。クック教授は、目をみはるような美人である。まだ、三〇歳そこそこだが、世界的な成果を挙げているという。ナンシーは、加治の手をとって歓迎してくれた。

「ドクター・カジと一緒に仕事ができるのは嬉しい」

と言っている。社交辞令かもしれないが、加治は純粹に感動した。しかし、再び思った。自分はドクターではないのだ。

ナンシーから、三日後の研究所のセミナーで加治の研究を紹介するように言い渡された。このことは、渡米前から言われていたことなので、加治はパワーポイントでつくった発表原稿を用意していた。もちろん、吉野に頼んで、内容と英文のチェックは十分行っていた。吉野は、最初のプレゼンテーションが肝心だよと忠告した。

そして

「加治君なら、大丈夫だ。自信をもって発表しなさい」

とも言ってくれた。

キムは、つぎに研究所の実験室を案内してくれた。加治は、実験設備が充実していることに驚いた。キムによると、この研究所は州政府から高く評価されており、資金援助も豊富なのだという。

## セミナー

加治のセミナーには、研究所のほぼ全員が集まっていた。総勢五〇人ほどであろうか。加治は、日本国内で開催される会議では、何度か発表したことがあるが、英語での発表は初めてであった。加治は、心臓が大きく波打つの

を感じた。緊張で、手のひらは汗びっしょりである。

加治は四〇分ほどかけて、自分の研究内容を発表した。何度も、吉野や板倉のもとで、発表練習をしてきたが、本番では、ところどころつまづいた。自分が博士論文で行った研究を、最初から説明した。湯川とふたりで始めた結晶づくりの話。そして、どうしても、結晶成長の段階で、不純物が入ってしまうことに悩んだ日々。そして、あきらめかけた時、頭にひらめいたアイデア。不純物で、不純物を退治する。途中から、加治は、自分の発表内容に夢中になっていた。

白井に横取りされたが、これは、まさに自分の研究成果なのだ。苦労して研究室で徹夜を繰り返した日々のがよみがえってきた。

加治の発表が終わると、一瞬場内は静まり返った。加治は不安になった。誰も理解してくれなかったのだろうか。しかし、しばらくすると、参加者から大きな拍手をもらった。中には、立ち上がって拍手しているものもいる。それは、心から加治を賞賛する拍手だった。

ナンシーも

「素晴らしい講演だったわ」

とほめてくれた。デイビッドも満足気にうなずいてくれている。

すると、参加者のひとりが手を挙げた。

「ドクター・カジ、あなたが発表した結晶は、ドクター・シロイの共同研究者によって、ワールドサイエンス誌に、すでに発表されている。しかし、どうやって、あの結晶ができたのかということはなぞのままだった。みんな、どうしてシロイ・グループは、その肝心な部分を論文として発表しないんだと疑問に思っていた。でも、今日の発表を聞いて納得した。あなたが、あの結晶をつくったひとだったんですね」

加治は、ところどころ聞き取りにくいことはあったが、何を言わんとしているかは、理解できた。

すると、キムはこう続けた。

「あの論文には、ドクター・カジの名前は載っていない。ということは、あの結晶はシロイがカジから盗んだものなんだね。ひどいやつだ」

まわりみんなも憤慨している。実は、コーンウェル教授は、吉野から聞いた話をそれとなく研究所の人間に話していたのだ。ただし、誰もが半信半疑だったようだ。

しかし、今日の加治の発表で誰の目にも明らかだ。加治こそが、あの結晶をものにした研究者であると。

多くのアメリカ人研究者にとって、東都大学がどの程度のレベルかはまったく分からない。日本の大学は、世界では、ほとんど名が知られていないからだ。この研究所の研究員には、吉野が助教授になって赴任した先という程度の知識しかない。しかし、大学教授が、学生の成果を横取りするということが信じられないようだ。しかも、自分がだました学生を失脚させる非道まで行っている。

加治は思った。そんな軽蔑すべき人間を日本では大先生として崇めている。そして、文化省でさえ、白井を全面的にバックアップしているのだ。日本人として恥ずかしい。そう思った。

セミナーの後、加治は、自分が所属することになっているクック準教授のグループメンバーを紹介された。みな、加治の講演に感動したと言っている。

メンバーは三人で、インド人のシン、中国人のファン、そしてブルガリア人のコブリシュカであった。現在、みな博士研究員として頑張っているという。コーンウェル教授とキムもナンシーの部屋にやってきた。

シンは  
「ドクター・カジの講演を聞いて、ある実験を思いついた。一緒に共同実験をしないか」  
と持ちかけてきた。

シンが取り組んでいるのは、ある酸化物の結晶成長である。反応性の高いバリウムを含んでいるので、なかなかうまくいかないようなのだ。加治の化合物をつかえば道が開けるかもしれない。シンは興奮していた。

それから、クック準教授も含めて、五人は、今後の実験計画について話し合った。コーンウェル教授も、加治の研究を全面的にバックアップしてくれるという。

デイビッドも吉野から加治のことは聞いていたが、今回の発表を聞いて確信したようだ。いずれ、加治は、この研究所の宝になる。

幸いなことに、オーランド大学には加治が東都大学で使っていたのと似た結晶成長装置がある。クック準教授のメンバーならば自由に使えるという。加治も、久しぶりに興奮を覚えた。

## 実験再開

加治は、シンとファンの助けを借りて、結晶成長に取り組むことにした。まず、再現実験だ。オーランド大学にある設備や備品は、東都大学のものよりもはるかに上だ。一週間ほどで、結晶は、簡単につくることができた。ナンシーも感激している。デイビッドも大喜びだ。さっそく結晶の評価に入ると言っている。

しかし、加治は、このままでは満足できなかった。これは、あくまでも過去の再現実験である。いままで以上の成果は出ていない。もっと、結晶の質を高める必要がある。そのためには、さらに工夫が必要だ。

加治は、ずっと暖めてきたアイデアをクック準教授に説明した。ルツボに使う材料も最適化してみたい。それが加治のアイデアだった。

東都大学では、加治は、アルミナと呼ばれる材質のルツボを使っていた。アルミナというのはアルミニウムの酸化物のことである。かなり高温まで耐える耐火物である。値段も安いので、加治は我慢して使ってきた。加治が所属していた湯川研究室は貧乏だったので、高価なルツボは買うことができなかった。

しかし、白井の子飼いのポスドクの種田は、加治のことを真似てか、アルミナルツボを使い続けた。白井のところには大金があるのだから、もう少しましなルツボを使えばよいのにと加治は傍で見ていて思ったが、何も言わなかった。

種田には独創性がまったくない。研究者としてのセンスもゼロである。加治の実験を忠実に再現する。それしか種田の頭にはなかったのである。

加治は、今回のことで、いかに日本の科学予算が無駄に使われているかを実感した。本当に必要なところではなく、白井のような連中が巨額の予算を奪っていく。そして、その金は、ほとんどドブに捨てるようなものだ。建設的な研究には使われないからだ。

加治は、ナンシーに白金ルツボの購入を申し出た。アルミナルツボは千円程度だが、白金製のものは二〇万円以上もする。とても、加治に手の届く品ではなかった。

ナンシーはなんでもないので白金ルツボを用意してくれた。加治は、期待に胸をふくらませて実験をした。

しかし、残念ながら、すぐに白金ではうまくいかないことが分かった。せっかく、高価なものを買ったにもかかわらず、アルミナよりも結果が思わしくない。どうやら、変な反応物ができてしまっている。加治は、恐縮した。そして、ナンシーに謝った。

すると、ナンシーは、それを責めるどころか

「ひとつ賢くなったと思いませんか」

と言ってくれた。アメリカにはプラス思考の研究者が多い。これが、日本であれば、加治はさんざん叱責されていただろう。

この時、ファンがひとつのルツボを持ってやってきた。見るからにいびつな恰好をしている。聞くと、ファンが自分で作ったものだという。

「マス、このルツボを使ってみてくれないか」

最近、チームのみんなは加治を愛称で呼ぶようになっていた。ファーストネームはマサトだが、みなマスと呼んでいる。加治が数学が得意なことにもかかっている。

「これは、どうしたの」

加治は聞いた。

「マスが言ってたじゃないか。もし、マスが見つけた不純物と同じ化合物でルツボができたら最高だって。だから、作ってみたんだ」

加治はナンシーを見た。

「ヤオがやってみたいというから許可したのよ」

ヤオはファンのファーストネームだ。

「だけど、前に僕が試したときは、なかなかうまく作れなかったんだけど。どうしたの」

するとファンは種あかしをしてくれた。

「僕の経験からすると、マスが失敗したのは、局所的な組成ずれが原因だと思う」

加治は、そうかもしれないと思った。

「マスの化合物を状態図で調べていて分かったんだが、少し組成がずれると、低い温度で融けてしまう物質ができる。多分、そいつがじゃましていると思ったんだ」

驚いたことに、ファンは、ていねいに原料粉を乳鉢でこね続けて、全体が均一になるように頑張ったという。

「でも、時間がかかるだろう」

加治は思った。おそらく一〇時間以上はこねる必要がある。

「中国人は辛抱強いんだよ」

とファンは笑った。しかし、ファンは何度も失敗した。そのたびにナンシーが励ましてくれたという。

そして、ナンシーからのヒントで、ファンはあることを試してみたという。ある一点しかない組成を狙っても、必ず、組成ずれは起こる。そこで、低温で溶ける物質ができないように、わざと組成をずらしたというのだ。

しかし、加治の経験によると、それではうまくいかない。わざと、組成をずらすと、狙ったものとは別の化合物もできる。すると、熱収縮の違う物質が混合することになるので、高温から冷やす時に、その界面にひびが入って割れてしまうのだ。ファンは、しかし、その常識にあえて挑戦した。そして、ついに、四度目の実験で割れない試作品はできあがった。

加治は、ファンの手を握って感謝した。ファンからの最高のプレゼントだ。そして

「絶対成功してみせる」

と心に誓った

加治は、さっそくシンと一緒に結晶成長実験に入った。徹夜をしてでも頑張る。ファンとナンシーの好意に応えるには、それしかない。

実は、加治は吉野に逐一、実験の様子をメールで知らせていた。吉野からも、つぎのステップはルツボ材の改良だというアドバイスをうけていた。しかし、前に失敗していることから、加治はそれを躊躇していたのだ。それを、ファンが実現してくれた。

加治とシンは、交代で成長炉にはりついた。二四時間、つきっきりで炉を監視した。失敗するわけにはいかない。四日目の朝になって、所定の成長実験は終わった。後は、炉が冷えるのを待つだけだ。ふたりは夕方まで、仮眠をとった。研究室に寝袋が置いてある。ドームトリーは、すぐそこだが、そこまで帰る時間が惜しかった。

午後四時にナンシーがふたりを起こしにきた。いよいよ自分達の成果がみられる。実験室には、ファン、デイビッド、そしてキムもやってきていた。加治は、みんなが見守る中で炉のふたを開けてみた。そして、ルツボの中を覗いた。

加治はがっかりした。驚いたことに、そこには、ルビーのような結晶が転がっているのではないか。明らかに失敗だ。いままで、加治がつくってきた結晶とは、色もかたちも全然違う。これは、まるで宝石だ。

ファンは心配そうに加治を見ている。

「マスどうだった。結晶はできていた？」

加治は、みんなに取り出した結晶を見せた。

「残念だが、今回は失敗だったようだ」

確かに、いままでつくってきた結晶とは色形がまったく異なる。ファンはため息をついた。何が悪かったのだろうか。

その時、ナンシーが間に入った。

「あきらめるのは、まだ早いわ。その結晶を調べてみましょう」

すると、デイビッドもこう言った。

「そうだ。僕のグループでさっそく評価してみよう」

デイビッドには、何か考えがあるように見えた。

しかし、加治とシンのショックは大きかった。あれだけ、徹夜でがんばったのだ。それが、失敗である。ふたりは、いっきに力が抜けた。しばらく立ち直ることはできそうにもない。そして、なにより、加治はファンに申し訳ないと思っていた。

## 真の結晶

次の日、キムが加治のところにあわてたようにやってきた。とても興奮した様子である。

「マス、お前はすごいよ。ついにやったんだ。完璧な結晶ができています」

加治はわが耳を疑った。

「何だって！」

キムは説明してくれた。加治とシンが作った結晶は、確かに、目指していた結晶だというのだ。それまで加治が結晶と思っていたものは、不純物の影響で、本物とは色やかたちが違っていったのだ。つまり、いままでつくってきた結晶の方が偽物だったのだ。

キムはデイビッドの話をもとに披露してくれた。実は、ある有名な理論物理学者が

「もし、この化合物の完全結晶ができれば、それはルビーのような色をして

いるはずだ」

と、ある会議で発言していたらしい。その時は、誰も相手にしなかったが、デイビッドは、それを覚えていたのだ。

キムはこう言った。

「そして、なぞのエックス線のピークも見事に消えている」

加治は興奮した。そうか。そうなのか。

実は、白井が加治から奪った結晶には、説明のつかないエックス線のピークがあった。今回の実験で、あのピークが欠陥によるものであることが明らかとなったのだ。

そこに、ナンシーも現れた。そして、加治の手を握ると

「コングラチュレーションズ！」

と祝福してくれた。シンもファンも感激している。コブリシュカは、別のプロジェクトに参加していたが、ナンシーは、急遽、こちらのチームに加わってもらおうことにしたと言っている。

今回の成果は、いい結晶ができたということだけでは留まらない。もし、純粋な結晶ができたら、それに第三元素を添加することができる。それによって、思わぬ機能が見つかるかもしれない。加治は、吉野に実験が成功したことを、メールで知らせた。これも、みな吉野のおかげだ。そして、心から感謝していた。

加治が、素晴らしい結晶を合成したという話は研究所中に伝わった。あう人、あう人がみな祝福してくれる。

デイビッドは

「この研究成果は、この研究所にとって画期的なできごとになるかもしれない。マス、君はそれだけすごいことをやってのけたんだ」

そう言って、加治の手を握った。

「いや、みんなの協力のおかげです」

それは、加治の本心だった。この研究所に来ていなければ、今回の成果は出ていなかったろう。

## アカデミックハザード 加治の物語 連載 5

白井の姦計

オーランド大学での加治の研究が順調に進み出したとき、白井から吉野に対して呼び出しがかかった。

「重要な話があるので、部屋まで来て欲しい」

という。

吉野は、嫌な予感がして、急いで白井の部屋へと向かった。

「今日はいったい何でしょうか」

吉野が、こういって、白井はいかにも困ったといった様子で、つぎのように切り出した。

「実は、君の任期のことで少し問題が起こっているんだ」

「私の任期のことですか」

「ああ、いちおう五年という任期なんだが、大幅に短縮すべきという意見が出ている」

吉野は

「自分が何かしただろうか」

と思いながら、白井のつぎの言葉を待っていると

「実はね、加治君の件なんだ。東郷学長は不問に付すと言ってくれたんだが、事務方がうるさくてね」

「加治君の件とはいったい何ですか」

「前にも言ったように、私としては、一年延ばしてでも、彼に博士号をとって欲しいと願っていたんだ」

ころにもないことをよく言うなと吉野はあきれた。

「実は、いま国立大学法人では、文化省のご指導で、できるだけ多くの博士を世に送り出すことを大きな命題としている。これは、政府の大方針でもあるんだ。科学技術立国というスローガンを君も聞いたことがあるだろう」

「それは知っていますが、それが、加治君の件とどう関係があるんですか？」

「加治君の退学は東郷学長が言われるように、個人的な問題ではある。だが、事務方としては、博士号をわが大学で取得しようという学生に、その直前に逃げられたことになる」

「しかし、本人がやめるというのを、大学が止めることはできないのではないのでしょうか」

「まったく、その通りなんだが、加治がやめた理由に問題ありと事務方は見ている」

「彼がやめた理由ですか」

吉野は、それは白井のせいではないかと心の中でつぶやいた。

「事務の連中が問題視しているのは、加治君を君の研究室に配属したとたんに、彼が退学してしまったということなんだ」

「はあ」

「事務の連中は、君が彼をいびりだしたと見ている」

「私が、加治君をですか」

「そうなんだ。私も、君が日本の大学を一度も経験することなしに、アメリカから来たんで、米国流を彼に押し付けたのではないかとちょっと心配しててね。事務方に対しては、ずいぶんと君を庇ったつもりなんだけど、向こうもなかなか頑固でね。そんな人は即刻クビにすべきと言い出したんだ」

「でも、私が加治君をいびりだしたという証拠は何もありませんよ」

「君は、アメリカに長いから、弁護士のように証拠を出せというかもしれんが、日本はそうではない。状況証拠というのがもっと大事なんだ」

「状況証拠ですか」

「そう、本人も、もう一年頑張ってみようとしていたところで、君の研究室に配属になった。そして、すぐに退学。こうなれば、誰がみてもふたりの関係に問題があったと思うのではないかね」

「しかし、それだけで問題になりますか」

「実は、君だけの問題では済まされない状況になりつつある。加治君を君が指導するように手配した山根君の責任問題にもなりつつあるんだ。日本では、連帯責任というのが厳しく律せられるからね」

「でも、山根先生は白井先生も了解してくれていると言われていましたよ。連帯責任というのであれば、白井先生にも責任があるんじゃないですか」

「何を言ってるんだ、きみは。僕は何も相談を受けとらんよ。学科のことは、すべて山根にまかしているんだから。勝手なことを想像で言ってもらっては迷惑だ」

「勝手なことを想像されて迷惑なのは私の方です」

「何を言っている。いざとなったら加治本人に聞くとまで事務方は言っているんだ。もし、少しでも問題があったら、君の人生に傷がつくことになるんだよ」

吉野はいぶかった。

「白井は、いったい何を考えているんだろうか？」

加治に話を聞いて、いちばん困るのは白井本人ではないか。それとも、うまく丸め込んで、吉野を陥れるつもりなのだろうか。

「加治君も家業を継ぐそうじゃないか。実は、彼の実家は文房具屋をやっていて、わが大学ともまんざらつきあいがいいわけじゃない」

吉野は悟った。

「そうか、大学との契約をえさに口を封じる作戦か。どこまでも汚いやつらだ」

吉野は、加治のためにも、しばらくは加治の米国行きを秘密にしておくつもりであったが、本当のことを伝える機会ととらえた。

「実は、加治君は、私が前にいたオーランド大学にいます」

こう言うと、白井は実に驚いた顔をした。

「おい、今何とிட்ட」

「彼は、私の推薦で、アメリカの大学の研究所の研究補助員として働いています」

「そんなことは聞いてないぞ。誰がそんなことを許可したんだ」

「大学を退学したのですから、本人の意思で決めたことに誰も文句は言えませんよ」

「山根はこのことを知っているのか」

「山根先生はもちろんのこと、ほかの誰も知りません。加治君と私が相談して決めたことですから」

吉野は、板倉が知っているということは伏せておいた。

「それから、加治君と私は共同研究をしています。ですから、私が彼をいびり出したなんてことは、デマだということがすぐにばれますよ」

「おい、今何と言った。共同研究だと。俺はそんなことを認めてはおらんぞ」

「いえ、ちゃんと認めていただいていますよ。先生が承認したというハンコも、しっかりいただいています」

この時、吉野は事務の長谷川がとってくれた処置に感謝していた。実は、

デイビッドから吉野に対して共同研究の申し出があった時、吉野は何も手続きが必要ないと判断していたからだ。個人的な問題だと捉えていたのである。

ところが、デイビッドからオーランド大学の研究所に出す手続き書のコピーがファックスで送られてきた時、長谷川が偶然それを見て、吉野に注意したのだ。

そして、すぐに学内の手続きをとるよう促した。実は、加治のことがあったので、吉野としては、あまり表だつたことをしたくはなかったのだが、それは取り越し苦労であった。学内申請書に英語の共同研究契約書を添付して申請したのだが、誰からもとがめられることなく、一週間後には許可が下りた。

なんと、その契約書には、オーランド大学側の研究補助員として加治の名前があったのだが、誰も気づかなかつたようだ。もちろん、そこには白井の判も押してある。

「俺のハンコだと。しかし、俺は認めた覚えはない。それに何で加治との共同研究になるんだ」

「いずれ、正式な許可が下りている申請です。また、事務方には、私から説明しますので、どなたに話せばいいのか教えて下さい」

そういふと、白井はあわて出した。事務といいながら、自分が言い出したに決まっている。

「いや、そこまではする必要はない。正式な許可が下りているかどうか僕が確認しよう。それまで、この問題はペンディング」

ペンディングも何も、まったくのぬれ衣だ。

「では、失礼します」

と言って、吉野は白井の部屋を後にした。

吉野は、どうしようか迷つたが、今日のことは板倉の耳に入れておいた方がよいと思った。事務で確認すると板倉は部屋に居るといふ。

部屋のドアをノックすると、板倉は

「おお、吉野君か、入ってくれ」

と中に招じ入れてくれた。大きさは、吉野の部屋よりも少し大きいのが、やはり狭いという印象はいなめない。驚いたことに、壁は洋書ですべて埋まっております。机の上は読みかけの論文や雑誌で覆われている。すべて英文だ。

「狭くて悪いな。ところで、白井は何と言つてきた」

「あれ、僕が白井先生に呼ばれたことをご存知なんですか」

「こう見えても、俺のシンパがいるんだよ。もし、俺のところに来なかったら、こっちから行こうと思っていたところだったよ」

吉野は、白井とのやりとりを説明した。

「白井のやりそうなことだ。事務方とかなんとか言っているが、全部あいつがしかけたことだろうな」

「ええ、僕もそう思いました」

「それにしても、長谷川ちゃん、さすがに機転が利くね。もし申請書が出ていなければ、おそらく、それを理由に吉野君はクビだったろうね」

「わたしも、少しほっとしています」

「まあ、でも白井には英文が読めないから、いくら契約書を添付しても、吉野君が心配するようなことは起こらなかつただろうけどね」

「えっ、英語が分からないんですか」

「ああ、東都大学の教授連中に英語の堪能なやつはほとんどいないよ」

「でも、英語で論文を書かれている先生がやまのようにいるじゃないですか」

「ああ、あれか。あれは、専門の翻訳業者に金を払って、日本語を翻訳してもらっているんだよ。その日本語も学生に書かせたものだから、どうしようもない」

吉野には、にわかには信じられないことであった。

「ただし、加治のことがばれたのは、少しまずかったかな」

「そうですか。私も迷ったんですが、もう大丈夫だろうと安心して言ってしまったのですが」

「多分大丈夫とは思いますが、あいつら、常識では考えられないことをしてくるからな。前にも、文化省と外国省を使って、優秀な外国人を追い出したことがあるんだ。その外国人、かわいそうにビザをとりあげられちゃったんだよ」

「そうですか。国家権力が悪党に味方しているのは困りますね」

「とにかく、この件は、加治と吉野君のかつての上司にも至急、連絡した方がいいだろう」

「分かりました」

「まあ、吉野君に何もお咎めがなくてほっとしたが、あいつら次の手を考えてくるから、気をつけといた方がいいぜ」

吉野は、悲しくなった。大学とは学問の府であり、教育や研究に情熱を傾ける場のはずである。それが、権力を握った愚鈍な連中が支配している。板倉は、日本の大学はどこも似たりよったりと話しているが、それならば、日本の将来は暗い。

そして、吉野は少し心配になった。加治がアメリカに渡ったことが、白井にばれてしまった。アメリカでは、白井にも手が出せないだろうと、たかをくくっていたが、どんな手を使ってくるか予想がつかない。

### 板倉伝説

吉野は、東都大学に移ってから、まだ一度も板倉の部屋に入ったことがなかった。板倉の部屋をじっくり観察した。壁にとりつけた本棚は洋書で埋まっている。

「板倉先生の蔵書はすごいですね」

「本を並べるだけならばかでもできるよ」

「実は、先生の専門をよく聞いていなかったんで、いつかお部屋におじゃまして、じっくり聞こうと思っていたところなんです」

吉野は、興味深そうに板倉の蔵書を眺めていた。

その時、ふと、サンタモア研究所という文字が目にとまった。

サンタモア研究所は、アメリカの研究者が複雑系という学問を創始したことで有名な研究所である。現在の多くの学問は、ごくごく単純化されたものしか扱えない。たとえば、二個の粒子の相互作用は計算できるが、三個以上となると厳密計算ができないのである。ところが、普段われわれが扱うのは、莫大な数の粒子の集合体である。このような系は、真正面から取り組んだのでは対処できない。そこで、登場したのが、複雑系である。しかも、複雑系は理系だけではなく経済学や社会学など、ありとあらゆる分野に波及効果がある。このため、大きな注目を集めたのである。

この研究所は、人種や職種に関係なく、すべての研究者に開放されていた。よって、世界中から野心的な研究者が集まってくる。

何年か前に、この研究所が主催して、複雑系に関するシンポジウムを開いたことがある。この会議は世界中の注目を集めた。会議の基調講演で、ノーベル賞を受賞した著名な物理学者がとうとうと自分の考えを述べた。複雑系

を扱うためには、いままでの学問を全否定して、まったく新しい物理を構築する必要があると唱えたのである。

これに異を唱えた研究者が居た。若くて、背の高い日本人研究者である。彼は、莫大な粒子を取り扱うのに、われわれは統計的な手法を取り入れてきた。もちろん、その方法は完璧ではないが、従来 of 学問を全否定すべきではないと反論したのだ。

ふたりの議論は長時間にわたったが、多くのひとが驚いたのは、日本人研究者の弁がたつことであつた。日本人の英語下手は世界的にも有名である。しかし、この研究者は、流暢な英語で、しかも、臆することなくノーベル賞学者と対等に渡り合い、最後には多くのひとがこの日本人に賛辞を贈つたという。そして、その若き研究者の名前が確か K . I t a k u r a だつた。

聡は、思わず声に出していた。

「もしかして、先生は、あのサンタモア研究所のドクター・イタクラですか？」

板倉はそれがどうしたと言わんばかりに

「サンタモア研究所に勤めたことはないが、シンポジウムに参加したイタクラは私だよ」

と答えた。

聡は絶句した。あの伝説の I t a k u r a が、目の前にいる板倉だつたのだ。

実は、東都大学に来てまもなく、かつての指導教授のデイビッドが、板倉の名を大学の名簿でみつけたと言って、わざわざ連絡してきたことがあつた。

「世界的な研究者がそばにいる。それは幸せなことだ」

そうメールには書いてあつた。

その時、吉野は板倉のことをよく知らなかつたし、無遠慮に大学の重鎮である白井をばかにするのをよく耳にしていたので、板倉に対してあまりいい印象を持っていなかった。いま、ようやくデイビッドのメールの意味がわかつた。

それにしても、世界的に評価の高い先生を、こんな犬小屋のような部屋に押し込めている東都大学とはいったいどんな大学なんだろうか。吉野は腹が立ってきた。

「あの有名な板倉先生を、こんなひどい目にあわせるなんて、この学校はいったいどういう学校なんですか」

憤慨してそういと、板倉は笑った。

「おいおい、研究者はいま何をやっているかが大事なんだ。過去の栄光なんか何の役にも立たないよ」

「でも、白井みたいなばかのがのさばっているじゃないですか」

「おいおい、白井とはじめて呼び捨てにしたな。でも、吉野君みたいに前途有望な若者は、もっとうまく世の中泳いでいかなきゃ。とは言っても、もう遅いか」

吉野は、この大学にいつまで居られるか分からないが、せっかく、板倉と知り合ったのだ。これからは、学問の話ができるだけしよう。こう心に誓った。

## 策略

白井は助教授の種田に向かって、いかにも不愉快という表情で、こうはき捨てた。

「おい、加治がアメリカに行ったということを、どうして今までつかめなかったんだ。あれほど動向を探るように言っていたはずだろう」

種田はすっかり小さくなっている。

白井は、種田を使って、板倉や吉野といった白井に不満を持っている連中の動きを探らせていた。学生とはいえ、加治も、要注意人物のひとりであり、何人かで監視していたはずだ。そのための活動費もかなり渡してある。

「たしかに、この頃、加治の顔をみないという報告は受けていたのですが、まさか日本を離れているとは思ってもみませんでした。それに、大学をやめた学生のことは、どうでもよいかと軽くみていたものですから」

「そこが、君の甘いところなんだ。ちょっとした油断が深刻な事態をまねく。加治は、お前の弟ができなかった結晶の合成をオーランド大学ではじめたそうだ。もし、ここで、あの結晶がふたたびあらわれてみる。世の中大騒ぎになるぞ。ただでさえ、俺のことを疑っているやつらがいるんだ」

白井は、吉野との面談のあと、ただちに加治のアメリカでの行動を探らせていた。そして、不愉快きわまりないことに、なんと加治が、あの結晶づくりに挑戦しだしたという情報が寄せられたのだ。

それにしても、あの吉野という助教授は、とんだ食わせモンだった。こん

な作戦に出てくるとは夢にも思っていなかった。

白井は、種田を部屋から追い出した。やっぱり、バカは、なにをやらしても中途半端だ。おそらく加治の件は退学で片がついたと安心していただけだろう。考えが甘い。権力の座というものは、少しのほころびで瓦解する。白井は、周到に、湯川の動向にも目をそそいでいた。

実は、湯川は東都大学退官のあと、都内の私立大学への再就職が決まっていた。白井は、自分の子飼いの教授をつかって、教授会での決定を覆すように画策した。いわく、湯川は学術研究費補助金で不正を働いた人間であり、そんな問題児を採用すべきではないと。

この作戦はみごと成功し、湯川の採用は取り消された。湯川が私立大学とはいえ、教授の座につくことは白井にとっては都合がわるい。その後、湯川は定職をもたずに、いくつかの非常勤のポストをつとめている。

陰では、白井の悪口をいいふらしているようであるが、「不正を働いた人間」という白井の宣伝が功を奏し、誰もまともに相手にしないらしい。へたに湯川に同情などしようものなら、白井の反感を買うからだ。そんなばかなことをする人間はいない。

白井は、いい事を思い出した。そして、おもむろに外国省の課長補佐の笠原に電話をかけた。笠原は女癖の悪い役人で、東南アジアからの不法入国の女性に、滞在許可証を出してやると言っでは、自分の毒牙にかけている。

なにを勘違いしたか、東都大学にタイから留学している女子学生にも同じ手口で言い寄ろうとした。どうやら、同名の別人と勘違いしたようだ。白井は、留学生からの訴えをうけて、調査を行った。そして、笠原の悪行を知ったのである。

白井はどう対処するか悩んだが、結局、事件をもみ消すことにした。そして、この留学生をうまく籠絡して笠原を助けたのである。

留学生は不満があったようだが、白井の「日本の役人はみな同じようなものだ。ここで、騒ぎを起こすと、君自身の将来もあやくなる。ここは、この件をおおやけにせず、役所に恩を売っておいた方が君のためになるよ」

という説得に、しぶしぶ納得した。

それ以来、笠原は、白井の言うことを何でも聞くようになっている。

ホットラインにコールすると

「これは、これは白井先生、ご無沙汰しております。そろそろ、こちらからも連絡を差し上げようと思っておりました。実は、最近、フィリピンのいい子が手配できまして、また、先生を接待しようと思っていたところです」と、笠原はまくしたてるように言った。

白井は、こいつは、懲りないやつだと思ったが、本題に入った。

「今回は、緊急事態だ。そんな話はあとでいい」

こういふと、白井は事情を説明した。

「なるほど、その加治という学生のアメリカ行きに何か問題がなかったどうかということですね」

「ああ、そうなんだ。何か手はあるかな」

白井には、笠原のようなチンピラではなく、もっと上の局長クラスを動かす力もあるが、いまは、そこまでは使いたくない。

「その加治という学生は留学しているのですか」

「それが、どうも留学ではないらしい。大学付属の研究所で、研究補助員というものをやっているらしい」

「研究補助員？」

「ああ、昔のアメリカの大学では、家が裕福ではない優秀な高卒の学生に実験の手伝いをやらせて、大学を出してやるという制度があったようなんだ。それが研究補助員ということのようだが、今回は、その制度を利用したらしい」

「働いているということですか？」

「そうなるな」

白井は、にがにがしく思った。留学ならば、成績証明書など、いろいろな書類を大学に申請する必要がある。ところが、今回の加治の件では、それが必要のない方法だ。あの若造の吉野にうまくしてやられたという格好である。しかも、うかつなことに、共同研究の申請書には、自分の判まで押してある。

吉野を追い詰めながら、あと一步で逃してしまった。

白井は、屈辱的な吉野との面談を思い出した。

「白井先生、加治という学生が博士四年への進学を決めたあと、アメリカに渡るまでの時間はどの程度だったのでしょうか」

「それはあっという間だよ。一ヶ月もなかったろう」

もっと時間があれば、自分も気づいたはずだ。

すると、笠原はこう言った。

「それなら手はあります。おそらく、加治という学生は就労ビザをとっていないはずです」

「就労ビザ？」

「ええ、留学や仕事でアメリカに長期滞在する場合にはビザが必要です。ビザ取得には、最低でも三ヶ月はかかります。かなり敵はあわてていたのでしょう。いったん、ビザ免除プログラムでアメリカに渡って、その後、ビザをとるという作戦でしょう。でも、これは、よほどのことがない限り、認められません」

「加治は法をおかしたということかね」

「そこまではいえませんが、向こうの移民審査官に訴えれば、日本に帰国させられる可能性が高いかと」

白井は、笠原に相談してよかったと思った。

「よし分かった。その手でいこう」

とは言っても、白井が表に出て

「加治の渡航に問題がある」

とは訴えられない。

「白井先生、わたしにいい考えがあります。アメリカの移民局に、わたしの知り合いがいますので、そちらから手をまわしてみましよう。なあと、ちょっと、この件を耳打ちするだけで、向こうは動いてくれるはずですよ」

白井の顔が急に明るくなった。

「そうか、よろしく頼む」

ばかとはさみは使いようと言うが、笠原という役人に恩を売っておいてよかった。

## アカデミックハザード 加治の物語 連載 6

ビザ

それからまもなく、加治はデイビッドから呼び出しを受けた。米国移民局から、加治の滞在に対して、クレームが入ったというのだ。どうも、日本の外国省がからんでいるらしい。白井が裏から手を回したようだ。

先日、加治は、吉野からメールを受け取っていた。吉野は、加治がアメリカに行ったことを、しばらくは、白井に内緒にしていたらしい。ところが、ある一件で、そのことが、白井にばれてしまったのだ。

吉野からは

「白井がどんな手に出てくるか分からないので、気をつけるように」という忠告を受けていた。しかし、加治は、アメリカまでは白井の手が回らないだろうと安心しきっていた。それが油断だった。

デイビッドは、加治が、就労ビザなしで米国に入国して、オーランド大学で研究補助の仕事をしているのが問題になっていると説明した。普通は、大学で研究している場合には、このようなことは、あまり問題とされないのだが、日本の外国省から、直接クレームが入ったようだ。そこで、移民局も動かざるを得なかったということなのだろう。

「この問題に関しては、大学の幹部を動かして、何とかマスがそのまま滞在できるように頑張っている」

とデイビッドは言ってくれた。しかし、最悪の場合には、いったん加治は日本に帰国しなければならないと言う。

デイビッドから、この知らせを受けた吉野もかなり心配しているようだ。板倉は、吉野にこう言ったそうだ。

「まあ、加治が日本に戻ってくるのは覚悟しといた方がいいな。その時、気をつけるのは、どんな手で、白井たちが加治の米国行きを阻止するかということだ」

つまり、加治がいったん日本に帰ってしまうと、二度とアメリカに渡れないような手を打つかもしいけないというのだ。

実は、白井が、かつて加治たちから騙し取った結晶は、アメリカでも大変な評判になっていた。ところが、その後、同じ結晶がまったくできない。白

井のところには、いろいろな研究グループから結晶を分けてほしいという依頼が集まっていた。しかし、白井は、その要求には応えられない。このため、あの結晶は白井が本当につくったのかと多くの研究者が疑いだしたようなのだ。そこに、今回の加治の結晶が現れたら、どうなるか。そして、加治は、本当にいい結晶をつくってしまった。どうやら白井は、そのうわさを聞きつけて、かなり神経質になっているらしい。

というのも、白井は、今年度の日本学会賞を受賞する。東都大学としても派手に宣伝し、祝賀パーティーも計画している。そして、その功績の大きな部分が、加治の結晶だ。白井としても心穏やかではないところだろう。そこで外国省を巻きこんで、今回の策を練ったに違いない。

#### 加治の論文

それから数日して、加治はデイビッドに呼び出された。加治は、このままアメリカに居られることになったので安心して欲しいという。

デイビッドが動いて、大学全体として移民局に嘆願したらしい。アメリカは面白い国である。たとえ、外国人であっても、アメリカの国益になると判断するとおおいに便宜を図ってくれる。デイビッドが学長に、いま加治を日本に返したら、大学の将来のためによくないと掛け合ったらしい。

加治は、安心して、最初の論文の執筆にとりかかった。生まれて、はじめて書く本格的な論文である。

それから、ほどなくして、加治から吉野のもとに、論文の草稿が送られてきた。それは、結晶づくりに関するものであった。そこには、白井たちの論文になかった、どのようにすれば良質の結晶ができるかということがつぶさに書かれていた。そして決定的であったのは、白井たちの結晶をエックス線で分析した時にあったなぞのピークが、今度の結晶では完全に消えていた点だ。つまり、そのピークは不純物によることがはっきりしたのだ。

吉野は、久しぶりに興奮して論文を読んだ。英文にたどたどしさがああり、文法の間違いもあったが、間違いなく血の通った論文であった。吉野は、分かりにくい表現も含めて、文章を添削して送り返した。その後、吉野が修正した論文を読んだデイビッドから興奮したメールが届いた。これは、研究所が発表した論文の中でも最高傑作のひとつになると書いてきた。

デイビッドの手が入って完成した論文のコピーがほどなくして届いた。もちろん、著者の筆頭は加治であるが、驚いたことに、吉野が共著者として載っている。自分は、相談に載っただけで、謝辞に名前を載せてくれるだけで十分だと返事を出したが、デイビッドも加治も、吉野の貢献が大きい研究だということで、どうしても共著者に入って欲しいと懇願された。

吉野が、加治の論文の草稿を持って板倉のもとを訪れると、それを一読した板倉は、感動した面持ちで

「やはり、俺の目は節穴ではなかった。加治は本当に優秀な研究者だ」と賛辞を送ってくれた。

吉野は、共著者になってくれと懇願されて困っていると板倉に相談した。板倉は、こんな立派な論文の共著者になれるのは幸せなことだと言ってくれた。ろくな貢献もしないくせに、名前を載せると脅かしてくるやつが日本にはごまんと居る。その点、吉野は純粹すぎるとも言った。板倉の意見も聞いて、吉野は共著者になることを承諾した。

デイビッドは、この論文はワールドサイエンスに投稿すると知らせてきた。ワールドサイエンスは、あらゆる科学分野の論文を掲載する科学ジャーナルで、この雑誌に論文を掲載されることは最高の荣誉とされている。それだけに競争も激しいのだ。

ほどなく編集者から

「この結晶を世界ではじめて合成したのは、日本の東都大学の白井グループで、この論文は、その研究の二番煎じであるから、掲載はできない」というコメントが寄せられたという。加治は、期待が大きかっただけに落胆も大きかった。

すると、デイビッドは

「マス、あきらめるのはまだはやい」と言った。

デイビッドは、編集者に反論の手紙を書いた。

「白井の論文には、結晶づくりに関する記載はいっさいなく、結晶を評価した研究者からも不満の声が寄せられている」と。

そして、この論文を読んでもらえば、誰が結晶をつくったかがよくわかるはずだと訴えた。

その後、何度かやりとりがあったようだが、最終的にワールドサイエンス

への掲載が決まった。どうやら、編集者も裏事情を察したらしい。そして、加治こそが、真の結晶づくりの担い手だということを認めたのである。

しかし、これは大英断である。なぜなら、ワールドサイエンス誌としては、前回の論文をすでに掲載している。いくら作り方が書いていないとはいえ、同じ結晶に関する論文を掲載するということは、自分たちの非を認めることになる。もちろん、多くの研究者が知りたいことが、この論文には書いてある。商業誌であるワールドサイエンス誌にとっても、論文が話題になることは損ではない。

吉野が、このことを板倉に報告すると

「すごいじゃないか。最初の論文がワールドサイエンスなんて、加治もすごいことをやってのけたな」と喜んだ。

「わたしも、その共著者のひとりになれたのですから、大感激です。板倉先生ありがとうございます」

と素直に感謝した。

「俺が言ったとおり、加治の復讐劇が始まるぞ。これからが、大いに見ものだな」とつぶやいた。

「そうだ、聡、前祝いに飲みに行こう」

「大賛成です」

その晩の板倉は上機嫌で、加治万歳、吉野万歳を何度も繰り返した。

## 反撃

論文が掲載されたワールドサイエンス誌が送られてきた時、吉野は本当に感激した。この名誉ある論文に、自分も名を連ねることができたのだ。

掲載された次の日に、ある新聞社から取材したいという連絡が来た。ワールドサイエンス誌は、科学ジャーナルと言っても、商業誌である。研究が掲載されるまでは、完全な秘密主義となるが、掲載後はその内容をマスコミに宣伝する。加治の論文は、この号のトピックスとして取り上げられていたのである。その内容はこうだ。

「かつて、日本の研究者によってつくられたまぼろしの結晶が、ようやく、そのベールを脱いだ。どのようにすれば、良質な結晶をつくれるかが、この論文にはすべて書かれている。」

英語の読めない白井は、この事件については、まったく知らなかったようだが、吉野を取材した記者が、大きな記事を書いたために、ようやく加治の論文の存在に気づいたようだ。

その記事は

「まぼろしの結晶のベールをはぐ」

というリード見出しのもと、つぎのような記事となっていた。

「米国オーランド大学加治雅人研究員、デイビッド・コーンウェル教授、東都大学の吉野聡助教授らの研究グループは、これまでまぼろしの結晶と呼ばれていたあるセラミックスの製造方法を世界的に有名な科学雑誌のワールドサイエンスに報告した。加治研究員らは、結晶合成する際に入る不純物を調べていたところ、偶然、この不純物が安定な化合物を形成することを発見し、この化合物を融液の中に入れて結晶成長させたところ、不純物のない良質の結晶の合成に成功した。…… なお、このまぼろしの結晶は、東都大学のある研究グループが合成して、米国の研究機関が評価したことで世界的な成果と評判となったが、その後、研究グループは結晶の合成は難しいとして、二度と結晶が合成されることはなかった。このため、多くの研究者から不満の声が寄せられていた。実は、加治研究員は、当時、東都大学に在籍しており、もしかしたら、最初の結晶も加治研究員の作ではなかったのかという疑問の声も上がっている」

この記事を読んだ板倉は愉快そうに

「あのデブガエル相当にあわてているだろう」

と吉野に言った。

つぎの日、東都大学の白井教授のコメントが同紙に寄せられた。

「かつて、東都大学の博士課程に在籍していた加治君が、世界的に評価される研究成果を出されたことに対しては、かつての指導者のひとりとして大いなる賛辞を送りたい。ただし、新聞記事にあるような、前の結晶も加治君がつくったのではないかという憶測は事実無根であり、場合によっては、名誉毀損にあたる。おそらく、私の教え子が結晶づくりをしていたのを横で見ている、それをまねしたのであろう。この点に関しては、研究者としてのモラルという面から問題がないとは言えないが、今回は不問に付したい」

吉野は、このコメントを読んであきれかえった。しかし、知らないひとが読んだら、加治が白井のまねをしたと思い込んでしまうだろう。なにしろ、

白井が大教授で、加治は一介の学生に過ぎない。

板倉も白井のコメントを読んだらしく

「白井は、うまくごまかしたつもりだろうか。素人はだませても、玄人は黙っていない。それに、これは国際問題だ。そんなに簡単にはごまかせないよ」と言った。

それから、しばらくして、吉野のもとに「科学日本」という科学雑誌の記者の出口から取材の申し込みがあった。板倉の紹介だという。この科学雑誌は、日本では硬派の科学ジャーナルとして知られている。素人向けに、分かりやすいが不正確という科学雑誌が多い中で、掘り下げた科学記事をいくつも載せていた。この記者は、アメリカまで取材に行くとはりきっていた。

## 学長室

白井は学長室に呼び出された。理由は分かっている。東郷の机の上には、ワールドサイエンス誌に載った加治の論文が置いてある。

「ひさびさに論文を読んだ。すばらしい論文だったよ」

白井が席につくなり、東郷は雑誌を投げてよこした。

「当然、きみも読んでいるんだろう？」

「いえ、それが、忙しくて読む時間はありませんでした」

「何を言っている。君の進退にもかかわる問題ではないか」

東郷には、白井が加治と湯川から結晶を盗んだことはお見通しである。しかし、そのやり口があまりにも稚拙であった。ふたりを共著者に入れるという方法もとれたはずだ。白井の「湯川にくし」という感情が引き起こした不幸ではあるが、あまりにも拙速すぎる。

東郷は、なにかと白井を目にかけてきた。自分の姪をめとらせたのも閨閥をつくろうと思ったからである。白井は研究者としてのセンスはゼロであるが、悪知恵はよく働く。また、権力には忠実である。目をかけた自分には、絶対の忠誠を誓ってきた。

白井のおかげで、東郷の学長選のライバルたちを蹴落としてきたのも事実である。しかし、白井は、最近勘違いしているようだ。権力の座についたおかげで、自分に力があると錯覚している。

これまでは、何事も東郷に相談してきたが、最近はスタンドプレーが目立

つ。

「きみが英語が苦手ということは知っている。しかし、苦手克服の努力をするのも必要だろう」

白井は心の中で

「なにを言っているんだ」

と思わず口走り、むっとした。

白井が学生の時代には、国際性ということなど話題にならなかった。海外に渡るものたちは、日本での仕事にあぶれた落伍者と思われていたのである。日本の大学で職をえるためには、教授のためにつくすだけつくして、雑用をこなし、奴隷のように仕える。そこで認められれば、ようやく助手の職がもらえる。英語がへたにできることは、出世のじゃまでさえあれ、得にはならなかった。

白井の三年先輩で、非常に優秀な助手が居た。英語も堪能で、研究室の英語論文を一手にひきうけていた。ところが、教授の逆鱗にふれる出来事が起こった。

この教授は、英語がまったく話せないくせに、学生の前では、さも国際人というような顔をしていた。海外の有名な教授の名前を出しては

「先生とは、夜を徹して議論したこともある」

などと吹聴していた。

ある日、海外から有名な研究者が大学を訪れ、講演を行うことになった。くだんの教授はぼろが出ないように、簡単なあいさつだけして辞する予定であったが、その場の雰囲気、講演会場に残ることになってしまった。

その外国人研究者は、気を使ってか、講演後に教授に話しかけた。ところが、その教授は、講演の内容どころか、質問さえ理解できていないのがみえみえだった。

白井は、はらはらしてみていたが、見るに見かねた助手が、ようやく助け船を出した。そして、教授が傷つかないように、うまく、その場を切り抜けたのだ。白井は、その対応にいたく感心した。その場にいた人間も、みなほっと胸をなでおろした。

一方で、誰も口には出さないが、それまでいかにも自分は英語が堪能だと自慢していた教授が、実は、英語がまったくできないということが学科中に知れわたってしまった。

これが、教授を不快にさせた。

「あいつは、俺に恥をかかせた」

そう言って、その優秀な助手を、理由のない理由をつけてクビにしてしまったのである。

白井の若いころは、そんな時代であったから、白井はあえて英語の勉強をしなかった。学内政治に英語は必要ない。そのことを、よく認識したからだ。むしろ、国際性など、足かせになるだけである。

教授にとっては、優秀な部下よりもできは悪いが、自分に忠誠を誓うものの方が扱いやすい。

白井も、当時の教授たちには

「先生方のレベルには遠くおよびません」

というお追従をいいながら、絶対に適わないという態度で接してきた。教授らも、平身低頭する白井をにくからず思ったはずである。

しかし、学長の東郷は

「ネイティブのようになれとは言わない。しかし、英語の文書を理解する程度の英語力は必要だろう。今回の件でも、君がもう少し英語ができていれば、ここまで追い詰められなかったはずだ」

と叱責した。東郷は、吉野の申請にめくら判を押したことも怒っているのだ。そして、追い討ちをかけるようなワールドサイエンス誌への論文掲載である。

「学長はなにをいいたいのですか」

「あの結晶は加治君がつくったものなのだろう」

「それは違います。あれは、ポスドクの種田がつくったものです」

東郷はあきれた。あの白井が開き直っている。いままで白井は東郷になんでも打ち明けてきた。しかし、ここではみえすいた嘘を通そうということらしい。

「だったら、どうして加治君がこんな立派な結晶をつくれるんだ」

「おそらく、種田がつくるところを盗み見ていたのでしょう」

「そんな世迷言が通ると思っているのか」

東郷は相当はらをたてているようだ。

白井は、ここで邪推した。

「東郷はもしかしたら、白井が日本学会賞を受賞することに嫉妬しているのかもしれない」

だから、何かと難癖をつけたいのだ。

白井は覚悟したように東郷に言った。

「学長、事ここにいたっては、それで通すしかありません」

「何を言っている」

「いまさら、真実を話したところで、われわれには益がないということです」東郷は、白井が「われわれ」というように東郷を含めたことを不愉快に思った。しかし、白井の言うとおりである。ここで、白井を失脚させたとしても、自分には不利にしかない。なにしろ、白井は、東郷の裏の裏を知りつくしている。

東郷は、ふと山下のことを思い出した。

#### 山下事件

文化省の平岩は、なにかと東郷のことを支援してくれていた。東郷は四〇歳という若さで東都大学教授となった。しかも、助手からいきなり教授へという異例の人事であったため、当時、新聞などでも話題をさらった。東郷には、学問的な業績はなかったが、不思議と教授連中の受けがよかった。

東郷の三年先輩で、世界的に活躍している助教授が同じ学科にいたが、教授連中からは不遜な奴と煙たがれていた。ある国際会議で、この助教授が招待講演を行ったことがきっかけだった。その講演は参加者から喝采を浴びたが、同じ会議には、学科の先輩教授も参加していた。しかも、教授の発表は招待講演どころか、その他大勢のポスター発表にまわされたのである。これを根にもった教授は、その後、機会があるたびに、この助教授のことを誹謗した。

ところが、ある教授が、この助教授の昇進を教授会に打診したのである。それを快く思わない教授たちが相談して、年の若い助手の東郷を教授にしようとして画策したのである。教授会は多数決である。いくら正論をはいたところで、裏で談合されていたのではどうしようもない。結局、東郷の教授昇進が決まった。

その助教授は、自分よりも年の若い東郷が教授となったため、大学を去らざるを得なくなった。その後、アメリカにわたって、いまでは世界的に有名な教授となっている。

東都大学では、教授になったとたんに権力が集中する。若い東郷は、年寄り連中を籠絡して、大学内での地位を不動のものとした。平岩は、当時は文化省の課長補佐であったが、年の近い東郷を支援した。東郷をうまく利用したと言えなくもないが、ふたりが互いに肩を組んで、権力の階段を上ったとも言えよう。

平岩は、省内の重要な委員会の委員には、必ず東郷を推薦した。東郷は役所の望む方へと委員会の意見を誘導するのが上手であり、しだいに、省内でも一目置かれる存在となっていた。

東郷は四十五歳という若さで工学部長となった。この頃、東郷の腹心となったのが、白井である。助教授の白井は、東郷に取り入ることで、大学内での地位を確保しようとしていた。東郷も白井のことを重宝した。白井は、研究者としての才能はゼロであるが、裏工作には長けていた。

若くして教授となった東郷には、他の教授連中からの嫉妬もあり、何かと足を引っ張ろうとするものも多い。白井は、これら反東郷派の失脚を画策し、着々と東郷の信頼を得ていった。

たまに東郷は  
「白井はやりすぎではないか」  
と思うこともあったが、白井の働きで、東郷の地位が盤石なものとなったのも確かである。

東郷の出世とともに、平岩も順調に省内で力をつけていた。東郷と組んで、文化省としては、巨額の予算をもってくる。どれだけの予算を獲得したか。これが役人の評価となる。平岩は、高等教育課長となり、かなりの金額を動かせるようになっていた。

平岩は  
「自分はいずれ選挙に出る」  
と宣言していた。

財産省や経済省の役人に比べると、文化省の役人は不遇を困っていた。いかんせん、取り扱う金額の桁が違う。議員になるのも、この二つの省庁出身者が圧倒的に多い。そして、族議員となって、せっせと予算を運んでくる。もちろん、役所からの見返りを期待してのことではあるが。

「文化省出身の力のある国会議員がいないといけない」  
これが平岩の持論であった。

平岩は、これからの時代は大学を利用するのが得策と考えていた。小学校や中学校には巨額の予算がついているが、使い道は決まっていて、新しい分野の開拓は難しい。それに比べて、大学に出ている金は、微々たるものだ。これから、伸びるとすれば大学である。

さらに、平岩は手を組むならば、年寄りではなく、自分と同世代の人間がよいと考えていた。いくら権力があっても、大学教授は定年がくればそれまでだ。

平岩が幸運であったのは、当時、日本の大学の世界における競争力の低さが指摘され、それが、予算が少ないせいだと一般に喧伝されだしたことである。

「世界に自慢できる新しい研究所をつくる」

平岩は、東郷に、研究所の新設を文化省に働きかけたらどうかと打診した。

「予算は三億円」

東郷は眼を丸くした。そんなに予算がつくのだろうか。しかし、平岩は、自分が動くので勝算はあると言った。

平岩は、自分は近い将来、与党の民自党から選挙に出ることになっている。そのための資金が必要だと東郷に明かした。それまでも、東郷と組んで、東都大学に降りる予算から、裏金づくりをしていたが、選挙資金としては十分ではない。新研究所設立を機に、いっきに資金を増やしたい。それが平岩の希望である。

計画はスムーズに進んだ。文化省側の対応責任者が平岩となり、東都大学側の責任者が東郷と白井となった。予算も希望額がついた。

「このままでは、日本の科学は死んでしまう」

この切実な東郷の訴えに東都大学執行部も文化省も心を動かされたのである。

しかし、ここで思わぬ事態が起こった。新研究所の所長人事である。東郷は、白井をその任にあてようとしたが、文化省から、世界的に活躍している人材を探すべきという意見が出た。

平岩は、やっきになってこの案をつぶそうとしたが、文化省の心ある若手が、元東都大学助教授の山下を推してきたのだ。東郷は、山下のことはよく知っていた。白井のかなう相手ではない。

省内でも、もし山下が引き受けてくれるのならば問題ないという意見が強

くなっていった。東郷の期待は、山下が、この話を断ってくれることであった。

山下は、研究に専念したいがために、東都大学での教授昇進の道を捨ててアメリカに渡った人間である。政治には無関心の純粋な研究者だ。そんな人間が、今回の話をのむとは思えない。

案の定、山下は所長就任を断ってきた。東郷がほっとしたのも束の間、なんと、アメリカまで山下を説得にいったバカがいたのである。そして、あるうことか、山下は所長になることを承諾したのである。

「これは、まずいことになりましたね」

平岩は心配していた。

「山下は、世事にうといので、われわれの不正には気づかないのではないか」東郷は、気休めを言った。

「何事にも油断は禁物です」

平岩には大いなる野望がある。ここで、つまづくわけにはいかない。

平岩は、子飼いの部下を使って、山下には予算関係の書類を見せないようにした。ところが、不正の臭いを嗅ぎ取った山下は、強硬に書類の提出を求めてきた。

仕方がない。平岩はあきらめた。そして、部下に命じて、山下に書類を届けさせた。もちろん粉飾済みである。接待費を常識的な額より多く使っているという問題はあるが、予算書だけからは、不正はわからないはずである。

ところが、山下は甘くなかった。なんと、業者側の決算書をどこからか手にいれたのである。これでは、隠し通せない。

東郷は、金をえさに自分たちの仲間にも山下を引き入れようとしたが、山下は頑として断った。このままでは、東郷と平岩は失脚する。

白井が、この時、いい案を出した。

「向こうが糾弾する前に、こちら側からしかけるのです」

そして、山下が研究所の予算を不正に流用しているという噂を流した。もともとは、事務員が発注した案件であるが、山下が命令したようにみせかけたのだ。そして、マスコミを利用して、山下を悪者にしたあげた。

これで、山下はアメリカに帰るだろうと東郷は思った。ところが、山下は、なんと証拠書類を持って、マスコミに対し、東郷たちを糾弾すると宣言した。平岩は

「最後の手段に出るしかない」

と思い詰めた様子で、東郷と白井に語った。

その後起きたことは、東郷にとってはショックであった。いくらなんでもあそこまでやる必要があったのだろうか。いまでも東郷は疑問に思う。

山下は、テレビカメラの前で暴漢に襲われ、命を落とした。東郷は、平岩がいったいどんな手を使って、山下を葬ったのかを知らない。しかし、白井は、この事件の裏には東郷も一枚かんでいると思ったようだ。

いざとなったら、白井はこの件を蒸し返すつもりなのではなからうか。東郷はのっぺりとした白井の顔を見て、少し嫌な気分になった。

しかし、すぐに気を取りなおした。いまでは平岩は与党民自党の大物議員に育っている。現外国大臣である。その権力の大きさは計り知れない。

白井の前で、決してひるんではいけない。

「しかし、今回のやり方はあまりにもまずい。いいか、力のないやつらでも、恨みを買えば、大変なしっぺ返しを食うことがある。君は長井君の件でも、同じ愚を冒しているではないか」

「長井ですか？」

白井は長井と聞いて、はじめは誰のことか思いつかなかった。

「北東大学の長井君のことだよ。君が彼を陥れたことはすべて承知している。しかも私の忠告に逆らって、排除という手段を選んだ」

白井は思い出した。北東大学の長井助教授の件か。

そして、驚いた。東郷はこんなちっぽけな件も知っているようだ。さすがに東郷の情報収集力は優れている。まだまだあなどれない。白井は気をひきしめた。

## アカデミックハザード 加治の物語 連載7

長井助教授

当時、白井は長井の名前も、その研究内容も知らなかった。それを知るきっかけとなったのは、教え子の河野からの電話であった。

河野は、ギャンブル好きでどうしようもない人間だった。大学の研究室にもろくに顔を出さず、まともな研究成果はなかった。それを、親から頼まれて、なんとか博士号をとらしてやったのだ。研究には使えなかったが、白井は河野を助手として採用した。

それは、学生アルバイトに支払う金をキックバックさせ、裏金をつくるためである。河野には、その管理をまかせていた。年に一〇〇〇万円近くの金を捻出したこともある。ところが、河野は失態をおかし、あやうく表沙汰になりそうになった。

そこで、白井は急遽、知り合いの教授に頼んで、河野を無理やり北東大学に押し込んだ。その教授には、学術研究補助金を総額で三万円ほどつけてやった。地方大学では破格である。その教授は、そのおかげで大学での評価が上がったはずである。

日本の研究補助金制度では、どんな成果を出すかよりも、いかに多くの予算を獲得したかが、評価対象となる。この教授は、論文を一報も書かなかったが、それで、咎められることはなかった。

その河野が、ある日、長井という人間に一泡ふかせてやりたいと白井に相談してきた。聞くところによると、長井は研究はできるが、人間性に問題があるという。河野は、徹底的に長井という人間が嫌いなようだ。自分が、採用しようとした人間を押しつけて、北東大学に赴任したということを、ずっと根にもっているようである。

河野の話聞いて、白井自身は、長井を陥れることにあまり乗り気ではなかった。ただし、長井という助教授はプロジェクトでうまく利用できそうな気がした。

白井は、文化省から巨額の予算をえて、大きな研究事業を立ち上げようとしていた。ところが、自分の知っているメンバーではろくな成果が出せそうにない。

長井はどうだろうか。それとなく、まわりの研究者に長井の評判を聞いてみた。すると、かなり優秀であるということが分かった。そんな人間が地方大学に埋もれているのだ。

そして、白井は長井に電話をかけた。

「北東大学の長井先生ですか。私は、東都大学の白井と申します」

長井は緊張した様子で、こう応えた。

「長井ですが、どのような、ご用件でしょうか」

白井は、相手が自分の名前を聞いて、かなり恐縮していることに満足感を覚えた。

「実は、先生にお願いしたいことがありまして電話いたしました。先生は、文化省の次世代技術開発プロジェクトを、ご存知ですか」

「ええ、聞いたことはありますが、私には関係のないことと思っています」これは、日本が、国策として次世代技術開発を積極的に進めようとする壮大な計画であり、総額一〇〇億円を用意している。白井は、統合科学者連合会議の委員として、その計画立案に参画しており、ひとつのテーマをまかせられることになっていた。

「このプロジェクトのひとつとして、次世代半導体開発を推進することが認められまして、私が、そのプロジェクトリーダーを勤めることになりました」長井はいぶかった。それが、自分とどんな関係があるのだろうか。

「今日お電話したのは、先生に、そのメンバーのひとりになって欲しいからです。」

「私ですか？」

思わず、長井の声が裏返った。超大物の白井から、直接、自分に研究メンバーに入って欲しいという依頼が来たのだから、当然であろう。長井は所詮、地方大学の一助教授である。こんな大型プロジェクトに参加できることなどまず考えられない。

「いかがでしょうか。メンバーになっていただけますでしょうか」

「もちろん、喜んで参加させていただきたいと思いますが、本当に、私のようなものでよろしいのでしょうか」

「長井先生は謙遜家でいらっしゃる。先生の研究は、以前から注目しておりました。いつも、その視点の良さに感心しております。ぜひ参加していただきたいと思っております」

白井は、長井の論文など一度も読んだことはないが、まわりから入手した情報をもとに、適当に話をつくろった。

しかし、長井は、有頂天になったようだ。白井のような大先生が自分の研究を評価してくれている。

なにしろ、長井の研究は、海外での評価は高いにもかかわらず、何度、国の学術研究補助金に申請しても、却下されてきた。

「日本ではだめなのか」

と思い込んでいた矢先だった。

「ところで、メンバーとして、どのようなことをすればよろしいのでしょうか？」

「それは、簡単です。先生が、いまやられている研究をそのまま続けていただければと思っています」

「それは、薄膜成長に及ぼす磁場効果ということでしょうか」

「ええ、まさに、先生のおっしゃる研究テーマです。初年度は、とりあえず五〇〇〇万円程度の予算をつけようと思っています」

「五〇〇〇万円ですか！」

長井は驚いた。いままで、一〇〇万円程度の予算でさえ申請しては簡単に却下されてきた。それが、いきなり巨額の予算がつく。これならば、超伝導マグネットを買うこともできる。

「ただし、条件があります」

「それは何でしょうか」

「河野君との共同研究にして欲しいのです」

「河野先生ですか？」

長井は、あのいつも不機嫌そうな顔をした河野のことを思い浮かべて、少し憂鬱になった。

「実は、河野君は、わたしのかつての教え子でして、長井先生のこともしっかり評価しておるのです」

長井は、意外だった。河野はいつも長井につらくあたっている。

「私の学科に、若くて元気のいい助教授がいる。かなり面白い研究もしているので、機会があったらチャンスをやってくれと言われていたのです」

あの河野がそんなことを言ってくれていたのか。長井は、河野のことを誤解していたようだ。

「実は、これだけの予算を委託するとなると、やはり、その代表には教授が  
ついていただくことが慣例となっております。そこで、河野君に北東大学の  
代表としてメンバーに入ってもらい、長井先生には、プロジェクト研究員と  
して活躍してもらいたいのです」

長井にとっては、肩書きは関係ない。予算さえ使えれば問題なかった。

「もちろん、河野君には、研究は長井先生の自由にさせるように  
しております。河野君も、それで異存はないということです。すでに、彼の  
内諾も得ているのです」

長井は、こんないい話はないと思った。

「それと、もうひとつお願いがあります。ポストクをひとり受け入れて  
欲しいのです。もちろん、その人件費は、プロジェクト全体でみることに  
なりますから、先生の予算を使う必要はありません」

長井は驚いた。予算だけではなく、人手も手当てしてくれるというのだ。  
こんないい話はめったにあるものではない。

「白井先生、本当にありがとうございます。私には、まったく異存はあり  
ませんので、よろしくお願い致します」

「先生にそう言っていたいて、肩の荷が下りました。先生の研究は、この  
プロジェクトでも大きな柱のひとつになると考えておりました」

長井は、天にも昇る気持ちだった。自分にも運が向いてきた。

長井は、喜びいさんで河野のもとに向かった。

「河野先生、ありがとうございます。先生のおかげで、国の大型プロジェ  
クトに参加することができました」

河野は、いつもの渋面とは違って、終始、機嫌が良く

「白井先生にまかせておけば、すべてうまくいくよ。期待しているから頑  
張って欲しい」

と長井をはげましてくれた。どうやら、河野のことを誤解していたようだ。  
長井は少し反省した。

家に帰って、長井が妻の由美子にこの話をすると、すごく喜んでくれた。  
「あなたすごいじゃない。国の予算がもらえないといって不平をこぼしてい  
たけど、世の中には、評価してくれるひとがいるのね。白井先生には感謝し  
てもしきれないわね」

その通りだと思った。長井は、自分にチャンスを与えてくれた白井に何とか

恩返しがしたいと実験を始めた。

## 河野の罫

新しいプロジェクトのおかげで、長井は自分の欲しい装置をいろいろと取り揃えることができた。どうしても欲しかった超伝導マグネットを買うこともできた。その運転には、高価な液体ヘリウムが必要となるが、プロジェクトのおかげで、金の心配をすることなく実験をすることができる。

「これも、すべて白井先生のおかげだ」

長井は心から感謝した。

大学も、このプロジェクトには、好意的であった。長井の実験用に新たなスペースまで用意してくれたのである。

しばらくすると、ポスドクの種田が実験に加わった。種田は東都大学の出身で、白井教授のもとで、博士課程を修了したらしい。その後、白井研究室で、そのまま博士研究員として勤めていたが、今回のプロジェクトで急遽、長井のもとに派遣されることになったのだ。

種田は、長井からみると、あまり優秀な研究者には見えなかった。本当に、東都大学出身なのだろうかと長井は思ったほどである。それでも贅沢は言えない。手足になって動いてくれる戦力は貴重である。

長井が困ったのは、種田の手先が不器用なところであった。うっかりミスで、よく装置を壊すのだ。大学院生からは、何とかしてほしいと長井は訴えられた。

しかも、種田は、歳があまり離れていないこともあってか、長井を見下しているところがある。自分が東都大学出身というプライドも持っているようだ。長井が手取り足取り実験指導をしているにもかかわらず、長井は無視して、河野の腰巾着のようにふるまっている。

しばらくすると、長井は種田のことは戦力として期待しないようになった。それよりも、大学院生のふたりの方がよほど頼りになる。プロジェクトの二年目からは、長井と大学院生の武田だけで実験を進めることにした。種田は、あまり研究に熱心ではなく、大学にもあまり顔を出さなくなった。

超伝導マグネットを使った実験は、期待以上の成果を出した。やはり、永久磁石の磁場では弱すぎる。磁場を系統的に変化させることで、いままでは見えなかった傾向がはっきりとデータに現れていた。

さらに、半年ほど実験をしてみると、いままでは不明であった磁場効果も系統的に見えるようになってきた。

長井は、白井に感謝していた。白井のおかげで、この実験が可能となったのである。長井は、その成果を学会に発表することにした。その準備を院生の武田としていると、河野がやってきた。

「長井君、今回の学会発表は種田にやらして欲しい。どうだろう」  
種田の貢献はほとんどないに等しい。長井は、断ろうと思ったが、白井からのたつての依頼ということで、しぶしぶ承諾した。

ポスドクは身分が不安定である。これは、長井が身をもって体験している。だから、できるだけ成果を上げて、パーマネントの職を手に入れたい。白井としても、自分の弟子にできるだけ便宜を図ってやりたいというのが本音のようだ。白井には、散々お世話になっている。恩返しも必要であろう。

学会発表に向けて、研究室は急に忙しくなった。いざ、発表となると、気づかなかった足りない部分が見えてくる。その空白を埋めるように、院生の武田も夜遅くまで実験室に残って研究に励んだ。

そんな時でも、種田はさぼってばかりいた。ただし、種田がいてもじゃまになるだけなので、長井たちには、その方がありがたかった。下手に実験の手伝いをさせて、すべてをパーにされたのではかなわない。

発表用の図面も、すべて、長井と武田が用意した。学会発表の時は、研究内容を簡単に紹介する概要を事前に提出しなければならない。これも、長井たちが用意した。河野と白井からは、自分たちの名前も共同研究者に入れて欲しいと依頼された。長井は、概要のトップに武田の名前を入れたかったが、種田の発表なので、仕方なく種田をトップにした。

学会での発表は大きな反響を呼んだ。種田の発表はうまくなかったが、長井らが準備したパワーポイントの図面と、何よりも内容がすばらしかった。

気をよくした長井は、論文の執筆にかかった。この成果ならば、かなり有名なジャーナルに載るであろう。長井は、英語で論文を書き始めた。種田にも手伝うように頼んだが、英語は苦手なので、いやだと断られた。長井は、またしても、種田が本当に東都大学の出身者なのかを疑った。

ほぼ論文を書き上げたころ、白井から電話がかかってきた。白井は上機嫌で、長井たちの成果を褒めてくれた。

「長井先生、わたしが期待したとおりの活躍をしていただき、ありがとうご

ざいます。来年の予算は大幅に増額しますよ」と約束してくれた。

白井は、五〇〇〇万円の予算を初年度はつけてくれた。長井は、そのうち三〇〇〇万円ほど使うことができた。二年目も同じ額の予算がついたが、河野が大部分を使ってしまっていて、調整に少し苦労していたのだ。増額してもらえば、その分は自分の実験に使える。長井は、わくわくしながら、今後の実験計画を練っていた。今回の研究は自分のライフワークになるかもしれない。白井に感謝した。

「わたしもプロジェクトの責任者という立場なので、先生の論文を少し見させていただきたいのですが、いかがでしょうか」

「もちろん、喜んでお願いします。先生がお気づきの点を指摘していただければ幸いです」

長井は、快く承諾した。論文は、第三者の目を通した方が良くなる場合が多い。書いている本人では、気づかないことが多いからだ。白井ほどの人物であれば、適切な指導をしてくれるに違いない。

白井は

「そうですか。それでは、私の方で、しばらく論文の原稿を預からさせていただきます。どこまでお役に立てるか分かりませんが、じっくり読ませていただきます」

長井は、論文原稿と図面をCDにコピーして、ハードコピーと一緒に白井に送った。

白井は、自分では内容が分からないので、この分野にくわしい何人かに論文を読んでもらった。

すると、全員が

「この内容は素晴らしい」

と太鼓判を押してくれた。

これで、自分の成果がもうひとつ増えた。白井は満足であった。特に修正することもないだろう。そう判断すると、添削なしで、長井に論文を送り返すことにした。

すると、河野から連絡が入った。

「白井先生、その論文の処置は、わたしに任せてもらえませんか」

白井に依存はなかった。自分には口を出すことなどない。

「長井さんとよく相談してくれ」

論文の著者には、白井の名前も入っている。今回は五人の連名で投稿する。それでいいだろう。

その後、長井から、原稿を戻して欲しいという依頼が何度か来たが、河野からの依頼で、白井はもう少し待つて欲しいと伝えた。

長井は困ってしまった。あまり、論文を寝かせておくのは得策ではない。特に、競争が激しい分野ではライバルに先を越されるおそれもある。数日の差で、プライオリティを失ったという話も少なくない。

結局、白井のチェックは受けないまま、論文誌に投稿することにした。投稿先は、この分野では世界的に有名な応用物理関係のジャーナルを選んだ。

今回の論文はオリジナリティが高いので、問題なく掲載の決定が下されるだろう。そう長井は安心して、審査結果を待っていた。すると、一週間ほどで結果が届いた。あまりにも早い対応なので、長井は喜んだが、意外にも掲載拒否の判断が下されていた。そして、拒否の理由を読んで驚いた。

「同様の内容の論文がすでに本誌に投稿され、掲載が決まっている」

というのである。いったい、誰に先を越されたのだろうか。長井は悔しい思いをした。同じような発想で、実験をしている人間が世界のどこかに居ただ。いくら忙しいとはいえ、白井に一ヶ月も放って置かれたのが手遅れになったのかもしれない。

長井がこの話をする、武田は地団太を踏んでくやしがつた。長井は、これで終わったわけではない。頑張つて、もっと認められる結果を出していこうと励ました。

ある朝、武田が論文のコピーを持って、長井の部屋にやってきた。相当あわてたようである。

「先生、この論文を読みましたか？」

長井は、自分たちを出し抜いたグループの論文に違いはないと思った。どこのグループだろう。オリジナリティが高いから、きっと、アメリカかドイツのグループに違いはない。

ところが、武田から渡された論文を見て、長井は愕然とした。そこには、種田、河野、白井の連名で、長井たちが用意した論文が掲載されていたのである。

「なんだ、これは！」

長井は、思わず気色ばんだ。武田も、怒り心頭である。図面や文章、すべて、長井と武田が準備したものと全く一緒である。著者が変わっているだけである。こんなことが許されていていいわけがない。長井は論文を抱えると、河野の部屋に向かった。

「先生、これはいったいどういうことなんですか」

河野は、軽蔑したような視線を長井に投げかけ

「長井君。いったいどうしたんだ。そんな大声を出して。もっと、落ち着きたまえ」

「この論文です。これは、わたしが書いた論文です。なぜ、それが先生たちの名前で投稿されているんですか」

「ああ、それね。それは、種田君が書いたのを見てくれといって持ってきた論文だよ」

「何を言っているんです。これは、私が白井先生にお渡しした論文です。図面だって、全部わたしと大学院生で準備したものではないですか」

「君はなんと失礼なことを言っているんだ。それは、白井先生が君たちの論文を盗んだと言ってるようなもんだぞ」

「盗んだようなではなく、盗んだんです」

「どこに、そんな証拠がある。証拠もなしに、白井先生を糾弾するとは、名誉毀損だぞ」

この時、長井は悟った。河野もグルなのだ。白井が後ろで種田と河野をあやつり、長井の成果を横取りしたのだ。

「わたしは、許しません」

そう宣言すると、長井は河野の部屋を後にした。

## 文化省

白井が、そろそろ帰宅しようと書類の整理をしていると、文化省から電話がかかってきた。高等教育局長の志村であった。

「白井先生、大変なことになりました」

「志村局長、どうしました。そんなにあわてて」

「先生は、北東大学の長井という人間をご存知ですか」

「北東大学の長井ですか」

白井は、少し考えてから、いま自分が責任者をつとめているプロジェクトに参加している助教授のことを思い出した。

「ええ、私の研究プロジェクトのメンバーですが、どうかしましたか」

「それが、本日、文化省に現れまして、白井先生が自分の研究成果を盗んだと訴えたのです」

「はあ？」

白井にはまったく心当たりのないことであった。

「それは、何かのまちがいではないですか」

「いえ、本当です。最初は、すぐに追いつ返そうかと思ったのですが、話の内容が具体的過ぎまして。一応、先生のお耳に入れておいた方がよいかと思い電話した次第です」

白井は、さっそく河野に連絡した。そして、驚いた。河野は、勝手に、長井と武田のふたりを著者からはずし、論文を投稿していたのだ。しかも、すでに掲載されているという。

「河野君。こんなことを勝手にされては困る。これは、長井君の研究だろう」とすると、河野は

「白井先生、もともと長井をこのプロジェクトに巻き込んだのは、あいつに煮え湯をのませたかったからです。これは、いいチャンスですよ」という。

白井は、東郷の言葉を思い出した。

「いいか、他人から成果を盗む際には気をつける。共著というかたちにしていれば、あとからクレームがついても言い訳ができる。完全に盗むのは、相手にばれない時だけだ」

「しかし、どうするというのだ。長井はわざわざ文化省まで行って、クレームをつけたんだぞ」

「それを逆に利用するのです。状況証拠はこちらに有利です。なにしろ、学会発表は種田がやっていますから」

確かにそのとおりではある。

しかし、研究プロジェクトははじまったばかりだ。長井には、まだまだ研究成果を出してもらわなければならない。

昔ならば、いくら金を使っても誰からも成果を求められなかった。ところ

が、最近は、役所がやたらとやかましい。税金を使うのであるから、それに見合った成果が欲しいというのだ。それに、説明責任もある。

白井から言わせれば、税金を湯水のごとく使っているのは誰だと文句のひとつも言いたいが、いまのご時世では、やはり少しは成果が出ているというそぶりを見せないといけない。

その金の卵をここで失ってしまうのだ。河野のようなバカに成果など期待できない。長井を葬りさるにしても、もう少し泳がせておきたかった。それが、白井の本音である。

しかし、こうなったからには、この事態を収拾する必要がある。

白井は不本意ではあったが、河野の作戦にのることにした。そして、文化省の高等教育局長の志村に電話をかけた。

## アカデミックハザード 加治の物語 連載 8

放逐

つぎの日、長井が大学に行くと、学科主任の吉川教授が部屋の前で待っていた。

「長井先生、いったい何をしでかしたんだ。学長がかんかんに怒っている。いますぐ、部屋に来るようにとということだ」

長井は、いったいどうしたのだろうと、いぶかしく思いながら、学長室に向かった。

ドアを開けるなり、学長の叱声が届いた。

「長井君、君はいったいなんて事をしでかしてくれたんだ」

「学長、いったいどうしたんですか」

「君は、きのう、わたしに無断で文化省をたずねて、白井先生の悪口を言ったそうだね」

「いえ、悪口ではなくて、不正を告発してきたんです。文化省のひとも分かったと言ってくれました」

「何を言っている。今朝、文化省の高等教育局長から、わたしあてに電話があって、昨日、あなたの大学のきちがいがやって来て、ありもしないデタラメで、白井先生を攻撃したというお怒りの電話がかかってきた」

「そんなはずはないです」

「来年の予算も削ると脅されたよ。そんなことをされたら、地方大学はひとたまりもない。君は、本学をつぶす気か」

長井には、いったいどうなっているのか、訳が分からなかった。

「先ほど、白井先生にも電話しておいた。文化省から、すぐに白井先生に連絡が入ったらしい。白井先生もかんかんだったよ」

長井は驚いた。文化省は、長井にきちんと調査すると言ってくれていたからだ。

「君は、種田君が出した成果を自分のものと嘘をついたうえ、彼が君の成果を横取りしたと言っているそうじゃないか」

「学長、ちょっと待ってください。わたしの成果を盗ったのは種田のほうです」

「東都大学の白井先生が、そんな嘘をつくわけがないじゃないか。先生は、うちの大学に五〇〇〇万円もの予算を回してくださったんだ。恩をあだで返すとは、まさに君のことだ」

とりつく島がないとはまさにこのことだ。学長は、はなっから長井のことを疑ってかかっている。

「君には、しばらく謹慎してもらおう。自宅で待機しているように」

長井は、抗弁しようとしたが、この場では何を言っても信じてもらえない。部屋に戻ると、吉川が待っていた。

事情を説明すると、吉川は困ったような顔をした。

「それは、まずかったな。文化省の役人は白井の味方だ。ただではすまされないだろう」

長井は何を言っているのだろうと思った。不正を働いたのは白井の方である。

「長井先生、あなたは若すぎる。人生経験が足りないのだからしょうがないが、役人の言葉を真に受けるのはバカ正直すぎる」

しかし、長井に何ができただろうか。

しばらくして吉川から電話がかかってきた。教授会議で、長井の懲戒免職が決まったというのである。長井は、そんなばかなと思った。

吉川は

「力になれずに申し訳ない」

と頭を下げた。

教授会では、河野が中心になって、長井のことを攻撃したらしい。文化省を怒らせたということが長井には不利な材料となったようだ。

河野は、自分たちが盗んだ論文のコピーを教授たちに回覧し、このように、すでに自分達は論文として正式に発表していると、まず主張した。そして、それにもかかわらず、長井は、あたかも自分の成果を横取りされたと言いふらしている。これでは、文化省が怒るのも当たり前である。そういつて、教授たちを説き伏せた。すでに論文になっているという事実は、重大である。

さらに、河野は、学会発表の予稿も回覧して見せた。そこには、筆頭著者として種田の名前が載っている。河野は、学会発表も種田が中心になって行った。実験を少し手伝ってくれた長井や、院生の武田を連名で載せてやったのは、こちらの温情である。それを逆手にとって、ずうずうしくとも、論文にも名前を載せろと要求してきた。

論文の内容は、河野の指導のもと、ポスドクの種田がひとりでやったものなので、長井たちの名前を載せないと通知した。すると、長井が、気が狂ったように、文化省まで出かけて、恩人の悪口を言っている。こんな人間は、大学人としてふさわしくない。即刻、辞めさせるべきである。こう訴えたのである。長井に同情的な教授達も、論文や予稿を証拠として持ち出されたのでは、強固に反対することはできなくなった。

結局、長井は研究者としての道をあきらめざるを得なかった。たとえ職を得たとしても、白井たちの手がまわるであろう。一度、権力者ににらまれたら、研究の世界では生きていけないのである。

その後、長井は、私塾を開くことにした。最初は、細々ではあったが、塾はしだいに繁盛するようになった。ところが、ここにも白井の魔の手が及んだ。

河野たちが、塾に子供を通わせている親たちに、長井は東都大学の先生に反旗を翻した変わり者だと告げ口したのである。子供を持つ親にとって、天下の東都大学という名前は特別な意味を持っている。その先生にはむかった人間に教わったのでは、子供たちの将来があやうい。あっという間に塾はつぶれてしまった。

白井は、学長の東郷に長井の話が聞かされて、ようやく思い出した。しかし、あれは、自分から東郷の教えに逆らったわけではない。河野の思惑にのっただけである。

しかし、東郷は、それを自分への裏切りと勘違いしているようだ。白井は、自分のまわりで、なにか歯車が狂いはじめているのを感じた。

## 取材

科学日本という雑誌社の出口彰男という記者から、加治のもとに取材をしたいという連絡が入った。わざわざアメリカまでやってくるというのだ。雑誌の取材など受けたことのない加治は戸惑ったが、板倉の紹介という。それならば、断ることはできない。加治は、取材を受けることにした。

出口は、可能ならば、コーンウェル教授からも取材を受けたいと聞いてきた。デイビッドに打診すると、自分で良ければ、いくらでも取材に応じると言ってくれた。今回の取材が、白井という悪を糾弾するためのものであるこ

とをデイビッドは知っているようだ。吉野から説明があったのだろう。

加治は、出口がラフな恰好で現れたので驚いた。カメラも抱えている。板倉と同級生というから、かなりの年齢なはずであるが、三〇歳代でも通りそうな風体だ。

「あなたが、加治さんですか。お会いできて嬉しいです」

そう言うと、出口は加治の手を強く握った。

出口は、前から東都大学の白井一派が行ってきた非道の数々を追ってきているという。

「疑わしい点はあるのですが、なかなか、これといった証拠がつかめません。なにしろ、向こうは役人までがグルになっていますからね。証拠隠滅などお手のものでしょう」

そう出口はくやしそうに言った。

そして、出口は、白井は犯罪にも加担している可能性があるというような驚くことまで加治に話した。

「かつて、東都大学には山下教授という立派な先生が居られました。白井は、その先生の失脚を画策したと思われます」

その時、山下先生は、暴漢に刺殺されたという。実は、この暴拳にも白井達が絡んでいる可能性がある、出口はいう。加治は、その話には大いに驚かされた。そして、白井のような人間を野放しにはできないと痛感した。

加治は、取材ははじめてであったが、出口の気さくさにつられて、次第に硬さがとれ、自分の経験したことを正直に話していった。出口は、あいづちを入れたり、それはひどいと憤慨したりしながら、加治の本音をうまく引き出していった。

出口は、コードウェル教授とも会った。今回の成果を学問的な側面からもつつこんでみたいということらしい。残念ながら、ナンシーは出張で研究所を留守にしていた。

## 記事

そして、それから一月ほどして、「科学日本」に衝撃的な記事が載せられた。

それは

「まぼろしの結晶はぬすまれていた」

というタイトルで書かれた一 ページにもわたる特集であった。この事件の全貌をほぼ正確に伝えていた。

そこでは、吉野のコメントの他、デイビッド・コーンウェル教授と加治への取材、そして、かつて白井に結晶をだましとられた湯川教授のコメントが載っており、記事では、あのまぼろしの結晶は、加治と湯川が合成したもので、白井たちによって盗まれたものだと書かれていた。

白井の反論も載せられていたが、その根拠は薄いものであった。出口の「それでは、なぜ正確な作製方法が論文には書かれていなかったのか？」という質問に対し、白井は

「この技術は世界的にも重要なものであり、日本の財産であると思った。作製方法をすべて明らかにしてしまうと、海外の研究機関にまねをされ、日本のオリジナリティが失われると危惧した」

と答えている。しかし、出口は、さらに

「それならば、なぜ、あの結晶は、最初の一個だけで終わってしまったのか。つくり方が分かっているのであれば、いくらでもつくるはずです」

と聞いている。

これに対し、白井は

「実は、結晶をたくさんつくっていたのだが、海外の研究機関に渡すのが惜しくなったので、手元に隠しておいた」

と弁解にもならないようなコメントに終始している。そして、記事では、白井らを糾弾しようとした湯川教授に、補助金不正使用疑惑という罣がかけられたことも書かれている。

吉野は、記事の載った雑誌を板倉に見せた。加治にも、出口が航空便で送っているはずである。

記事を読み終った板倉は、さすがに出口だと評した。出口は板倉の大学時代の同級生で、理系の大学を出ながらジャーナリストをめざした異色のひとらしい。昔から洞察力がすどく、科学記事でも本質にせまるものが多いと評判がたっていた。

「これで白井も終わりだな。いままでみたいに、でかい顔はしにくいだろう」板倉は、こう言ったが、吉野は、本当にこのままで終わるのだろうかと少し不安になった。

噂によると、最近の白井はものすごく不機嫌で、いろいろなところに電話をかけまくっているらしい。日本学会賞への影響を心配しているというのだ。

しかし事件は、これだけで終わらなかった。それから、しばらくして読切新聞につきのような記事が載った。

「東都大学、科学日本を提訴

東都大学は、科学日本の事実無根の記事によって大学の名誉を大きく傷つけられたとして、記事の取り下げと一千万円の損害賠償を求めて科学日本を発行して科学日本振興社と記事を執筆した出口清記者を提訴した」

吉野は、この記事を見て驚いた。まさか、大学が白井のことをかばうとは予想していなかったのだ。

そして、東郷学長のコメントも書かれていた。

「白井教授は、東都大学の宝であり、今年度の日本学会賞の受賞もすでに決まっている。その受賞理由をみれば、白井教授の業績がいかに素晴らしいかが分かるであろう。今回の成果は、そのひとつに過ぎず、この研究だけに彼が情熱を注いできたわけではない」

としている。

また、記事には

「このとんでもない特集を書いた出口記者は、白井教授に私恨をいだけるI助教授の大学の同級生であり、その私恨ははらすために仕組まれた罠の可能性も大きい」

と書かれていた。もちろん、I助教授とは板倉のことである。白井たちを少しなめすぎているようだ。出口が板倉の同級生であることをつかんで、それを逆手に取ってきたのだ。

さらに、驚いたのは、文化省の対応であった。文化省のコメントは

「社会的地位のある優秀な大学教授を貶める記事を掲載した科学日本に対して遺憾の意を表する」

とある。どこまでも腐った組織だ。

板倉は、負け犬の遠吠えにまともにつきあえないと無視する構えだが、文化省までが乗り出してきたとすると、いくら正論をとらえても、世間は白井を味方する可能性が高い。

科学日本振興社は

「訴状のくわしい内容は見ていないので、コメントできないが、出口は優秀

な記者であり、その記事内容は正確と信じている」と答えている。板倉も裁判になったら、こっちに勝ち目はあると言っているが、どうだろうか。

しかし、それからまもなく、驚く事態が起こった。東都大学が訴えを取り下げたのだ。これを聞いて、吉野は、一本とられたと思った。裁判になれば、いろいろと騒がれる。白井たちに不利な状況証拠がそろっている中で、裁判沙汰になるのは問題が多かろう。それでも、あえて提訴した。すると、新聞は大きく取り上げてくれる。そして、ここがうまいところなのだが、何も分からない世間の多くのひとは、提訴された方が悪いとってしまう。つまり、科学日本が捏造記事を書いて、東都大学の名誉を傷つけたとってしまう。文化省も味方につけたのであるから、お上に弱い庶民は、ますますそういう印象を持つだろう。そして、そういう印象を与えたところで、さっさと提訴を取り下げしてしまう。黙っていれば新聞にも書かれぬし、裁判も行われぬ。自分たちの方が正しいという印象だけを残して撤退してしまう。うまいやり方である。吉野は、白井たちをあなどってはいけないと気をひきしめた。

出口と板倉は、この提訴を取り下げたことをもって、東都大学や文化省を攻撃すべきと主張したが、科学日本振興社は、これ以上さわぎを大きくしたくないという理由で静観することに決めたいらしい。役所の機嫌を損ねたら、それこそ、どんな無理難題を押し付けてくるか分からないからだ。

## 受賞式

マスコミからの攻撃を受けたにも関わらず、白井は日本学会賞をすんなり受賞した。その様子はテレビで大々的に放映された。白井は、その巨体をモーニングで包み、うやうやしく賞状を受け取り、巨大な記念のメダルを首にかけてもらった。

その翌々日、白井の日本学会賞受賞祝いの式典は、東都大学主導のもとに行われた。この受賞は、新聞でも快挙として大きく取り上げられたため、日本中の大学から東郷や白井の弟子たちや、追従者がかけつけた。文化省や経済省からも重鎮が訪れ、会場は、白井たちの権力をこれでもかと内外に印象づける会となった。

板倉も吉野も式典に参加した。吉野は、白井の受賞を祝う気はさらさらな

かったが、「白井の仲間がどんな連中かを知るいいチャンスだ」という板倉の誘いにのったのだ。

式典では、東郷学長をはじめとして齒の浮くような祝いのあいさつがこれでもか、これでもかと続いた。一通り、祝辞が終わったあとで、いよいよ真打登場となった。受賞者の白井の記念講演が行われるのである。

会場の外には大きく立て看板が立てられている。

そこには

「日本学会賞受賞記念講演会、東都大学工学部長 白井大介先生 研究にささげた我が半生」

となっている。

いよいよ白井の講演が始まろうとするとき、外で騒ぎが起こった。

白井はいったい何だという顔で外の様子を伺っている。板倉と吉野は外に出てみた。

どうやら、たて看板に赤いペンキを投げつけた男がいるようだ。その男は、大きな声で訴えている。

「みなさん聞いてください。白井は日本学会賞などを受賞するに値する人間ではありません。あいつに研究成果を盗まれて泣いている研究者は、たくさんいます。今回の受賞対象の研究成果のひとつもわたしのもので、だまし盗られたものです」

板倉は、吉野に

「彼は、かつて助教授だったころに白井にだまされて研究成果を横取りされたひとだ」

と、そっとつぶやいた。みると、顔は不精ひげで覆われ、かなりやつれている。男は、しばらく、わめいていたが、大学の警備員に両腕を抱えられて、連行されていった。吉野は、板倉に

「彼は大丈夫ですか？」

と聞いたが、板倉は、

「心配する必要はないだろう」

と答えた。

「大学がへたに大事にしたら、白井の悪事が表さたになるおそれがある。警察には引き渡さずに、厳重注意だけで終わるだろう」

と答えた。

板倉と吉野が会場に戻ると、何事もなかったように白井の講演が始まっていた。

「本日は、お忙しい中、私のために来ていただき、まことにありがとうございます。」

私のような浅学非才のものが、日本学会賞などという栄えある賞をいただいたことに、まことに恐縮しております。」

板倉は

「浅学非才というのは、あたっているな」

と感想を言った。

白井は、今回の受賞は、自分ひとりのものではなく、いままで支えてくれた先輩や同僚、そして後輩、すべてのひとに対して与えられたものだともまず断った。吉野は、ふと、その中のひとりには、あのたて看板に赤ペンキを投げつけた男も含まれているのであろうかと思った。

白井の講演は、科学講演というよりは、選挙演説に近かった。研究内容にいたっては、同じ研究者として、聞くに耐えないものであった。本当にオリジナリティの高い研究を行ったひとには、必ず感激的な事象がともなう。つまり、ブレイクスルーにいたる秘話が存在するものである。人は、それに触れて感動するのであるが、なにしろ白井の場合は、すべて他人の研究成果を盗んだものである。もとより、そんな感動話などできないのだ。また、白井は、本来ならば、受賞のもっとも大きなウェイトを占めているはずの加治の結晶については、ひとことも話さなかった。

講演後、板倉から感想を求められた吉野はこう言った。

「日本人として、このような低レベルの人間に賞を送るこの国の体制がつくづくいやになりました」

板倉は

「まともな人間ならそう思うだろう。ところが、ここに来ている東都大学の人間や、経済省、文化省の役人はそう思っていない。賞を金で買えること自体が、力のある証拠と評価している。日本はいびつな国になってしまった。つくづくそう思うよ」

それから、吉野と板倉は、白井の受賞を祝う懇親会場へと向かった。もちろん、祝う気などないが、白井一派を見ておくのも一興だと思ったのだ。

板倉は

「われわれの闘っている相手をそばで観察してやれ」

と言っている。

会場は、東都大学のなかにある謹上会館と呼ばれる会場であった。すべての壁をとりはらい、会館全体が懇親会場となっている。

驚いたことに、懇親会場の受付に十名ほどの人間がいたが、その中には佐々木祥子さんも座っている。

吉野は

「佐々木さん、ご苦労様です」

と挨拶した。すると、佐々木さんはちょっと驚いたような顔をしたが

「ありがとうございます」

と頭を下げ

「板倉先生も出席いただけるのですか？」

と板倉に声をかけた。

「もちろんです。大学にとって名誉なことですから、ぜひお祝いしたいと思っております」

と心にもないことを言っている。

しかし、吉野にとって、佐々木さんが受付にいるとは驚きだった。

会場では、すでに乾杯が終わり、ワイン片手にあちこちで歓談が始まっていた。白井は、会場の中央に据えられたテーブル席に座っていて、その横には、白井とは対照的にかりがりに痩せた女性が座っていた。

板倉は吉野に

「あれが白井の奥さん、東郷の親族だ」

と教えてくれた。

出席者は、列をつくって白井のもとに挨拶に行っている。。板倉は

「あそこに並んでいるのが、それぞれ経済省と文化省の天下り予備軍さ。新聞に白井を擁護するコメントを出したのが、あの赤いネクタイのデブで、文化省の大学課長。東都大学の事務局長の座を狙っているらしい」

聡は、板倉の収集能力に舌を巻いていた。会場に来ている多くの出席者が何者で、どのような利権でつながっているかをいちいち説明してくれたからだ。

それにしても、懇親会場は煙でもうもうとしている。ほとんどの人間がタバ

コを吸っていた。吉野は、気分が悪くなった。

板倉は、吉野を誘って、堂々と白井のもとに挨拶に行った。白井はふたりを見てぎょっとしたが、鷹揚に

「わざわざ来ていただいてありがとう」

と挨拶した。

そして、奥さんに紹介してくれた。

「主人がいつもお世話になっております。今後もよろしくお願いします」

とていねいに頭を下げてくれた。

すると、板倉はしれっとした顔で

「いや、白井先生のご講演には感激いたしました。さすが、日本学会賞に値する名講演でした」

と白井を持ち上げた。

「それから、先ほど、先生に研究成果を横取りされたと会場に怒鳴り込んできた不届きものがいます。同じようなことを訴えるやからが増えていきますので、どうか身边にはお気をつけて下さい」

と結んだ。白井は、お祝いの席で何を言うのかと、むっとしたが、板倉はそれには構わず、吉野を連れて会場を後にした。

## アカデミックハザード 加治の物語 連載 9

福や

板倉と吉野は、挨拶を終えるとすぐに会場を出た。あんな空気の悪いところには長居はできない。

板倉は、吉野に

「聡、ちょっと耳に入れておきたいことがある。福やまでつきあってくれないか」

と声をかけてきた。「福や」は大学のそばにある板倉のいきつけの小料理屋で、こじんまりとした雰囲気の良い店である。板倉は、何度か吉野をさそって、この店に来ていた。吟醸酒のうまい店である。

福やは、いつものように、客は吉野と板倉のふたりだけであった。

「板倉先生、話とは何ですか」

「聡は、白井一派にとっては脅威になってしまった。つまり、どんな些細なことでも利用して排除しようとしてくる」

「それは、覚悟しています」

「さらに言えば、俺よりも脅威に感じているはずだ」

「板倉先生よりも脅威とは思えませんが」

「いや、そうなはずだ。俺は騒ぎ立てても、所詮は力のない助教授だ。これから、教授に昇進する目はない。だけど、聡にはオーランド大学という切り札がある。今回の加治の件だって、聡がいたからこそ、加治は白井たちの魔の手から逃れることができた。俺を排除しても意味がないが、聡はまさに獅子身中の虫というわけさ」

「なるほど、アメリカの大学までは手が出せませんからね」

「そこで、今日の話になる。聡にはすこしショックかもしれないが冷静に聞いてほしい」

「何でしょうか」

「実は、噂でしかないんで、俺も確証を得ているわけではない。だから、いままでは黙っていた。しかし、これだけ状況が切迫してくると、聡にも知っておいてもらった方がよいと判断し。」

「何かおおげさですね」

「お前のお気に入りの佐々木さん。実は、白井の隠し子という噂がある」  
聡は、一瞬、板倉が何を言っているのか理解できなかった。

「板倉先生、それは悪い冗談でしょう」

「残念ながら、冗談ではない」

「でも、そんなばかな」

吉野は、自分の立っている土台がくずれるような気がした。吉野は、アメリカ時代に失恋していた。相手は同じ学校に通っていた山下えりという女の子だ。えりは、父親の仕事の関係で日本に帰国した。ふたりは手紙を交換し、夏休みに会う約束をしていた。それが、突然、連絡が途絶えたのだ。吉野は強いショックを受けたが、えりの小消息はつかめなかった。

それ以来、吉野は女性とのつきあいに臆病になっていた。しかし、日本に帰ってきて佐々木さんに出会った。そのやさしさにふれ、このひとならばと思っていたのだ。

「実は、俺も最初は信じられなかった。しかし、あるところから、佐々木さんの養育費を白井が払っていたということが分かった」

「養育費ですか」

「あまり、他人の過去を詮索したくはなかったが、ある事情でいたし方なかった。その中で、佐々木さんが片親しかいないのに、かなり不自由なく育ったことを知った。そして、かなりの金が白井から払われていることが分かったのさ」

「それでは、なぜ白井ではなく、佐々木という苗字なのですか」

「それは俺にも分からない。そして、もっと衝撃がある」

「それは何ですか」

「佐々木さんは、白井と柳井さんとの間に生まれた子だという噂だ」

「なんですって」

聡は、あの柳井さんの上品な顔立ちを思い浮かべた。とてもデブガエルの白井とつりあいがとれるとは思えない。

「柳井さんは、白井に忠誠をつくして、いままで独身を通してきたという噂だ。そして白井の有能な秘書として、現在でもつくしている」

吉野には、とても信じられない話である。

「実は、佐々木さんの育ての親は柳井さんなんだ。それも確認済みだ。いまでもふたりは同じマンションに住んでいる」

「それでも苗字が違うじゃないですか」

「俺も、そのあたりの事情までは聞かされていない。ただし、柳井さんと違う名前になったのは、佐々木さんが柳井さんの子供ということを隠すためという噂がある。いずれ、白井が柳井さんに毎月二十万円以上の金を払っていたことは確かなんだ」

板倉は、佐々木さんは白井の意をうけて、行動している可能性もある。だから、気をつけるようにと吉野を諭した。吉野は頭が混乱した。しかし、いくら考えても、あのやさしいまなざしの佐々木さんが白井の隠し子だなどとは思えなかった。

長井助教授

重苦しい沈黙が流れている時に、新たな来客があった。「福や」にしては珍しいと思っていると、入ってきたのは、事務の長谷川とたて看板に赤ペンキを投げつけた男である。

「板倉先生、やはりここでしたか。長井さんです。ご存知ですよね。」

「いや、これはどういう風の吹きまわしだい。長谷川さんは長井さんを知っているの？」

どうやら、男の名前は長井というらしい。

「ええ、直接の面識はないですが、白井のわなにはめられた気の毒な方とは知っていました。」

吉野は驚いた。長谷川が白井のことを呼び捨てにしているからだ。

「長谷川も白井の被害をうけたひとりなのだろうか？」

板倉は聞いた。

「それが、どうして、ふたりそろって、ここに来る羽目になったんだい」

「実は、私が本部棟にいたら、長井さんが警備員に連れて来られたんです。最初は、誰か分からなかったんですが、警備員とのやりとりを聞いているうちに、もしかしたら長井さんではないかと思ったんです。白井のたて看板に赤いペンキを投げつけたと聞いて長井さんということを確認しました」

吉野は、どうして、長谷川が長井を知っているのだろうと不思議に思った。

「警察を呼ぶのかと思って心配していたのですが、東郷の支持で、どうやら長井さんは解放されたようです。でも様子が変わったので、少し見守ってい

たんです」

板倉が

「自殺でもしそうな気がしたんだな」

と無遠慮なことを言っている。

「ええ、そんな感じさえしました。そこで、思い切って私から長井さんに声をかけてみたんです。最初は、不信そうにしていたのですが、わたしの話を聞いて納得したようです。それで、いろいろお話を伺うことができたんです」

「長井さん、奥さんに逃げられたんだろう」

長井は驚いたように板倉を見た。

「板倉先生は、どうしてそのことをご存知なんですか？」

「白井が、長井さんの塾をつぶそうと画策していると聞いたんで、少し心配して、知り合いに頼んで様子を聞いてみていたんだ」

長井はこう切り出した。

「私は、塾の講師で満足していたんです。もちろん大学や研究に未練がなかったわけではありません。でも、白井ににらまれたら復帰は無理です。それに、生徒も私になついてくれたうえ、いい塾だという評判がたって、結構繁盛していたんです。私は、一生を塾の講師で過ごすつもりでいました」

「そこに現れたのが、白井の刺客というわけだ」

「ええ、彼らは、塾に通っている生徒の親たちに私の悪口を吹き込んだんです。生徒がどんどん辞めていくので、おかしいなとは思っていたのですが、最初はまったく気づきませんでした。ところが、ある時、大学の友人から、白井の子飼いが私が人格破綻者だと、生徒たちの親御さんにいいふらしていると聞いて驚いたんです。その時には、もう手遅れでした。塾というのは、一種の客商売です。一度変な噂が流れたら、無理してまで自分の子供を通わせる親はいません。あつというまに塾はつぶれてしまいました」

「本当にひどいことをするな」

「聞くところによると、白井が日本学会賞を受賞するにあたって、わたしが邪魔をするんじゃないかと邪推したようです。結構、わたしの塾は評判になっていましたから、心配したんでしょう」

「子供たちに良からぬことを吹きこむとでも思ったのかな」

「女房も最初は、はげましてくれていましたが、収入がなくなるとどうしようもありません。わたしは、土木作業員としてがんばっていましたが、生活

が苦しく、ついに、女房は子供を連れて実家に帰ってしまいました。彼女の実家は、田舎では名家です。両親は、娘が将来、教授夫人になると喜んでいましたが、それがだめになってがっかりしていたようです。それで、前から実家に戻るようにせまっていたのです。女房も、苦しい生活に耐えられなくなったのでしょう」

吉野は、やつれた長井の様子をみて、いたたまれなくなった。優秀な研究者が、権力におぼれたばかりのために、その日暮らしを強いられ、家族までが離散してしまう。

「私は白井のおかげですべてを失いました。何も悪いこともしていないのに」

そういうと長井は嗚咽をもらした。

「今日が白井の受賞記念のパーティーだと気づいたら、思わず列車に乗ってしまいました。あとは、どうなってもいいと思い、ペンキを買ってきて、たて看板にぶっつけたのです。警察に連れて行かれてもいいと思っていました」

「ひどい話だ」

すると、長谷川は、こう切り出した。

「長井さんには、人生をあきらめるのは早いといいました。きっと、あなたの味方になってくれるふたりがいるはずだからと、ここにお連れしたのです」

吉野は意外に思った。味方になるふたりのひとは自分ということなのだろうか。長谷川は自分のことをよく思っていない。そう信じていたからだ。

板倉は

「それだけ期待しているなら応えるしかないな。聡、また、同じ手は使えないか」

「同じ手とはどういうことですか」

「加治と同じ手だよ。長井さんをオーランド大学に送ることはできないかな」

長谷川も応援した。

「私も同じことを考えていました。吉野さんの力添えで、長井さんを助けることはできませんか」

聡は、返答に窮した。加治の場合と違って、長井は、もう結構な歳である。大学に依頼するにしても、本人の業績が問題になる。簡単に請合えることで

はない。吉野はこう応えた

「分かりました。この場で約束することはできませんが、何とか努力をしてみます」

長井は、思わぬ展開に、驚いた様子で、われわれの会話を聞いていた。そして、聡に向かって

「吉野先生、よろしく申し上げます。私は、一度死んだ人間です。それでも、少しでも希望があるのならば、それにすがってみたいんです」

「分かりました。それでは、長井さんの業績や、主要論文のコピーがあったら、私まで送っていただけませんか。私の教授に聞いてみます。」

長井さんは、先ほどまでの死んだような顔から、いまは、わずかに見え出した希望に向かって歩き出そうという顔に変わっていた。

「よし、それじゃ、長井先生の前途に道が拓けることを祈ってみんなで乾杯しよう」

吉野は、板倉から聞いた佐々木さんはもしかしたら白井の隠し子かもしれないということが気になってしようがなかったが、長井の登場で、それどころではなくなった。

「福や」のおかみがとっておきの吟醸酒があると言って、奥から七福神の五合壺を持って現れた。長谷川と飲むのは、はじめてだったが、いやな気はしなかった。長井にとっては、地獄で出会った天使のようなものであろう。

それから、しばらくして長井のオーランド大学行きが決まった。長井は吉野が驚くほどの業績があった。しかも、長井の研究のことをよく知っている教授がオーランドにいて、ぜひにと推薦してくれたのだ。ただし、最初のスタートはポスドクであった。助教授までつとめた人間にどうかと思ったが、長井はよろこんで行かしてもらいたいとはりきっている。

一度、あきらめた研究の道がふたたび開かれたのだ。それだけでも、よしとすべきなのかもしれない。

## オーランド大学

加治の結晶作りは順調に進んでいた。ファンがつくったルツボのおかげで、結晶の質は飛躍的に向上した。このおかげで、この物質の物性解明が進み、

思わぬ応用の可能性も見えてきた。

加治は、次の課題として、この結晶の大型化に取り組んでいた。実用化するためには、いまのサイズよりも二倍の大きさは欲しい。そのためには、結晶成長のメカニズムをより詳細に解析する必要がある。

幸いなことに、この研究所には、統計力学やコンピュータシミュレーションの専門家が居る。加治は、これら専門家と一緒にあって、結晶成長のシミュレーションをするとともに、いかに欠陥をいれずに、大型化できるかということの研究していた。すでに、かなりの成果が得られている。

さらに、この結晶に第三元素を添加するという実験も順調に進んでいた。このテーマには、加治の指導のもと、シンとコブリシュカが取り組んでいた。すでにナンシーのグループはワールドサイエンス誌に論文を三報も報告していた。

そんなある日、加治はコードウェル教授から部屋に呼ばれた。加治は、何だろうと思った。研究に関するディスカッションは、頻繁に行っている。デイビッドは、加治を部屋に招き入れると

「マス、君のおかげで、この研究所の名声も挙がった。感謝しているよ」と言ってくれた。

実は、吉野が加治の博士号のことで心配しているというのだ。アメリカには論文博士という制度がない。つまり、ドクターの称号を得るためには、博士課程に進学しなければならない。日本と違って、履修すべき科目が多く、最初の二年は研究する時間もないほどである。

日本では、十分な研究業績があれば、それをもとに大学で博士号の審査を受けることができる。これを論文博士と呼んでおり、日本独自の制度だ。

東都大学には白井が居るので加治が論文博士となるのは難しいが、板倉が友人の北東大学の教授に相談したところ、喜んで加治の博士審査を引き受けてくれるというのだ。加治は、吉野や板倉の配慮に感謝した。

しかし、加治の業績は世界レベルである。博士号は取得しようと思えば、いつでも可能である。

「それよりも、いまの研究が一区切りつくまで、ここに留まっていたい」

加治は、正直な気持ちをデイビッドに伝えた。すると

「そうか、マスがそう言ってくれてほっとしている。いまマスが研究所から居なくなったのでは大きな痛手となる」

加治にとっては過分の評価だった。

それから、デイビッドは、長井という日本人研究者の話をした。加治と同じように、白井の被害にあった気の毒な研究者のひとりという。

加治も吉野からのメールで、長井の話は聞いていた。北東北大学の助教授時代に白井の罠にかかり、大学を辞めさせられたという。さらに、その後、開いた私塾にもじゃまが入り、すべてを失ったということだった。

ひどい話である。デイビッドは、その長井が、今度、博士研究員として、この研究所に来ることになったというのだ。

「実は、ギブソン教授がドクター・ナガイの研究のことを知っていて、高く評価しているんだ。とりあえずは、ポスドクだが、いずれは、助教授に採用される可能性もある」

そうデイビッドは言っている。ギブソン教授は、キムが所属しているチームのリーダーだ。電子材料の研究をしている。来週、長井がやってくるので、空港まで迎えに行きたくらいと言われた。

実は、加治は、最近、ヒュンダイの小型車を購入した。ドーミトリーの生活は快適だが、やはりアメリカで生活するには車がないと不便である。加治の月収は一〇〇〇ドルほどである。日本円で、一〇万円程度であるが、ドーミトリーと大学の実験室で暮らしている加治には十分であった。中古のヒュンダイは五〇〇ドルで買った。

加治は

「もちろん、迎えに行きます。この大学には、日本人が少ないので、ドクター・ナガイは大歓迎です」

そう言った。

その後、加治はデイビッドと研究の話をした。今の加治は、まさに泉から湧き出るように、いろいろなアイデアが生まれてくる。自分でも高揚感にひたっているのが実感できる。

デイビッドは、加治の英語の上達ぶりをしきりと感心している。加治も、いまではまわりの英語が何不自由なく聞き取れるようになっていた。

「ドクター・ナガイには家族が居る。ただし、最初は単身赴任のようだ。あいいにく、ゲストハウスは空いていないので、ホテルに一週間ほど滞在してもらおうが、その後は、ゲストハウスに入れるよう手配している」

とデイビッドは言った。

長井は、アメリカでの生活が落ち着いたら、家族を呼び、一緒に住む予定らしい。加治は、ふと佐々木さんのことを思い出した。自分も、いずれ、自分の家族を持てるのだろうか。その家に佐々木さんがいたら、どんなに幸せだろうか。

### 長井の到着

加治は、オーランド空港で、長井の到着を待っていた。思えば、ついこの間、キムがここに自分を迎えに来てくれたのだった。それが、今度は自分が長井を迎えにきている。

加治は初めて会うので、ボール紙に長井信吾様と書いたものを胸に掲げていた。そう言えば、キムも同じようなボードをぶらさげていた。こちらは、日本人どうしだから漢字ですむ。

到着ロビーのゲートを出てくる日本人を見て、加治は、すぐに長井と分かった。長井は、加治のところまで来ると、安心したように微笑んだ。

「加治君ですね。今日は、わざわざありがとうございます」

と礼を言った。加治は

「長井先生、お待ちしております。ようこそオーランドへ」

と言って、長井を駐車場まで案内した。

加治は、中古のヒュンダイの助手席に長井を座らせた。そして、ちょっと照れたようにこう言った。

「実は、ホンダが欲しかったんですが、ちょっと高すぎました」

アメリカでは、ホンダ車が人気で、中古でもなかなか安くない。キムは、ホンダを手に入れていた。

大学には二〇分ほどで着いた。加治は、構内にあるホテルに長井を案内した。アメリカの大学は、繁華街から離れた郊外にキャンパスがあることが多い。そのため、大手のホテルチェーンが大学構内にホテルを建設している。オーランド大学でも有名なシェラトンホテルが一〇〇部屋ほどのホテルを経営している。

シェラトンオーランドというのがホテルの名前だ。実は、ホテルのスタッフの八割近くが大学の生徒である。彼らは、実習を兼ねて、ホテルでアルバイトをしているのだ。

加治はこう言った。

「いまは、まだ大学のゲストハウスが空いていないので、長井先生には、大学のホテルの方に泊まさせていただきます。ちょっと費用はかさみますが、一週間ほどで、ゲストハウスが空きますので、それまでの辛抱です」

しかし、高いとは言っても、一泊四〇〇〇円程度である。長井にとっては、それほど痛い出費ではないようだ。

加治は、長井の長旅を労った。そういえば、ここまで来るのに、ずいぶん長旅をしたなと思ったものだ。

「長井先生、今日は、長旅でお疲れと思いますので、ゆっくりホテルで休んでください。明日の朝、僕が迎えに来ます。それから、研究所の方に案内します」

長井は、加治にていねいにお礼を言った。加治は、長井は自分よりも五歳くらい年上と踏んだ。とても清潔感あふれる紳士という印象だ。それが、白井の姦計にはまり、一生を棒に振るところだったのだ。

朝の八時半に加治は、ホテルまで長井を迎えに行った。長井はすでにホテルのロビーに下りていて、コーヒーの飲みながら新聞を読んでいた。スーツにネクタイを締めている。加治は、Tシャツにジーンズというラフな恰好である。

加治は、自分のはじめて大学の研究所に顔を出した時のことを思い出していた。そう言えばあの時は、自分も緊張して、長井と同じような恰好をしていた。もう、ずいぶん昔のような気がするが、あれは、ほんの二ヶ月前の話なのだ。

加治は、長井に研究所までは、ホテルから歩いて五分ぐらいの距離だと説明した。となりの長井は、興味深そうに、アメリカの大学の構内を見渡している。キャンパス内は、公園のようにきれいだ。瀟洒な建物も多い。

「歴史を感じる荘厳な建物が多いですね」

と長井は感心している。

加治は、最初にコーンウェル教授のもとへ長井を案内した。長井は、デイビッド相手に堂々と英語であいさつを交わしている。加治は、長井の英語力に感心した。自分とは大違いである。後で聞いて分かったことだが、長井は、かなり前から英会話を必死になって勉強していたらしい。

加治が驚いたのは、デイビッドが長井の研究の内容をよく知っていたこと

である。わずかの間に、論文などを取り寄せて勉強したらしい。日本の教授とは大違いである。

つぎに加治は、長井が所属するグループの長のジョージ・ギブソン教授のもとに連れて行った。ギブソン教授は二メートル近い大男で、長井の手をとって歓迎している。

「ドクター・ナガイと一緒に仕事ができるのは嬉しい」

そう言って握手をしている。

加治は、ふたりの様子を見て感動した。これこそが研究者の世界である。たとえ、顔をあわせたことがなくとも、互いの論文を読むことで、お互いのことを知っているのだ。長井もギブソン教授の論文は、かなり読んでいたようで、最初からふたりの会話ははずんでいる。

実は、発表論文を読めば、ある程度、研究者としての技量を推し量ることができる。ギブソンも長井も互いを高く評価している。それが傍で見ていて分かった。

ギブソン教授は、三日後の研究所のセミナーで長井の研究を紹介するようにと依頼した。そう言えば、加治の時も、同じようなセミナーを開いた。あの時は、本当に緊張した。自分の命運がすべて、そこで決まるように思っていたからだ。加治は、長井なら大丈夫だろうと安心していた。

加治は、つぎに実験室を案内した。長井は、実験設備が充実していることに驚いているようだ。長井は、かつて博士研究員として国立のエレクトロニクス研究所に滞在したことがあるという。その時の設備の素晴らしさに感激したようだが、ここは、それ以上だと言っている。

加治は、この研究所は州政府から高く評価されており、資金援助も豊富なのだと長井に説明した。実は、州政府は、さらに補助金の増加を申し出ている。もちろん、加治の研究論文が、ワールドサイエンスに掲載されたことが評価されたのだ。

長井のセミナーには、研究所のほぼ全員が集まっていた。総勢五〇人ほどであろうか。加治の時と同じである。みな、新人の研究内容には興味津々なのである。長井は、国際会議では、何度か発表したことがあると言っている。とは言っても、さすがの長井も緊張しているようだ。

長井は四〇分ほどかけて、自分の研究内容を発表した。加治は、その研究レベルの高さに驚いた。そして、直接関係のない分野であっても、その面白

さに思わず、引き込まれていた。特に、長井が発案した磁場効果の実験は興味深かった。長井の講演が終わると、参加者から大きな拍手が巻き起こった。ギブソン教授も

「素晴らしい講演だった」

とほめている。加治も、本当にいい講演だったと思った。

すると、参加者のひとりが手を挙げた。

「ドクター・ナガイ、あなたが最後に発表した磁場効果は、ドクター・タネダによって論文として、すでに発表されている。くわしくは読んでいないが、内容的にはまったく同じだと思うが、どうしてなのか」

と聞いてきた。長井は、返答に迷っている。

そこで、加治がかわりに答えた。

「ロイ、その論文のラストオーサーの名前を確認したかい」

ロイは首をかしげている。すると加治は

「シロイだよ」

と答えた。すると、ロイは納得したようだ。

「そうか、あの論文もシロイがドクター・ナガイの仕事を盗んだものなんだね。ひどいやつだ」

もう、この研究所では、加治の一件で、白井の悪行は広く知れ渡っていた。

セミナーの後、ギブソン教授の部屋にグループメンバーが集まった。加治とデイビッドも加わった。グループのメンバーは、みな、長井の講演に感動したと言っている。メンバーは、インド人のバラチャンドラン、キム、そしてイタリア人のアルベルトの三人であった。

加治は、時々、キムと街に出かけていた。気分転換である。ふたりとも、独身であるから、気があった。加治は、キムに日本に思いを寄せる女性がいることを話していた。キムは、マスの思いが通じることを願っていると言ってくれた。韓国料理店で飲む焼酎は格別だった。

キムは

「ドクター・ナガイの講演を聞いて、ある実験を思いついた。一緒に共同実験をしないか」

とさそっている。

キムが取り組んでいるのは、有機伝導材料である。その薄膜合成に挑戦しているのだが、なかなかうまくいかないようなのだ。磁場をかけてみたら、

うまくいくかもしれないと興奮している。

キムも、磁場効果については、一度、調べてみようと思ったことはあるのだが、有機材料には磁性がないから、たぶんうまくいかないだろうと最初からあきらめていたというのだ。ところが、長井の講演で、常磁性体や反磁性体でも効果があると聞いて、がぜん、興味がわいてきたという。

それから、ギブソン教授も含めて、五人は、今後の実験計画について話し合った。幸いなことに、オーランド大学にはマグネットセンターがあって、いろいろな超電導マグネットが自由に使えるという。加治も、久しぶりに興奮を覚えた。自分の結晶成長に磁場効果は使えないだろうか。加治はそう思った。

## アカデミックハザード 加治の物語 連載 10

ゲストハウス

それからまもなく、加治は、長井のゲストハウスに誘われた。長井の友人が、日本からおいしい吟醸酒をみやげに持ってきてくれたのだという。長井は、料理が好きで、自分でいろいろなものを調理するらしい。この日は、づくりぎょうざを用意して、吟醸酒と一緒に加治に振舞ってくれると言う。

加治の研究も順調に進んでいた。いまでは、研究所のスター的存在になっている。長井もすぐに研究所に溶け込んだ。長井の場合は、業績にすぐれているうえ、英語も堪能である。午後三時のコーヒータイムには、みな長井をつかまえたがっている。コーヒーを飲みながらディスカッションする。これが、いい研究のヒントを与えてくれるからだ。

吟醸酒を加治は長井とふたりで楽しんだ。キムと飲む韓国の焼酎もうまいが、やはり日本酒も最高だ。加治は、久しぶりの日本酒を堪能した。

長井は、酒の途中で、何かを思い出したように聞いてきた。

「そう言えば、加治君は、東都大学に居る種田という人間を知っているかい？」

「量子環境情報工学科に居た種田ですか」

「ああ、そうだよ」

「もちろん、知っています。種田兄弟は有名ですからね」

「兄弟？」

長井は、種田に兄が居るということは知らなかったようだ。

「ええ、兄の種田は、私が東都大学の博士課程に入った年に、学科の助教授に就任しました。弟は、私よりも、二つ年上で、東都大学でポスドクをしていましたので」

「そうだったの。実は、弟の種田は、僕のもとでポスドクをしていたことがある」

「そうなんですか。さぞ、苦労されたでしょう」

加治も種田のレベルの低さを知っている。白井の引きがなければ、誰も相手にしないだろう。

「ああひどかったね。やる気がないうえに、実験をさせると、すぐに装置を

壊してしまう。それが、東都大学の助教授に就任したらしいよ」

「ええ、知っています。ひどい話です」

「君もそう思うかい」

「弟の種田は、白井の命をうけて、僕から結晶の成長方法をこっそり盗み出しそうとした張本人ですから」

長井は驚いたようだ。加治は、白井一派がいかにかにひどいことをしたかを話した。

「僕の場合とよく似ているな。実は、その弟の種田が、自分の論文を盗んだ張本人だよ」

と長井は言った。加治も驚いた。そして、長井は話し始めた。

長井は、北東北大学の助教授の頃、国の科学研究に対する補助金が確保できずに困っていた。国の補助金は、ごく一部の連中が自分たちの思いのままに配分していて、長井のように後ろ盾のない地方大学の教員にはなかなか回ってこないのだ。

その時、白井から電話があった。白井が今度立ち上げる国家プロジェクトのメンバーに入って欲しいというのである。しかも、ポスドクまでつけてくれるという。そのポスドクが種田だった。長井は白井に感謝した。そのプロジェクトには潤沢な予算がつけられていたからである。

長井は、白井の期待に応えられるように頑張った。そして、期待通りの成果を挙げることができ、白井も喜んでくれた。長井は、大学院生の武田と一緒に、その成果を論文にまとめた。すると、白井が、その原稿を見たいと言ってきたのである。

長井は、白井のような大教授に論文を手直ししてもらえればありがたいと思い、原稿を渡した。しかし、白井から原稿が、なかなか戻ってこない。痺れを切らした長井は、白井の助言を待たずに、海外のジャーナルに投稿することにした。しかし、残念ながら、その論文はリジェクトされてしまう。すでに、同じ内容の論文が投稿されているというのだ。

長井は残念に思ったが、こういうことは研究の世界ではよくあることである。武田と次はがんばろうと誓い合った。

ところが、その論文がジャーナルに掲載されてふたりは驚いた。何と、それは、ふたりが苦勞して仕上げた論文そのものだった。しかも、その著者には、種田と白井のふたりが入っている。長井は怒った。そして、文化省に抗

議に出かけた。権力者の白井と対決するためには、役所に訴えるしかないと思ったのである。しかし、ひどいことに、役所も白井とグルであった。長井には、調べるといいながら、長井の訴えを白井に密告したのだ。これが理由で長井は大学を辞めさせられることになる。

失意の長井は私塾を経営した。白井に睨まれたのでは、研究の世界で生きているのは無理と思ったからである。しかし、白井の攻撃は執拗だった。この塾に通う生徒の親にデマを流し、この塾もつぶれてしまったのである。やけになった長井は、白井の日本学会賞の受賞パーティーに出かけ、看板にペンキをぶつけて白井を非難する演説を行った。

長井は、守衛に捕まるが、おとがめはなかった。その時、長谷川恵理という女性が現れ、吉野と板倉を紹介してくれたのだという。

吉野は、白井の非道なやり方に腹が立った。自分も、白井の罠にはまって、あやうく人生を棒に振るところだった。

「もし、吉野先生に出会わなければ、私は、いまごろ、文房具屋を継いでいたと思います。そして、わずかばかりの大学からの発注を頼りに生きるしかなかったでしょう」

加治は感慨深いものを感じた。そして実感した。長井と自分は、板倉と吉野のふたりによって窮地を救われたのだ。

「種田兄弟のお父さんは、東都大学の教授でした。もう退官していますが、白井とは密接な関係だったと聞いています」

おそらく、いっしょに不正を行っていたのであろう。

「実は、種田兄弟は、東都大学出身ではないのです」

「なんですって」

長井は驚いたようだ。

「ふたりともできが悪くて、都内の三流私大の工学部にようやくのことで受かったらしいのです」

「それが、どうして東都大学へ」

「からくりは簡単です。博士課程から東都大学に入るんです。実は、博士課程に入学するためには、試験があるのですが、それが形骸化しているのです。実際には、指導教官さえ入学を認めてくれれば、無試験で入ることができます。そして、ふたりとも白井が、自分の研究室に入学させたのです」

「兄の種田は、学生の間での評判は最悪でした。何しろ、講義がめちゃくちゃ

やですし、論文指導もろくにできないのですから」

しかし、種田兄弟も白井の後ろ盾のおかげで、そのうち東都大学の教授に昇進するのだろう。加治はやりきれないものを感じた。

「長井先生、いま日本では、板倉先生と吉野先生が必死に白井一派と戦っています。私も少しはお役に立てればと思っています」

「私に、何かできるでしょうか」

加治は、このまま白井たちをのさばらしておくことはできないと思っていた。このままでは、日本の将来があやうい。しかし、何ができるだろうか。

### 湯川からの手紙

長井がアメリカに到着してまもなく、加治はかつての恩師の湯川から手紙を受け取った。

「加治君、元気そうでなによりだ。

それから、ワールドサイエンス誌への論文掲載おめでとう。あの論文を読んで本当に感激した。

そして、謝辞の欄にわたしの名前をみつけた時は本当に驚いた。ありがとう。自分の一生の宝物だ。

わたしの不注意で、白井に成果をだまし取られた時、とても後悔した。自分はもうすぐ定年だからどうしても良かったが、加治君という将来の日本の宝を腐らしてしまうことが、とても残念だった。

自分たちに正義がある。そう思って、自分は行動を起こしたが、それを白井に逆手にとられてしまった。まさか、事務局長の赤西が白井とグルだったとは気づかなかった。自分の不明を恥じるばかりだ。

実は、わたしは、東都大学を退官したあと、都内の私立大学への再就職が決まっていたのだが、それも白井につぶされてしまった。もし、この話がうまくいけば、わたしは加治君を、その大学の助手として招へいするつもりだったのだ。それができたら、どんなに良かったろうか。しかし、いまの加治君の活躍をみると、つらい試練もあったが、アメリカに渡ったことが本当に良かったのかもしれないとつくづく思う。

白井は、自分の子飼いを使い、私が赴任予定の大学の教授会で、わたしが学術研究補助金で不正を行ったということを喧伝した。どこまでも卑劣なや

つだ。そのせいで、わたしの再就職の話はなくなった。しかし、けっして白井を侮ってはいけないとも思った。

恥を承知で、わたしは白井のところにあやまりに言った。そして、加治君の将来をどうかつぶさないで欲しいと懇願した。しかし、あいつは、加治君が自分に反旗を翻したとあって許してはくれなかった。そして、自分の目が黒いうちは、加治君を徹底的につぶすとまで言ったのだ。

わたしは、なんとか手がないか探したが、どうしようもなかった。旧知の友人を訪ねて、加治君の世話をしてくれるよう頼んだが、誰もが、白井のことをおそれて首をたてにふってくれなかい。つくづく自分の不甲斐なさが嫌になった。

その時、新任の吉野先生のはからいで、加治君がアメリカのオーランド大学に逃れたと聞いて、どんなに喜んだことか。わたしには、アメリカという選択肢は頭になかった。

しかも、今回の快挙だ。心の底から拍手喝さいを送りたい。

実は、失礼とは思ったが、先日、わたしは加治君のご両親のもとを訪ねてきた。そこで、驚くべき話を聞いた。なんと白井は、加治君のご両親に、加治君は研究者として将来性がないから、博士の道をあきらめるようにと注進していたのだ。どこまでも卑劣な奴だ。

わたしは、ご両親に、すべてのことを正直に話した。はじめは、信じてもらえなかったが、途中からは、わたし以上に白井のやり方に憤慨していた。加治君は、日本の将来を支える立派な人間だと、わたしは言った。そして、そんな人材をこの世に送り出してくれたご両親に感謝するとも。お母さんは、最後は、目に涙を浮かべて喜んでいたよ。

加治君のことは、もう心配ないと安心している。これからも、いい成果がどんどん出てくるだろう。ぜひ、がんばって欲しい。

いま、わたしは決心した。白井と闘うと。微力ではあるが、あんなひどい奴が日本の科学界を牛耳っているのを、決して許してはいけない。

実は、科学日本の記者がわたしのもとを訪れた際、白井が画策したことは、すべて彼に話した。わたしの再就職までじゃまをしたと聞いたときには、記者もあきれかえっていた。

さらに、記者には言っていないが、白井は陰で、相当な悪事を働いている。それを糾弾するつもりだ。いま、わたしは職についていない。でも、気力は

みなぎっている。その元気を加治君の論文からもらった。

最後に体には、十分気をつけて、研究にまい進して欲しい。

湯川茂樹」

加治は、かつての恩師からの手紙を読んで、感激した。湯川は、白井に失脚させられたあと、なにもかもが嫌になって、隠遁生活に入ったと聞いていたからだ。それが元気になっている。

そして、両親がなぜ、あれだけ加治に研究を断念して、家業をつげとせまっていたのかの謎が解けた。白井が裏で動いていたのだ。大学の偉い先生から

「あなたの息子は、研究の道では将来がない」

と言われれば、大抵の親は、子供に進路変更をせまるであろう。

白井という人間は、どこまでも卑劣であり、非情である。

出世する人間なんてそんなものだ、かつて板倉は言っていたが、それでは、日本の将来は暗い。

そして、加治は湯川の言葉が気になった。

「白井は陰で、相当な悪事を働いている。それを糾弾するつもりだ」

とある。湯川は、いったい白井の何をつかんだのであろうか。加治は、湯川が、あまり無理をすると、白井の逆襲にあるのではないかと心配していたのだ。

## 目撃

湯川は、久々に友人と飲んで、気分が高揚していた。それまでは、自分の人生の不幸をのろう毎日であった。そして、なによりも心配していたのは、加治の将来であった。彼のような優秀な研究者は、何十年にひとりの逸材である。それが白井のようなばかにつぶされてしまった。

ところが、加治はしたたかだった。アメリカに渡り、そして、その成果がワールドサイエンス誌に掲載されたのだ。白井にだまし取られた結晶であったが、今回の論文で、加治こそが、真の開発者であったことが、誰の目に明らかとなった。

家にこもりがちであった湯川だが、大学時代の友人に連絡して、ひさびさに酒をくみかわした。昔話に花がさいて、少々飲みすぎたかもしれないと思い、帰宅しようと、地下鉄の駅に向かう途中で、湯川は意外なカップルに出くわした。

「白井と、あれは確か事務に入った佐々木祥子という子じゃないか」  
なんで、ふたりがこんなところにいるのだ。湯川は不思議に思った。

みると、佐々木は、白井にやさしく微笑みかけている。白井も、普段見せたことのないような笑顔である。まるで親子のようだ。

ここで、佐々木という名前が湯川の記憶を刺激した。

「なんで思い出さなかったんだ」

湯川は、かつて学科事務室で働いていた佐々木頼子のことを思い出した。明るく、やさしい子で、みんなから好かれていた。そして、気づいた。佐々木祥子は、佐々木頼子によく似ている

「あの噂は本当だったのか」

佐々木頼子は、学科の懇親旅行をさかいに、急に明るさを失った。そして、まもなく学校をやめていった。その時、白井が佐々木をレイプしたのではないかという噂が流れた。湯川はまさかとは思ったが、佐々木の憔悴があまりにもはげしいので、心配していた。

その後、風の噂で、佐々木頼子が子供を生んだと聞いた。その父親は白井ではないかとささやかれてもいた。いまのふたりの様子は、まさに親子そのものである。

しかし、あの佐々木祥子の屈託のない笑顔はどうのなだろうか。自分の出生の秘密をしっているのだろうか。いや、知っていたら、白井の前で、あんな顔はできないはずだ。

湯川は完全に酔いがさめていた。そして、家に帰ると、古いアルバムを持ち出した。何枚かページをめくって、目的の写真をみつけた。あの懇親旅行のときの集合写真だ。確かに、あの佐々木祥子という女性は、佐々木頼子に似ている。湯川は、確信した。

## 白井家

白井は久々の休日を自宅で過ごしていた。最近では、毎晩のように飲み会が

ある。大学での地位がますと、陳情まがいの接待が増えてくる。白井は、タバコをかかえて、自分の部屋に入ろうとした。妻の幸江は、大のタバコ嫌い、家の喫煙スペースは自分の書斎しかない。

家では、妻との会話はまったくない。もともと愛情などひとかけらもない相手である。子育てが終わると同時に、実質的な夫婦関係も終わっている。妻の幸江も白井のことは粗大ゴミぐらいにしか思っていない様子だ。

ところが、その朝、白井が自分の書斎でタバコをすおうとしていると、妻の幸江に呼び止められた。

「あなた、ちょっと話があるんですが」

「なんのことだ」

白井は驚いた。妻から話しかけられることなどめったにない。

「この家の土地のことなんですが」

「家の土地？」

「ええ、いままでは、所有権が半々でしたけど、近いうちにすべてわたしに譲渡してほしいんです」

白井は、妻の言っていることが理解できなかった。

「どういう意味だ」

妻は、じろっと白井をにらんだ。

すると、妻はこう言い放った。

「憲治と史朗に、遺産として渡るようにしておきたいの」

「いまのままで、俺が死ねばそうなるだろう」

「そうかしら。外に隠し子をつくっているようなひとに、そんなことが言えるの？」

白井はどきっとした。妻は祥子のことを言っているのだろうか。確かに、正式に親子関係が確認できたら、息子などよりも娘の祥子に全財産を分与したい。それが白井の希望である。

「隠し子とは、いったいなんだ」

白井は、思わず怒鳴った。ここは、しらを切りとおすしかない。

「しかも、職員をレイプして生ませた子供でしょう。なんて恥知らずなんでしょう」

白井はあせった。なんで、そんなことまで知っているのだ。

「それは、とっくに時効だよ」

そう言ってから、白井はしまったと思った。これでは、自分から白状したようなものだ。

「この件は、おじの東郷にも話しておきます。よろしいですね。土地の権利譲渡。お願いしますよ。もし、拒否される場合には、こちらにも、それなりの覚悟があります」

そう言うと、妻は部屋を出ていった。

その前日に、妻の幸江のもとに匿名の手紙が届いていた。そこには、白井がかつて行ったレイプ事件のことと、そこで生まれた子供のことが書かれていた。しかも、祥子と楽しそうに歩いている白井の写真も同封されていたのだ。

湯川の書いた手紙であった。

「できれば、こんな卑怯な手は使いたくない。しかし、白井のやり口は、あまりにもひどすぎる。非道には非道で対抗するしかない」

そう、湯川は思った。

はじめは、取材に来た記者にこのことを打ち明けようかと悩んだ。しかし、もし、この話が表ざたになると、佐々木祥子が苦しむことになる。

悩んだ末、白井の妻に密告することが最良の手段と判断したのだ。

## 板倉の作戦

加治はインターネットの掲示板を覗いていた。最近、日本のネットでは、白井たちの悪事が暴かれようとしていた。これには、板倉が相当からんでいようだ。加治は板倉のことが心配だった。

吉野からの電子メールには

「板倉先生はついに行動に出るようだ」

と書いてあった。

加治は長井のゲストハウスにやっていた。板倉は、山下事件の真相をあばこうとしている。山下教授は、板倉の師で、右翼によって刺殺された人物である。

加治は、自分のパソコンを抱えていた。そして、長井に日本のあるサイトを見せた。「東都大学の悪党、東郷と白井の年貢の納め時」というタイトル

でスレッドが立ち上がっている。東郷というのは、東都大学の学長で、実際に裏で糸を引いているのは東郷と言われている。そのサイトによると

「東郷と白井が、自分たちの不正を隠すために、右翼に擬した債務破綻者を使って山下先生を殺害した証拠となる山下メモが偶然見つかった」と書いてある。

「山下メモは、先生が住んでいたマンションの解体工事の際に、屋根裏から、解体業者が偶然発見した。業者は、最初のごみかと思ったが、きれいな包装紙でていねいに包まれていたので大事なものと思い、管理人に渡したところ、山下先生の遺族のもとに届けられた。そして、遺族から、山下先生を支援し、悪を糾弾しようという仲間のもとに届けられたのである」

「山下メモには、驚くべきことが書かれていた。山下先生を殺害した一味のボスが現民自党代議士で、外国大臣の平岩泰三であることがわかったのだ。しかも、メモには、平岩が東郷らと組んで、どのようにして不正に金を搾取したかが詳しく書かれている。まさに衝撃のメモであっ。」

このスレッドは、かなりのインパクトがあったのか、アクセス数がすでに二〇〇〇件以上になっている。

それから数日して、加治は長井に呼ばれた。長井のもとに日本からファックスが届いたという。長井は

「妻の由美子がこんな週刊誌の記事を送ってくれた」と言って、コピーを見せてくれた。

「現役大臣の大罪」というタイトルになっている。週刊真実という雑誌で、スキャンダラスな記事も載せるが、その内容には定評があることで知られた雑誌であった。そこでは、現役大臣の平岩が、かつて、東都大学の研究所建設にからんで巨額の裏資金を得、その罪を糾弾しようとした大学教授を畏にはめて、社会的地位を貶めたうえで、抹殺したという内容となっている。そして、いまネットで話題の山下メモのコピーとして、一部、具体名は伏せられていたが、本物と同じものが掲載されている。なお、記事には、東都大学の現学長の東郷と、現工学部長の白井もその一味であると糾弾している。さらに週刊誌は、山下教授は世界的に有名な教授であり、日本という国は、日本の宝をその暗部に巢食う醜い連中によって葬り去ってしまったとも書いてある。

加治は、その記事を読んで驚いた。

「白井がひどい人間だとは知っていましたが、まさか、バックに、あの東郷学長がいたとは驚きです。なかなかの人物と思っていましたから、とても残念です」

それから、数日して、日本から長井のもとにビデオが届いた。長井は加治を誘って、いっしょに、その録画を見た。

「山下事件の右翼がテレビで真相を激白」

というタイトルが踊っている。山下殺害犯がテレビに映っていた。

「わたしは、掛下と申します。右翼でも何でもありません。当時は、下町で小さな機械加工の工場を経営しておりました。しかし、不況で、受注が減り、資金繰りに困ってしまい、サラ金に手を出してしまったのです。気がついたときには手遅れで、たった二百万円の借金が、いつのまにか五千万円まで膨らんでいました。借金取りが毎日のように押し寄せ、娘の学校にまで脅しに来るようになったのです。わたしは一家心中を考えていました。そんな時です。ある仕事をすれば、借金をチャラにしたうえに、報酬までくれるというのです。しかし、その仕事を聞いて驚きました。人を殺せというものです。とても飲める話ではありません。わたしは、最初は断りました。しかし、娘がかわいくないのか、家族がどうなってもいいのかと脅されました。かなり悩みましたが、結局、引き受けることにしました。過去に前科がないから、刑期は短くて済む。それに、警察やマスコミも味方だから安心しろと言われました。

決行の日は、ある薬を呑まされて興奮状態になっていました。そして、驚いたことに、刺したときの台詞まで用意されていたのです。わたしは、右翼の活動家ということにされました。山下先生を刺した時の記憶はほとんどありません。興奮状態でしたし、薬が効いていたのだと思います。

本当に驚いたのは、警察がすばやく私を保護してくれたのと、マスコミが、わたしをヒーローみたいに扱ってくれたことです。おかげで、借金はチャラになったうえ、口止め料として一千万円の振込みもありました。刑期も五年ほどですみました。すべて筋書き通りです。しかし、家族とは、うまくいきませんでした。娘は、それとなく真相を嗅ぎ取っていたようで、私とは話もしてくれません。わたしが右翼の活動家でないことは、家族がいちばんよく知っています。その後、妻とは離婚しました。

私が本当に気の毒だったのは、亡くなられた山下先生のご家族です。マス

コミからも叩かれ、犯罪人のようにじゃけんな扱いを受けたと聞いていました。私は、山下先生に、何のうらみもありませんでした。只々、借金をチャラにしてもらいたい、その一心だったのです」

レポーターは、今日、テレビに出る決意をしたのはどうしてかと聞いた。すると掛下は

「私は、口止め料として一千万円を受け取りました。その時、もし、このことを口外したら、わたしの命はないとも言われました。わたしだけでなく、家族にも危害が及ぶと言って脅されました。しかし、家族とは別れ、わたしは独り身です。借金のためとはいえ、人をあやめてしまった。もう、命は惜しくありません。

ただし、当時、私は、この事件の裏に、国会議員、当時は官僚でしたが、平岩や、東郷、白井といった連中がからんでいるとはまったく知らされていませんでした。ある記者から、取材を受けたときも、サラ金業者からの依頼としか思っていませんでした。今回の一連の報道で、真実がある程度分かった気がします。

そして、今回、決心がついたのは、その記者を通して、山下先生のかつての教え子という方の話を聞いたからです。東都大学の助教授の板倉先生です。先生は、山下先生は日本が世界に誇れる数少ない研究者であったと言われました。そして、先生が不良だったときに、山下先生と出会い、研究者の道を歩みだしたと。先生の話は感動的でした。それと同時に、わたしは、なんとひどいことをしてしまったのだろうと、とても後悔しました。日本の宝を葬りさってしまったのです。」

加治は、驚いた。板倉は、山下先生との出会いを掛下に話したのだ。しかも、自分の名前をテレビで出してもよいと言ったに違いない。当然、大学を辞める覚悟であろう。加治は、板倉には大学にとどまって欲しいと願っていた。

それから、掛下は、レポーターの質問に答えるかたちで、すべてを語った。レポーターは、その質問の合間に、それまでに明らかになっている東都大学を舞台にした裏金づくりの実態に関しても取り混ぜながらインタビューを続けた。それを聞いた多くの視聴者は、山下事件が、平岩たちが自分たちの悪事を隠蔽するために犯した卑劣な犯罪であること、そして、山下こそが、高潔な研究者であったことを理解した。

そして、レポーターは、明日は、もっと驚くべき人物が登場すると番組の最後に語った。加治は、いったい誰だろうかと思った。そして、つぎの日に、その番組を録画したビデオが届いた。

「テレビサンの朝いちばん」という番組である。司会者が興奮の面持ちで、伝えている。

「本日は、番組の内容をすべて変更して、いま話題の山下メモの実物をみなさんにお見せします。そして、驚くべきひとが登場します。ご期待ください」そこに黒づくめのドレスに身を包んだ美しい女性が登場した。

「それでは、さっそく紹介させていただきます。こちらは、いま話題となっている山下先生のお嬢さんの山下えりさんです」

スタジオに居るゲストは、一様に驚きの声を上げた。山下えりは、テレビでも話題になっていたが、その行方は杳として知れなかった。それがついに登場したのだ。

加治は、板倉の作戦に感心した。ネットで噂になっている山下メモを持って登場するのに、えりほどふさわしい存在はない。それが、まぎれもなく本物であるということを証明することにもなる。

そして思わず口に出した。

「山下先生のお嬢さんはすごい美人ですね」

長井には聞こえなかったようだ。そう言ってから、加治は心の中でわびた。

「佐々木さん、ごめんなさい。自分にとっては佐々木さんがいちばんです」と。

司会者は、えりが持ってきたものが、本物かどうかたずねた。えりは、これは、父が自分にあてた手紙とともに出てきた本物であると宣言した。そして、いよいよメモの本物が公開された。そこには、平岩たちが、いかに不正を働いたかが書かれている。テレビ局は、ごていねいにも、見やすいように大きな図を用意して、金の流れが分かるようにしていた。視聴者は、いかに不正に裏金がつくられたかを、よく見てとることができた。

えりは、その後もテレビに出続けたようだ。ワイドショーにも登場し、父の潔白を主張した。テレビ局も、山下がいかに高潔で、優れた研究者であったかということ、その業績とともに、海外の研究者のインタビューを交えながら紹介した。

テレビ局の記者は、警察や検察にもインタビューに訪れたが

「すでに決着した事件であり、犯人も刑期を終えている。あえて、再捜査する予定はない」

というコメントを出した。記者は、平岩へのインタビューも試みたが、事務所の担当者は、本人の行方が不明として応じなかった。

加治は、その後、インターネットで平岩泰三が外国大臣の職を辞したことを知った。もう政治家としても終わりであろう。

加治は長井に聞いた。

「白井と東郷はどうなるのでしょうか」

「ワイドショー的には有罪だけど、すでに裁判で決着した事件だから、逮捕はされないのではないかな」

「残念ですね」

「それよりも、板倉先生がどうされるのか心配だね」

「板倉先生は大学に辞表を提出したようですが、もう、こちらの大学に採用されることが決まっているようです」

「板倉先生ほどの逸材であれば、どこでもとってくれるだろうからね。」

「それと、遅れてしまいましたが、長井先生、アソシエイト・プロフェッサーへの就任おめでとうございます」

長井は、オーランド大学から準教授への就任を打診され、承諾していた。そして、長井はうれしそうに加治に話した。

「今度、妻の由美子と娘の洋子と呼ぶことにした」

「これからは、楽しくなりますね」

長井は、すでに家族が住む家を決めていた。加治も、長井に連れられて見に行ったことがある。日本では考えられないほどの大邸宅だ。

## アカデミックハザード 加治の物語 最終話

白井の失脚

加治は、吉野からのメールを読んで驚いた。白井が大学を辞めることになったという。

白井が所属する環境量子情報学科の末永事務長が内部告発をしたらしいのだ。白井が、いままで行ってきた不正の数々を証拠とともに、大学本部に告発したようだ。

これまでならば、大学当局は難癖をつけて、白井が失脚することはなかっただろうが、板倉が職をかけてまで告発した行為が功を奏したのだ。残念ながら、板倉は東都大学の助教授の職を辞していた。しかし、そのおかげで、東郷や白井の悪事が世間の知るところとなったのだ。そして、下手に白井をかばえば大学そのものが非難される。

白井は大学に辞表を提出した。ただし、内部告発をしたという罪で末永事務長も罰せられることになった。吉野は憤慨して、大学を糾弾しようとしたが、事務長はそれを制し、潔く辞表を大学に提出したという。

吉野のメールには、加治に日本に帰ってきて欲しいと書いてあった。加治は悩んだ。ここでの研究生活は快適である。しかし、学科の建て直しも必要であろう。種田のようなバカが助教授をしているようでは、先がない。それに、加治が思いを寄せる佐々木さんが学科の事務に居る。

いずれ、いつかは日本に帰りたい。加治はそう思っていた。

長井に白井の失脚を伝えると、長井は複雑な顔をした。確かに、白井の失脚は喜ばしいことである。しかし、悪いのは白井ひとりではない。他の悪人たちは、のうのうと生き延びている。

加治は、長井の引越しの手伝いに行った。長井の妻の由美子は、女優のように可憐だった。長井は、娘の洋子の成長に驚いていた様子だ。子供の成長は速い。由美子は、あまりにも家が大きいのに驚いていた。大きな庭もついている。

「こんなに大きいと、家の掃除が大変ね」

などと文句を言っている。

洋子は犬を飼いたいと騒いでいる。というのも、日本の家では狭くて犬が

飼えなかったからだ。由美子の実家では、コリー犬を飼っていた。洋子は、由美子の実家に行くと、一日犬と遊んでいるという。

落ち着いたら、由美子の両親がアメリカに来るといふ。由美子の父はずっと、海外旅行を避けてきた。飛行機が苦手なのだ。しかし、孫の顔を見たくて、アメリカ行きをしぶしぶ承諾したという。由美子の母は大喜びだ。念願の海外旅行がかなうからだ。

加治は、長井一家をみて微笑ましかった。そして、うらやましくもあった。長井は奥さんとお嬢さんに囲まれて、とても幸せそうだ。自分にもいつか、このような暖かい家庭がつかれるのだろうか。

そう言えば、もうすぐ、板倉がアメリカに来ると聞いた。時間が空いたら、オーランド大学にも挨拶に来るといっている。加治にとって、吉野と同様に、板倉は命の恩人である。いくら感謝しても感謝しきれない。

## 再会

加治は、朝から落ち着かなかった。今日は、オーランド大学において、プロフェッサー・イタクラの講演会がある。久しぶりの再会であった。板倉は、加治にとって命の恩人であるだけではない。白井という巨大な悪に立ち向かって、それを退治してくれたヒーローである。

板倉は、白井一派と戦っている自分はドンキホーテのようなものだといっていたが、そんなことはない。立派に相手を倒した。最近、吉野からのメールで、東郷が学長選で惨敗したことを知らされていた。新学長は、旧執行部の不正はすべて明らかにすると宣言している。東郷から、大学の会計を任されていた事務局長が会計帳簿を持って失踪したらしい。いずれ、司直の手が伸びるであろう。

加治は、長井と一緒に、加治のヒュンダイに乗って、オーランド空港まで板倉を迎えに行った。ゲートから出てきた板倉は以前と変わらなかった。ちょっと日焼けしたのか、ますます仁王様に似てきている。

加治は、車が小さいことを板倉に詫びた。板倉は、大きいからだをかがめるようにして助手席に収まった。

長井は、板倉にあいさつしている。

「板倉先生、お久しぶりです。ようこそ、オーランドへいらして下さいました。先生には感謝しても感謝しきれません」

「こちらこそ挨拶が遅れました。長井先生は、オーランド大学の準教授に就任したんですね。おめでとうございます。先生ほどの実力があれば、当然、そうなるだろうと思っていました」

「おそれいります。これも、すべて板倉先生のおかげです」

「そういえば、加治君は東都大学に戻ることが決まったんだってね。おめでとう」

加治は

「博士号を持っていないわたしをいきなり専任講師にするとってくれたのです。ありがたい話です」

吉野は、日本に戻れば、すぐに博士号を取得できるとってくれた。

実は、加治の人事に関しては、東都大学内部でも、かなりもめたらしい。しかし、事情が事情であるだけに、学科主任の山根教授の説得で多くの教員が賛成してくれたのだ。山根は、いま学科の改革に取り組んでいる。

助教授の種田は、最後まで強固に反対したらしい。しかし、吉野が、学科に所属している教員の業績表一覧をつくって、人事会議の場で回覧した。そして、加治の業績も一緒に示した。学科の多くの教員よりも、加治の業績の方がはるかにすぐれているのは一目瞭然だった。

山根は、

「この業績では、東都大学の助教授として恥ずかしすぎる。もっと、研究に励んで、成果を出すようにしなさい」

と逆に種田を叱責したという。当たり前だ。いくら博士号を持っているといばってみても、業績がないのではしかたがない。

東郷が学長を辞めてから、ようやく、東都大学でも教員評価制度の導入が始まったようだ。業績のない人間には、退職勧告も辞さないことになっている。白井一派には、住みにくい世界となりつつある。

板倉は、加治をからかうように

「恋の力は、やはり大きかったようだな」

と言った。

「何を言っているんですか、板倉先生は」

加治は、恥ずかしそうにしている。

実は、加治は佐々木さんへの思いを、板倉に一度だけ相談したことがある。その時、板倉は、佐々木さんをあきらめるように言った。当時、佐々木さん

が白井の隠し子ではないかという噂があって、板倉は、それを心配したのだ。板倉は、加治の気持ちを察して、この噂のことは内緒にしておいた。

しかし、吉野が学科事務長の末永から告白を受けて、真実がわかった。佐々木さんの母と婚約していた末永は、一度だけ関係をもった。その時にできた子供が祥子であったのだ。白井は、そうとは知らずに、うまく騙されていたことになる。

板倉は

「確かに、あんなブ男から、あんなきれいな子は生まれないよな」

と感想をもらした。

このことを聞いて、板倉の考えは変わった。加治と佐々木さんならお似合いである。板倉は

「佐々木さんには、加治の気持ちをそれとなく伝えておいた。まんざらでもなさそうだったよ」

と言った。

「えっ！そんなことを言ったのですか」

末永は、佐々木さんに自分が父親であることを告げたという。佐々木さんは大喜びだったらしい。今では、一緒に暮らしているということだ。

吉野は、板倉の誤解のことも含めて、メールで加治に知らせた。

加治は大喜びだった。もし、佐々木さんが白井の娘だとしたら、それこそ敵の娘を恋したことになる。

「末永さんは、娘をアメリカには嫁がせたくないと言っていたが、加治君が日本に帰ってきたら問題ないだろう。頑張れよ」

と言って、板倉は、加治の肩をたたいた。

加治はどう返答したらいいか、困っている。佐々木さんの気持ちを確かめたわけではない。しかし、当たっていただけろという気持ちになっていた。

「それと、日本に帰ったら山根と吉野を支援してやってくれ。相当、苦労しているようだ。いまだに、学科の教員には白井の子分の数の方が多いからな」

吉野は、加治に

「ぜひ日本に帰ってきてくれ」

と何度も電子メールで連絡してきていた。

加治が帰国を決意したのは、吉野の積極的な誘いもあったが、佐々木さんのことが心のどこかに引っかかっていたことも確かである。

板倉の講演は、大学の大講堂で行われた。いま、最も活躍している研究者のひとりということで、講堂は満員となった。講演のタイトルは「マクロとミクロの接点-統計力学の新手法」であった。

加治は板倉の講演に感動した。その内容もさることながら、流暢な英語はネイティブと変わらない。自分もいつかは、板倉のように満員の聴衆を前に堂々と講演できるような研究者になりたい。加治はそう誓った。

## 帰国

加治が乗った飛行機は時間通りに成田に着陸した。久しぶりの日本だった。加治は気持ちが高ぶるのを感じた。そして、佐々木さんのことを思った。彼女はどのようにしているのだろうか。

税関の手続きを終えて、到着ゲートを抜けると、驚いたことに吉野が迎えに来ていた。加治は感激した。吉野にはメールで到着便を告げていた。しかし、まさか成田まで迎えに来てくれるとは思ってもいなかったのだ。

「吉野先生、ありがとうございます」

加治は、吉野のもとへ駆け寄った。自分は、この人のおかげで助かった。しかも、今度は大学への就職でも奔走してくれた。感謝しても感謝しきれない。すると、吉野の横にいた女性がこう言った。

「加治君、お帰り」

加治が、見たことのない女性だ。なぜ、この人は、自分の名前を知っているのだろうか。それに、ものすごくきれいだ。どこかで見たような記憶はあるが、もし会っていたら、こんな美人を忘れるわけがない。

すると、吉野はにっこり笑って、その女性に話しかけた。

「ほら、えり、僕が言ったとおりだろう。加治君だって、えりってことが、分からなかったじゃないか」

ふたりは、互いに見つめて笑いあった。まるで恋人同士のような。そして、吉野は、種明かしをするように

「この人は、長谷川恵理さんだよ。学科の事務で働いていたから覚えているだろう」

と紹介した。

「長谷川さん！」

加治は驚いた。あのサザエさん頭で、度の強いメガネをかけていた、あの長谷川という事務員がこの人なのだろうか。あまりにも印象が違いすぎる。加治はあらためて、長谷川をまじまじと見た。

吉野はにこっと笑うと

「いや、加治君のおかげで助かったよ。実は、ある事でえりに責められ続けていたんだ」

しかし、加治には事情が飲み込めなかった。それよりも、ふたりはどういう関係なのだろうか。

それを察したのか、吉野はこう言った。

「いま、僕らは婚約している。来年には式を挙げるつもりだ」

「え！そうなんですか」

加治は本当に驚いていた。吉野先生が、あの事務のさえない長谷川さんと結婚する。

「でも、吉野先生のおめあては佐々木さんじゃなかったんですか」

吉野は、それを聞いてあわてたようだ。横で、長谷川が笑っている。

「ほら、加治君だって、そう思っていたでしょう。あまりにも露骨だったわよね。吉野先生の態度」

加治は肯いた。

吉野は

「おい、加治君、余計なことは言わないで欲しいな。それに、加治君こそ、佐々木さんに好意を寄せているんだらう。板倉先生から聞いたよ」

加治は、自分に矛先が向いてきたので、少しあわてた。どうやら、自分が佐々木さんに好意を寄せているということは周知のようである。

すると、長谷川さんはこう言った。

「加治君、安心して、佐々木さんは吉野先生のことはあきらめているわ。それに、いまはつきあっている人はいないそうよ」

それを聞いて加治は少し安心した。

三人は成田エクスプレスで東京に向かった。

「加治君のご両親も首を長くして待っているでしょう」

と長谷川さんは言った。両親は成田まで来るといっていたが、加治は断った。

「両親は、吉野先生には感謝しても感謝しきれないと言っています。実は、後から聞いて驚いた話なのですが、白井は、僕の両親に、加治は研究者とし

て見込みがないから、博士号をとるのはあきらめて、家の文房具屋を継がせたほうがいいと忠告していたようなのです」

「そうか、ひどい話だな」

「ええ、両親もいまは怒っています。あんな人間を信じた自分たちがばかだったと。東都大学との取引もやめたそうです」

「そうか」

吉野は、大口の取引を断るというのは加治の両親にとっては、大変な決意だったろうと思った。これで、店が傾くかもしれないのだ。

加治は長谷川を見ていてあることに気づいたようだ。

「もしかして、長谷川さんは、あのテレビに登場していた山下えりさんではないですか？」

加治は、長井の奥さんが録画してアメリカに送ってくれたビデオのことを思い出した。東郷や白井を糾弾するために登場した山下えりが、いまの長谷川そっくりなのだ。

「加治君は、あのテレビを見ていたの？」

と長谷川は聞いてきた。

「ええ、長井先生の奥さんが録画ビデオをアメリカまで送ってくれたのです」

吉野は

「確かに、この人が山下えりさんだ」

「やはりそうですか。ということは、長谷川さんは山下先生のお嬢さんだったんですね」

「そう。そして、えりとは僕がアメリカに居たときに、つきあっていた」

「そうだったんですか」

加治は納得したようだ。

山下えりが吉野のもとから姿を消したのは、父の山下の死があったのである。

新しい研究所設立を悪用して裏金をつくらうとしていた東郷たちのたくらみに気づいた山下はそれを糾弾しようとした。しかし、逆に東郷たちのわなにはめられ、最後は非業の死をとげたのである。世の中の人間は、山下が不正をはたらいたと勘違いし、その家族も非難をあびることになったのだ。

「えりは、お父さんの名誉を回復するために、白井達を監視していた。その

ために、変装までして学科の事務にもぐりこんでいたということさ。派遣の職員としてね」

加治は驚いた。そんな裏があったのだ。

「それなのに、僕が、事務室でえりに最初にあった時に気づかなかったと言って、僕を責めているんだよ。でも、良かったよ。もし、加治君が気づいていたら、今頃、どれほど責められていたか。ありがとう」

と吉野は言った。

そして、加治を見て

「よく、日本に帰ってきてくれた。これからは、学科運営も含めて手伝って欲しい」

そう吉野は加治に言った。

「もちろんです」

加治は決意を新たにした。

三人は、東京駅で別れた。吉野と長谷川のふたりは、これから食事をするという。長谷川は加治にこう言った。

「吉野さんたら、忙しい忙しいといって、全然デートに誘ってくれないの。加治君のおかげで、思わずデートができてよかったわ」

そう言って、ふたりは去っていった。

## 量子環境情報学科

加治は、東都大学の量子環境情報学科の事務室に来た。自分が博士課程まで過ごした懐かしい場所だ。アメリカの大学に比べると、みすぼらしいが、愛着はひとしおだ。まだ、朝の八時半である。加治は事務の中をのぞいた。そして、驚いた。そこには、自分がずっと思い続けている女性が居た。

佐々木さんは、加治を認めると、にこっと笑いかけてきた。

「加治先生、おはようございます」

加治は先生と呼ばれて驚いた。そうか、今日から自分は、この学校の教員になるのだ。

「佐々木さん。お久しぶりです」

もっと、気の利いたあいさつをしたいと思ったが、こんな言葉しか出なかった。

佐々木さんは

「加治先生、よかったですね。また、戻ってこられて」

と言ってくれた。その通りだと加治はしみじみ思った。自分は一度、自分の人生をあきらめた。それなのに、この場に立っている。

佐々木さんは、いまから加治の部屋に案内すると言ってくれた。そして、かつて吉野が使っていた部屋に案内してくれた。

「ここが自分の部屋か」

加治は気のひきしまる思いがした。この大学に、自分の研究室ができるのだ。部屋には、加治講師室という表札がでている。

ドアを開けて加治は驚いた。前に加治が吉野を訪ねてきたときには、部屋の大きさはこの半分だった。確か、部屋の真ん中に不自然なベニヤ製の間仕切りがあったが、いまはそれが無い。こんな広い部屋を自分ひとりで使えるのだ。後ろで、佐々木さんが笑顔を向けてきた。

「吉野先生に頼まれてまして、パソコンの他、必要な事務用品は準備させていただきました。中古で申し訳ありませんが」

とんでもないと加治は首を振った。ここまでしてくれているとは思ってもみなかった。すでに、電子メールアドレスも準備してくれているという。

そして、佐々木さんは、加治に小さな箱を手渡した。加治は、いったいなんだらうと思って箱を開けると、名刺が入っている。

「東都大学工学部量子環境情報学科 講師 加治雅人」

そう書いてある。加治は感激した。

「吉野先生の話では、加治先生はすぐに博士号をとることになるので、少し無駄になるかもしれないとおっしゃられていましたが、名刺は、すぐに必要なものだからと私が準備しました」

思わず、加治は佐々木さんの手を握って

「本当にありがとうございます」

と言った。そして、自分の大胆な態度に驚いて、すぐに手を離した。どうも、アメリカで生活していると、簡単にスキンシップをはかってしまう。

加治がほっとしたのは、佐々木さんが、それほど迷惑そうな顔をしなかったことだ。加治は、心の中で叫んでいた。

「よーし頑張るぞ」

希望に満ちた一日が始まった。佐々木さんは、そんな加治を頼もしそうに見

ている。

加治は、山根のところにあいさつに言った。なんと、山根は、白井が使っていた部屋に移っていた。加治が大学院に進む時に、呼ばれた部屋だ。秘書の席には、柳井さんが座っている。

「おはようございます。山根先生はいらっしゃいますか」

すると、山根がちょうど会議から戻ってきた。山根は、加治を見るとにこっと笑って、握手を求めてきた。

「加治君。よく来てくれた。期待しているよ」

そう言って、手を強く握った。そして

「悪いが、今から学長と打ち合わせがある。また、今度ゆっくり話をしよう」と言った。山根は忙しそうだ。

東郷は、学長選挙で落選した。白井の失脚から急にその勢力を失ったのも一因であるが、東郷らの悪事を糾弾する本が出版されたのが決定的であった。いまは、改革派の人間が学長についている。

すると、山根は柳井さんに向かってこう言った。

「そうそう末永さん。例の書類のコピーは、今日の午前中までに整理しておいてください」

と。一瞬、加治はわが耳を疑った。山根教授は、確かに「末永さん」と呼んだ。これは、どういうことなのか。

吉野は、声を上げて笑っている。

「そうか、加治君は知らなかったんだな」

実は、柳井さんは、前事務長の末永さんと結婚していたのである。

### 小さな恋の物語

加治は、吉野のおかげで、帰国後すぐに博士号を取得した。加治の博士論文は、すべての審査員から、絶賛された。そして、すぐに助教授に昇進した。学科は、山根と吉野が中心になって、改革を進めている。

白井が牛耳っていた頃とは、すっかり大学は変わった。

加治が残念なことは、この場に板倉がいないことだった。あの先生がいてくれたら、この学科はさらに素晴らしいものになっていただろう。板倉の活躍は加治の耳にも入っていた。そして、長井の活躍も。

加治は思い切って、佐々木さんを食事に誘った。

「佐々木さん、もしよろしければ、今度の金曜日に食事をしませんか」  
断られるかと思ったが、佐々木さんは

「加治先生に、食事に誘っていただけるとは光栄です」  
と応じてくれた。

加治は吉野に相談した。どのレストランにすればよいかを。吉野は、迷わず、赤坂にあるホテルの屋上のレストランを紹介してくれた。

「あのレストランは料理も最高だが、もてなしも素晴らしい。そして、なにより、支配人が立派なひとだ」